

の青い星の預言



Miriam
Delicado

青い星の預言

「ホピの預言」と等しい情報を地球外生命体に伝えられた
ミリアム・デリカドの信じられない物語

著 者：ミリアム・デリカド

表紙絵：コリー・ウォルフ

校 正：リー・ゴッホ

翻 訳：小林よしこ

校 正：リー・ゴッホ

表紙絵：コリー・ウォルフ (<http://www.coreywolfe.com>)

著 者：ミリアム・デリカド (<http://www.bluestarprophecy.com/>)

グレートギャザリングのサイト (<http://www.thegreatgathering.org/>)

訳者：小林よしこ (<http://www.youzi.info>)

翻訳協力：高山尋好／R・K・スムリガ

本書のオンライン本入手先：<http://www.trafford.com/07-1189> orders@trafford.com

©コピーライト 2007 ミリアム・デリカド

本書のいかなる部分も著者の書面による許可なく複製、検索システムへの保存、転送、全ての形態や手段、磁氣的、機械的、複写、録音、その他を行ってはなりません。

図書館への注意：本書のカタログはカナダのアーカイブにて利用可能です：

<http://www.collectionscanada.ca/amicus/index-e.html>

カナダ, B C, ビクトリアにて発行

英語版 ISBN:978-1-4251-3207-1

弊社トラフォード社は全ての人々が、個人と企業双方の責任として、環境と社会に相応しい選択をすると信じています。トラフォード社の本を購入し、出版サービスを利用する度にこの責任を果たすことになります。詳細は弊社のサイトをご覧ください。(<http://www.trafford.com>)

Trafford

North America & international

Toll-free:1 888 232 4444(USA & Canada)

Phone:250 383 6864 fax:250 383 6804 e-mail:info@trafford.com

The United Kingdom & Europe

Phone:+44 (0)1865 722 113 local rate:0845 230 9601

Fax:+44(0)1865 722 868 e-mail:info.uk@trafford.com

序 文

この本を長年支え続けてくれた全ての人に捧げます；名前が多すぎて書けませんが、本人は誰のことかわかるでしょう。無条件の愛と勇気を与えてくれたことに感謝します。

特別な感謝をロンダとキャサリンに捧げます。二人は冒険の始まりから側にいてくれました。私を受け入れ地に足をつけるように支え続け、周りから引き離されるように感じている時もそばにいて抱きしめてくれました。

リック、マーセラ、ジェーン、カーラとコニー。いつも勇気づけてくれてこの話を公表するためどんなことでもしてくれました。あなた方の助けと固い信頼に感謝します。

姉のジュリアナに特別な感謝を捧げます。常に直感力を探求するよう勇気づけてくれました。あなたを誇りに思います。

最後にこの本を読者であるあなたに捧げます。全ての言葉は頭に思い描いたあなたに対して書いています。私たちは何者でこの惑星で今日それぞれが果たす役割が何なのか、この話はあなたが真実を見つける旅の道に沿ってあなたを助けるかもしれません。

あなたと周りの人々の人間関係の質は、あなたが選択する理解よりはるかに地球に影響を与えていると私は信じます。

もし私たちが哀れみをもち意識的にコミュニケーションを取ってそこから学ぼうと選択すればこの世界は変わるでしょう。

カーラ ドンブロスキー

目次

- 1 イン트로ダクション
- 2 はじまり
- 3 ハイウェイ
- 4 記憶回復
- 5 クローン
- 6 アリゾナスパイラル
- 7 ホピメディスンマン
- 8 オーブとのコミュニケーション
- 9 新しい道を歩む
- 10 探求のはじまり
- 11 パズルピース
- 12 メッセージ

イントロダクション

1988年に起こったUFOによるアブダクション以降、私の世界は永遠に変わりました。本書では長身金髪のエイリアン達に遭遇した後に起こった出来事についてお話しします。どのようにコンタクトが起こりどう結論づけたかを示そうと思います。

話が複雑なためこの本を書くのは容易ではありません。中学卒業してから正式な教育を受けていない私にとって本を書くのは難しいのです。しかし書き始めるうちにわかってきました。あなたが友達であると想定し直感に従って話すように書けば話は完成するのです。エイリアンのガイダンスの下、正式に教育を受けていなくてもこの本を完成できるとわかりました。

この本は事実が起こった順番に書くことにしました。このため本を読み始めるとあなたは私と同じ質問を自分自身にするでしょう。話が展開していくうちにいかにしてすべての事実が組み合わさっているのかを見ながら、質問の答えを見出すでしょう。

この話をする上で最も気がかりなのは、望まない注意から家族と友人を守ることです。彼らの保護のため、登場人物の名前を私以外は全て変えています。また私は北ブリティッシュコロンビアで生まれ育ちましたが設定をクランブルックに変更しました。一同じく関係者を守るためです。それ以外の出来事は全て実際に起こった場所を記しています。この本に書いている情報は全てエイリアンから直接聞いたか、実際に体験したことを元にしています。本文の全ての言葉は、私の人生で本当におこった出来事から来ています。とにかくこの話の中でフィクションの部分は一切ないのです。

エイリアンからの直接のリクエストに答えてこの話を書いています。私とエイリアンのゴールはあなたの心が真実に対して開かれることです：私たちは孤独ではありません。エイリアンは私たちを見守っています。彼らを恐れる理由など何もないのです。

感謝を込めて

ミリアム・デリカド

Oh偉大なるスピリットよ

Oh 内在している偉大なるスピリットよ
あなたのハートが海と風のように聞こえる
雨粒のように穏やかで星のように力強く
あなたの鼓動が遠く旅するように感じられる

Oh 内在している偉大なるスピリットよ
ゆっくり回転する世界のことを教えて
天から地に降りる虹を見せてほしい
座を去ることなく旅することを教えてほしい

Oh 内在する偉大なスピリットよ
あなたの歌が聞こえたら その声に従おう
それは大きく澄み切った歌に違いない
すばらしい交響曲に従うのを助けてほしい

Oh 内在する偉大なスピリットよ
私のハートは聖なる風のように強く
自然と踊り野生を呼ぶ
子供と遊び偉大な火を手なずける

Oh 内在する偉大なスピリットよ
内なる知識を私は学んだ
私の魂はマサウと共に歌い空を舞う
虹の上を旅し 次のステージが始まる

©ミリアム・デリカド 1993

はじまり

1966年10月10日は私がこの世界に道を作った日だ。生まれたとき2人の姉がいた：4歳のジャニスと2歳のキャロル。病院を出ると家に連れて行かれそこで9年間生活した。当時の家は2つのベッドルームがあり、小さいのでキッチンと居間とダイニングはひとまとめだった。家族用住宅というよりもむしろ独身向けのスイートという感じだ；しかし子供にとってすべてが大きく思えたものだ。

赤ちゃんのときベビーベッドで横たわりうまく動けなかったのを覚えている。母親を見て泣いて話しかけようとしたが、必死で話そうとするものの伝えたい音が出てこない。両親の話を所々理解したものコミュニケーションをとる方法がなかった。少し大きくなった頃、記憶にあった会話を両親に話すとショックを受けていた。当時は私が唯一の赤ちゃんだったからだ！

ベビーベッドから卒業すると姉達の部屋に引っ越した。小さい部屋なので2つのシングルベッドしか入らなかった。そのため姉の一人とベッドを共有しなければならなかった。私はいつもジャニスと寝ていた。眠るまで彼女を抱きしめていた。ジャニスをつかまえていれば自分がベッドから連れていかれても彼女がいらないからわかると思っていた。どこに連れて行かれても眠ってしまったら気づかない。眠るときは常にこのことが強く頭にあった。

姉と私はおもちゃをあまり持たずに育った：たった一つのおもちゃ箱しかなかった。3人でおもちゃ、洋服、ベッドを共有していた；何一つ自分のものはなかった。多くの時間を農場、川沿いの草むら、川べりや木登りなど外で遊んで過ごした。物をあまり持っていなかったのも、近所の子たちと遊んで自分たちで楽しみをつくっていた。

自分がどこか人と違っていると感じ始めたのは子供の頃で人生を通して続いている。よく通行人を観察し、人が考えていることを想像していた。お気に入りのゲームは人の考えを当てることだった。頭のなかに浮かび上がることはいつもポジティブなことではなく、そうなるとその人からは何も見ないようにして次の対象者に移った。人が考えていることを知ることでトラブルに巻き込まれるのは怖かったが、とにかくそれをやっていた。

子供の頃から両親について沢山考えたがこう考えざるを得なかった。今は間違った家族と住んでいて大きくなったら真実を発見するだろう：家族とは関係がないことを。彼らと十分つながっていると感じたことはなかった。

まだ若い頃父はよくみんなを散歩に連れて行ってくれた。周辺に生えている植物の違いや食べられる物と食べられない物を説明し、生き残る方法について沢山教わった。川沿いに家路を歩きながら林の木でフルートを彫ってくれたのを覚えている。

私の父はヨーロッパ人の強い血からくる、人を管理する気質をもっていた。子育てに強い戒律を用いたので私たち家族はとても苦しい目に遭いみんな不幸だった。

父はどこで何をしようが目立つ男だった。小さい町で育ったので周りのみんなが父のことを知っていた。彼らは父にひどいニックネームをつけ姉と私は学校が休みになるとよくいじめられたものだ。一獣のように打たれたり、押し飛ばされたり、父のことでひどい言葉を投げかけられたりもした。

私たち姉妹がいじめに遭ったのは父がハーブレメディを習得しホリスティックな健康法や生活スタイルを送っていたからだ。子供のころよく父から聞かされたのは世界が終わりに近づいた時の話で、自分を守る方法とサバイバルスキルを集中して教わった；父曰く、いつか世間は飢えるが、私たち姉妹は何の植物が食べられるかを知っているので食いつなぐことができるという。父は私たちにハーブを摘ませて乾燥させ症状ごとに違うお茶をつくらせた。その当時は恥ずかしいことで、普通の育て方では決してなかった。

夏や冬にはシェルターをつくる方法を教わった。父は必要なときにどうやって行うのかクイズ形式で教えた。彼の知識はつきることがないように思われた。なぜこのような変なことを教えようと思ったのかわからない。父の統一性のない漠然とした話はたいてい変な方向に飛んでしまい小さい私には理解ができなかったが、無理やり話を聞かされ習得するように仕込まれた。

父はクランブルックの町周辺にある山を指し、もし未来に核戦争がおこったら最も安全な場所のひとつだよと説明した。もし地球の反対側で核戦争がおこったら汚染された雲は大気の流れに沿う。核雲が高い山を通過したとき放射能のほとんどを雨で降らせることになる。父はこの話を何度も私たち姉妹に聞かせた。なぜ父がそう考えるのかも、この変な

話が本当かどうかともわからなかった。私達と何の関係があるのか。大気の流れが何なのかも知らなければ、助かる方法を父がどうやって学んだのかもわからなかった。私が成長するにつれて父の奇妙な話はどんどん減っていったがもっと色んな話をするようになった。

私の母は教養の高い人で、私が3歳になったらすぐに職場に復帰した。父といると母は大変だった。父は常に母をなじり怒鳴っていた。母も父から望んでもいない統一性のない話を無理やり聞かされていた。母は気丈な人で知る人すべてに尊敬された。よく働いたが、いつも時間を見つけてはおやつを焼いてくれた。おいしい物；パン、ケーキ、ドーナッツ、お気に入りのシナモンロールなどを焼いてくれたよい思い出がある。

小さい地域の中で父は悪名高くほとんどの人に理性の欠いた人物とされていた。父は遺伝子のせいで自分がいかに優れているのかをよく人に自慢していた。子供たちにも「特別で優れた」遺伝子をもっていると話していた。私自身は父が何を言っているのかなぜそんなことを言うのかさっぱりわからなかった。姉や私にはクレイジーな話だ。父ははっきりと私は彼の娘だから幾分優れ特別な存在だと言っていた。父の言うことを決して理解できなかったし、なぜそんなことを言うのかもわからなかった。

父が友人に自分の人生を語ってきかせる間、子供の私達も静かに座って聞かなければならなかった。父は若くして第二次世界大戦の陸軍に参戦し、国をまたいで戦った：フランス、イタリア、ユーゴスラビア。そこに至る過程は知らないが、父の魂は戦争で砕けたようで確実にネガティブな方向に変化していた：父が戦争について語るときそこに怒りと憤慨が込められていた。

父は、戦時下のパリの路上で男が接近した話を何度も話した。この男は父に向かって「ロシアのサイキックアカデミー」と言う場所で働くように誘ったという。父はこう言った。「絶対に奴らのところに行くもんか！俺のこと馬鹿だと思っているのか？行ったら最後二度と戻って来れない。殺されるか、奴隷にされてしまうんだ。逃げられないぞ！地球上には逃げ場なんかない：あいつらは世界で最強のサイキック集団だから透視で人を探せるんだ。人を殺すのに銃なんていらぬー精神を使うのさ。絶対にあいつらと行ったらだめだからな。わかったか？」父がこの話をする度に、当然わかったふりをした。姉達もこの“男”についての講義を何度も何度も受けた。父は未来を見る力があり、度々当てていたのでサ

イキツナ力があることをみんな知っていた。電話が鳴る前に誰からかかってくるかを言い当てたし、いつも自分に能力があると自慢していた。大人になると父のささいな行動を通してサイキツナ力があることを何度も目の当りにした。

母が仕事で忙しい環境で育ったので洗濯が追いつかず、洗濯物が部屋中にあふれていた。私が一学年になった頃に父が材木の切り出しで事故にあった。それが原因で父は転職しレンガ積み職人になった。この新しい仕事に就いたことで両親は家を建てる決心をした。

ジャニスとキャロルと私は3年間、放課後父と父の友人を手伝いに行かされた。私たちは小さい助っ人だったが一生懸命働いた。夜暗くなると、トラックの光が道を明るくし、家に戻る前に数個のレンガを積むことができた。

よく夕飯を建築現場で食べていた。木材を燃やした樽の上にしるしを置き、甘いおやつになるまで暖をとっていた。—今でも新しい家で過ごした場面のハイライトとなっている。

1976年になるとようやく新しい家に引っ越した。4つのベッドルーム、広間、2階建ての家だ。まだ完成していなかったが、私にとっては大邸宅に引っ越したように感じた。最初の頃はベッドが2つしかなかったので姉のキャロルと部屋を共有した。しかしすぐに自分の部屋に移り住んだ。ずっと姉のどちらかと同じベッドで寝ていたの、自分だけの部屋をもつというのは奇妙な感じだった—始めて持つ自分のベッドだった。

引っ越してすぐ何者かがいるのをみんなが感じ始めた。しかしそれが何なのか誰もわからない。姉と私は地下に絶対にひとりで行きたくなかった。そこに何かが降りていく気配がしていたからだ。いつもみんなが感じている存在のことが話題になり知らないうちに古代の墓の上に家を建てたのではと話していた。

次の数年間家に訪ねてきた人はみな霊による超常現象を体験した。床を踏む音や引きずる音が階下からして家族が一晩中眠れないことが何度もあった。それはひどいもので家中のものを悩ませた。

あるとき霊がひどく騒いだことがあった。父の友人が家に泊まり地下のベッドに寝ていた。彼がベッドに寝ていると突然小さいボールが部屋をジャンプし始めすごい速さで動き回り、天井や床を何度も何度も跳ね回った。ボール以外は何も動かず彼はボールに触れてもいないという。

このとき私は家を留守にしており後で家族から話を聞いた。友人は階段を上って来て死にたくないと言い荷物を放置したまま家を出て行った。家に二度と近づきたくないというので荷物を送り届けた。

霊は度々騒いで家族を朝まで眠らせなかった。ときどき数日続くことがあり気が休まらなかった。私は何も見えないし聞こえなかったがいつもネガティブなエネルギーを地下に感じていた。霊は私に関わらない方がいいと知っているようだった。私が留守に限って強く暴れ後で武勇伝を聞くのだった。

この頃私のサイキックな力が目覚め始め夜ベッドで寝ている時間にネガティブな霊と話をした。霊が長い間活動し家族を眠りから遠ざける時は小さな儀式で家族を保護した。

「神様、地下に住んでいる存在から私や家族を守ってください。宇宙の法により自分より力のない人に干渉することは許されません。もし今夜誰かのところに行くのなら私を通して行きなさい。アーメン」

次の日家族に眠れたか尋ねると、ここ数日あるいは数週間の中で始めて朝まで寝むれた夜だったという。みんな一晩中何も聞こえず何も見えなかったそうだ。保護の祈りのことは誰にも言わないでおいた。

祈りのあと夜中に目をさますと自分が地下に立っており、その横で赤いフレームが部屋を横切り地下の半分を飲み込んだ。じっとフレームを見つめ繰り返し祈りを行いエネルギーあるいは霊を通すことを許さなかった。時折この儀式を数日間かけて行い続けた。

地下の霊はさらに後一、二、三歳の時一まで家に留まった。私は儀式を行って霊を動かした。家族にはまだ黙っていた。ジャニスにエネルギーがまだそこにあるか尋ねるとそれがなくなったことを嬉しそうに話した。誰も悩まされることはなくなったという。それを聞いて始めて家族ためにやってきたことを彼女に打ち明けた。

年を重ねると超能力はもっと表面化した。どう機能するのかまだ十分に理解できていなかった一ただそうだった。5年生のとき友人のトリッシュと体育館で集会のために座っていた。いつものように何も考えず話していた。彼女は自分の手を見せそれが恥ずかしいと話し始めた。彼女を責められなかった：本当に醜かった。両手の指先から手首まで小さいいぼで覆われていた。

トリッシュはそれを取り除こうとして手を尽くしたが何も効かなかったという。そこで私が取り除いてあげるから心配しないでと話した。もちろん彼女は私の話を信じていなかった。「あなたの手を1分間握っているだけでそれは消えるわよ」と言った。彼女は疑っていたが試させて欲しいと頼んだ。

集会の途中だったが目を閉じトリッシュの手を握った。いぼが無くなり手が滑らかになる様子をイメージした。一分後目をあけると私はくすくす笑った。トリッシュが何をしたのか聞いてきた。私が手を握っている間くすぐったかったそうだ。笑いながら一週間位でいぼはなくなるわよと言った。彼女は信じていないが数週間したら驚くだろう。

2週間後廊下で会うなり、トリッシュが興奮気味に手を見せた。いぼはなくなっていた。医師曰くいぼは突然消えることがあるというー私がいぼを取り去ったと思いたくなかったようだ。私は自分のエネルギーが彼女を癒したことを知っていた。でもそれを強調しなかった。超常現象を信じたくない人は信じないだろうー何を言われても、何をしたとしても。

12歳になると父親の横暴さに耐え切れず家を出て里子になった。次の数年間里親の家からグループホームに移ったり友人の家に逃げ込んだりした。私の人生の中でもっとも苦しかった時代だ。

翌年は次から次に災難がおこった。ドラッグとアルコールが家庭からのストレス解消法だった。ありがたいことに1年で難を逃れた。自分の人生をそうやって過ごしたくないと気づいたのだ。

13歳頃の私はごくわずかな友人しかいなかった。家庭の問題や自分の奇妙な能力から大勢の人という居心地が悪かった。しかし2人の友人と自分の特別な才能をわちあった。ダレンとニコルだ。ある夜ダレンと一緒にニコルの身を心配していた。数日間ニコルの消息がわからなかったのも、ダレンが私に超能力を使えるか聞いてきた。

超能力が使えるかわからず嫌々試すことになった。ダレンのベッドに横たわり、ニコルの顔を思い浮かべた。最初は暗闇しか見えなかったが次の瞬間はつきりと青い中古車が隣町に向かってハイウェイを走っている様子と道路標識が見えた。まるで車の後部座席に座っているような感覚だった。前の座席にはニコルが居り年配の男性と笑っているー知らない人とドライブしているようだ。

目を開けるとダレンに男性の様子も交えつつ見た事を全て話した。ニコルがこの知らない男性と一緒にいて大丈夫なのか聞いてきた。彼女を安心させるために、ニコルは無事で数日したら戻るだろうと伝えた。ニコルと男性がいつ戻るか車内で話している姿が見えていた。

ダレンと二人でニコルからの連絡を待った。彼女の安否が知りたいだけでなく、私の能力が正しいのか知りたかった。3日後学校の廊下でニコルが歩いてくるのをダレンと目撃した。ニコルは笑いながらあいさつした。躊躇せずダレンが多くの質問をし始めた。ニコルがどこに行っていたのか、誰と一緒になぜ誰にも知らせなかったのか、彼女は大丈夫なのかどうか？

ニコルは質問にいい顔はしなかったが、キンバリーという隣町に青い車に乗って男性と行っていたそう。そこでなぜ2人がこのような質問をしたのかをニコルに打ち明けた。3人とも透視の正確さに驚きながらもそこまで詳しく見えたことが不思議だった。

次の数年間にはもっと多くの事件が起こったが、ニコルのときのように詳細で正確に情報を得た。自分の透視については人に話したり話さなかったりした。未来を透視したり夢やビジョンで頭に浮かんだりしたこともある。どんな情報もすべて正確だった。

1979年の終わり頃は自分が人と違っているとは思わなくなった一人と違っていることは知っていた。自分の才能は息をするように自然になった；もし透視の力がなかったら自分が完全でないと感じるようになった。人の死や事故などを見るのは不幸ではあった。友人が関与していた場合は特にだ。当時はわからなかったが経験を通して自分の能力を学んだのと同時に自分は何者なのかも知ったのだった。

1980年14歳の頃2年ぶりに自宅に住むことになった。住み始めて2ヵ月後に父の怒りが爆発した。父と戦うよりも逃げようと雨の降る中外に出た。辺りは暗く木の葉も枯れていたのを今でも覚えている。全てが寂しく思え大雨に濡れながら孤独に道を歩いた。

自分の中の何かが立ち止まらせ上を見上げた。人生とあらゆる物に感謝をした。いつの日か私は大勢の人々を助けるだろう。そのために私はここにいる。この経験もいつか終わりがきたら価値のあることになるだろう。

なぜこう考えたのかわからないが、人生の中で最も印象に残っている瞬間だ。1時間後、

寒く疲れたので家に戻った。

両親と住むことはもはや堪えられなくなり永久に家を出ることを決意した。家にいて父の壁の中に閉じ込められたら私の人生ではなくなってしまう。全てを変える選択だった—そのときから自分の未来に向かった。

悲しいことに選択肢はあまりなかった。14歳の少女にとって職に就くのは難しい。父は自分と私のことで社会福祉の人々との間に問題を起こしていた。彼らは父を恐れたので私に住む場所を提供しなかった。父は私を家に置いておきたかったので彼らは私を保護してはくれなかった。

次の選択は生存に基づくものだ。社会福祉の児童養護施設に入ることは無理だった：選択は限られていた。私は小さかったが父の元に戻ったら2人のうちのどちらかが生き残れないだろう。私の精神は強かったので父の不当な扱いを許さなかった。

14歳の誕生日からわずか3日後には自立すると公表した。ボーイフレンドと住むことにした。彼なら私の面倒を見てくれる。彼と一緒に住めば父のいる地獄から出られる。

教育に関しては選択肢から外れた。家やグループホームを出たら学校の授業には参加させないと言われたからだ。私は傷つき悲しかった。私の年齢では大学にも行けない。現実には否定できない。家を出ることは人生を棒にふるって困難な道に進むことだった：教育がなければ良い仕事にも就けない。お金もない。目を広く見開いて選択した。次の4年間はダレンと一緒に住んだ。彼とサイキックな力を共有したかったが、彼は話を聞いてはくれなかった。

時々手をダレンの背中に手を置いて触った。彼の気づかない所で手を2インチ肌から離れた。肉体に触っていないのに体にかざした手はダレンをくすぐった。もし私がやっていることを彼に知られたら2度とさせてくれないことはわかっていた。彼を使ってエネルギーの練習しコントロールする力を得ようとした。

この時期も透視と夢は続いていた。数年間多くのサイキックな事件が起こり、姉のジャニスと共有した。彼女はアドバイスを与えることはできなかったが、私の才能をいつも助けてくれた。

ある日深い眠りから覚めるとかなり落ち込んだ。飛行機墜落のかなり鮮明な映像を見た

からだ。それはひどかった。人々が席に着き飛行機が離陸する所、空中、飛行中の景色などが浮かんた。飛行機が墜落し数百人が死んでしまった。ジャニスにこの話をした。彼女はどの航空会社か尋ねたが名前は見えなかった。ジャニスはもっと詳細な映像を見るように勇気付けてくれた。残念にもそれ以上何も見えなかった。映像を見ても何もできずこのような事故を見せられる理由がわからなかった。変更することもできないというのに。

3日後、ニュースで2百名以上を乗せた飛行機が墜落したと報道された。生存者はいなかった。このショックなニュースにより長いこと気分が落ち込んだ。映像を見せられた目的が理解できなかった。

数年かけて沢山の事故を詳細に透視したが何をしたらいいのかわからなかった。依然として能力を学んだだけだ。与えられた知識は学校に通うようなもので、ゆっくりと徐々に周りの人と違うことを受け入れ始めた。それぞれの透視も才能もどんどん鮮明に分かるようになっていった。

ある日姉のキャロルが丘の上の道路を運転している映像が見えた。冬の日に黒い氷にぶつかる所が見えた。コントロールを失い堤防に行った。彼女に警告した。その日キャロルは学校から帰る途中ゆっくりと丘を運転した。黒い氷の上を滑ったがゆっくりと運転していたので堤防に行かずに済み、車のハンドルを維持できた。

友人のニコルが新しいボーイフレンドを紹介した。次の日その彼がハイウェイの横で車を止めたのが見えた。顔が血まみれだった。車から投げ出され側溝から脱出しようとしていた。他の車は事故に巻き込まれなかった。この時は彼にもニコルにも透視が正しいか追跡できなかった。助けられないのであれば、透視に意味があるのだろうか？ 次の日事故は本当に起こったが、彼は重症を追わなかった。

4年後私が成人になる頃ダレンとの関係が終わった。私は3つの仕事に就きいい収入を得ていた。ダレンとの契約が困難になり去る準備はできていた。

シングルライフは楽しかった。すこしの間一人暮らした後、ルームメイトを見つけた。彼女の名前はサリーと言い、同じ年で私と同じような複雑な家族環境だった。お互いの友人の紹介で出会いすぐに親友になった。彼女がボーイフレンドのスチュワートと一緒にバンクーバーに引っ越すまでの間ちょうど1年間一緒にいた。

19歳の誕生日のすぐ後友人ができて出かけるようになった。孤独の数年を過ごして来たのですごく楽しかった。自分が完全な人間になったような気がした。本当に生きるのを初めて味わった一家族やダレンから自由になったのだ。

次の数ヶ月間複数の出来事が起こり自分の能力が再浮上した。この時期ジャニスが家にいるのが堪えられなくなり私と一緒に住んでいた。数週間後彼女は友人の結婚式に参加した。披露宴が終わると花嫁の親戚2人を家に招待しお茶に誘った。

夜分遅く2人の知らない人を家に呼び快く思わなかったが兄弟に不躰な態度はとりたくなかった。ジャニスは兄弟の一人とカウチに座り、私はもう一人の兄弟とカウチに座った。それぞれ数時間話した後みんなで会話を始めた。驚くことにみんな同じことを話していた：私のことだ！私は兄弟にサイキックな力があると話した。3人に嘲られながら兄弟の一人を透視した。始める前、ESPの能力で透視して良いかを確認した。同意を得たので彼の人生の細かいことを話した。住んでいる家、多くの時間を過ごしている部屋などあり得ない程詳しく話した。彼の目を見ながらそれをやったーそれだけだった。

かなり細かいことまで言い当てたので、彼は違っていると言い出して私を貶めようとした。そう言われたので最もプライベートなことを話した。彼は飛び上がりもう行くから止めろと言った。私の話が正確で彼を怖がらせたのは明らかだ。怖がらせるのが目的ではないがもはや彼を落ち着かせることはできなかった。次の日ジャニスは結婚式の家族と招待客が集まる家に出かけて行った。そこにリーディングをした兄弟がいてひどく怖かったと言った。私がいかに正確だったので、間違っていると言って追い払おうとしたそうだ。そんな詳しいことを知るはずもなく怖くなり去ったと言う。ジャニスは彼に私がもう彼の人生を透視していないと言って安心したそうだ。

生まれつき透視の才能があることは明らかだった。兄弟の透視は自分の透視能力を意識的に使ってかなり詳細に行った初めての経験で私も少し怖くなった。まだ十分にコントロールできていなかった。始まると閉じることができなくなり人の目を見るとプライベートな生活が見えてしまい、一度そうなると数日間は大変なことになる。

新しく開かれた窓に慣れないまま友人アンナの家に向かった。彼女なら私に起きていることに何らかのアドバイスをくれるだろう。家に行きここ2日間に起こった事を説明し、

開いてしまった窓を閉じる方法を尋ねた。彼女はキッチンに行くとカードを棚から引き出し質問をして私をテストし始めた。8つのカードを試すと全部間違っていた。アンナは私を見上げショックを受けていた。「ミリアム、あなたは私が手に持っているカードじゃなく一番上のカードを答えているのよ！」アンナがそう言った時私の心臓はドキドキした。彼女が正しいとわかったからだ！

数時間彼女と話をし何が起きているのかをすべて話してくれた。当時の彼女の限られた知識でも、窓を閉じるのには十分だった。以前のように他人の個人的な映像やプライベートな生活を受信せずに人を見ることができるようになった。

この大きなサイキックな経験があった後クランブルックでの暮らしは新たな挑戦となった。家の問題が再発し2番目の姉のキャロルも私の家にやってきた。両方の姉と同居することでプレッシャーを感じ始めた。そんなこんなでバンクーバーの友人の家に行くことにした。

1985年9月3日、借りてきたスーツケースとともにクランブルックを去り新しい目的に集中した：ひとりで住み誰のためでもなく自分の人生を始めること。大都市に着くと不安と恐怖を感じた。バンクーバーの最初の友人のアパートに向かい道に迷った。見知らぬ新しい場所で歩く人々や立ち並ぶビルに恐怖を感じた。圧倒されたが奇妙なエンパワメントを感じた。かつて感じたことのない自由を見出し気に入った！

大都市に住んで3日後、姉に電話した。戻らないと告げアパートを維持したければそうするように伝えた。売ることも維持することもできる一置いてきた荷物は何もいない。次の3年間バンクーバー地区に住み世界に自分の場所を見出そうとした。親しんだ場所から離れて孤独になることは奇妙にも解放感があるものだ。見知らぬ人々に囲まれることで、人は幾分勇気が沸き内側にある本当の自分になり、人々は本当のあなたを外側に見るのだろう。

ハイウェイ（１９８８）

“それ”がおこったのは１９８８年、２２歳の時だった。１９歳でクランブルックの故郷を去って以来ずっとバンクーバーに住んでいる。当時バンクーバーにまだ馴染めず、他の２２歳の年齢の子達と私は違っていた－よく外に出てバンクーバーのナイトライフを楽しんでいた。住み始めの頃は市内に２人しか知り合いがいなかった。年を重ねることに状況が変わり何人かの友人が移り住んできた。私はボーイフレンドと一緒に生活していたが望むように物事がうまくいかず何かが私から失われ続けていた。この感覚にも関わらず、新しい場所を探索し自分がどういう人間かを知り初めていた…そう思っていた。

ある初秋の日、私はひとりで家にいた。カウチに一人で横たわり、昼寝をし始めてすぐトンネルを通っているような感じになった。まるで何かに引っ張られているようだった。自分の回りにある星を眺めていた。夜見る星より３倍多くの星がそこにあった。目の前を見ながらすごいスピードでトンネルを通っているようだ。かつて見たことがない景色だったので、落ち着いていたが興味をそそられた。

トンネルの最後で止まると、男性と女性と座って話をした。彼らは長く白いローブを着ていて足まで覆われていた。その女性はとても美しかった。彼女の皮膚は中国人形のように長い金髪だった。男性は黒い髪で肩の上にちょうどかかっていた。２人とも人の心を捉える青い目をしていて。私たちは宇宙の真ん中に座っており星が周りに現れている。現実感があり彼らと一緒にいるのが夢のような感じはしなかった。

奇妙な会話の２０分後に目覚めると、起き上がりロボットのように家を出るため荷造りを始めた。友人のサリーを呼び、彼女のボーイフレンドの家に３人で住んでいいか尋ねた。すぐに彼女とスチュワートが迎えにやってきた。すぐの出発だったが、トンネルにいた２人の存在との遭遇に自分が震えているようには思えなかった。その日の最初は何が起きたかわからなかったのだが、頭の中で考え続けていた。会合はとても重要だと感じてはいたが、男性と女性は何を話したのか覚えていなかった。

一週間後サリーが３人でクランブルックに行かないかと誘ってくれた。車で行くから友人や家族に会うのにお金もそんなにかからないという。当時働いていなかったのも、一緒

に行くと言事をした。過去に何度も同じような旅行をしたので13時間と見積もった。問題はサリーと私は免許をもっていなかったもので、スチュワートが一人で運転しなければならないことだった。

次の週バンクーバーを去りオッソヨスをいつも通り通過した。スチュワートが運転に疲れたので3時間止まって睡眠をとった。バンクーバーを去って13時間後にクランブルックに無事到着した。

サリーとスチュワートは友人の家で私を降ろし、戻る頃には連絡すると言い残した。その週は友人と家族を訪れ、彼らと過ごした。

友人のアンナならトンネルで会った2人について説明してくれるかもしれないと思った。彼女はとてもスピリチュアルで私が理解しないことも説明してくれる。なぜ存在を見始めたのだろうか？彼らは私がボーイフレンドの元を去って欲しいのだろうか？彼の元を去る方法が余りにも突然で中途半端だったんじゃないだろうか。彼らは私が知らない何かを知っていて私を探していたのだろうか？アンナの説明ではたぶん彼らは私の“スピリットガイド”ではないだろうかという。理にかなっているように思われた。私は常に人はエンジェルに見守られていると信じていた。

その週はすぐ過ぎ金曜日の夜は思ったより早くやってきた。私が地元で過ごす最後の日なのでバンクーバーに戻る前に楽しもうと外出した。酔いたかったので友人たちとパーティーをした。そのため土曜日の朝は悲惨だった。

その日の朝は気分が悪く疲れていたものでよれよれの体を車に戻してバンクーバーに戻る長旅の準備をした。サリーの姉妹であるヒーザーと4歳になる息子が一緒に来るようになった。追加のドライバーができたのでいつもより早く家に戻れることになった。

バンクーバーに戻る旅はイベントではなくなり退屈だった。私は後部座席に座る方が居心地よく感じ、昨晚の酔いと疲れを回復するために眠っていた。ガソリンの補給を通常どおり行いコーヒーを飲んで食事をした。みんなできるだけ早く戻りたかったので、停止時間も短かった。できれば食べ物を持ち帰り、座って食べる時間を省略したい位だ。

夕食後ヒーザーの息子は後部座席で私と彼女の間で眠った。日が暮れ夜になるとようやくいつもの自分の状態に戻り始めた。エンジンの音によって眠ったり起こされたりした。

夜が進むにつれて美しい星が現れ、普段町にいると思えない美しい星たちがあらわれた。うとうとし始めるとブーンという音がなり始めた！一前の週と同じようにトンネルに引っ張られた。トンネルの終わりで同じ男性と女性がいて一緒に座って話をした。目が覚めると震えていた。体験だけでなく彼らが話したことを覚えていたからだ。彼らは次のように言った。「怖がらないで。私達はあなたの友達だから。あなたの家族だから。今あなたはここにるように選ばれたのよ。あなたのためにすぐそこに行くから。怖がらないで。」

奇妙ではっきりした夢から目覚め、それに気を取られていた。前回カウチの上で夢をみたときのことを思い出し始めた。彼らが何を言おうとしたのかを考えた。サリーに話したいが何とさえいいの？夢で星を見た後あえて窓の外を見つめていた。同じ言葉を何度も何度も繰り返し頭の中で聴いていた。あなたのためにすぐにそこに行くから。どうやって？なぜ？いつ来るのだろう？一彼らの話は理解できなかった。

スチュワートは運転しながら助手席のサリーと話をしていて。しばらくして彼はヒーザーに休みたいので交代してくれと頼んだ。つまり私も前の席に異動して、ヒーザーの相手をする副操縦士にならなければならないということだ。

車内にカセットがなかったのでラジオを聴いていた。信号が出たり消えたりしていたので音量を低くした。信号が消えたら音を下げ音楽が出たら音を上げた。いつものように美しい星たちを眺めながら話をした。

夜が更けると交通量が少なくなり暗闇が増し寂しくなっていた。私たちは追い越し車線を走行し始めた。すべてはこの瞬間から変わった。

ヒーザーと私は後方にある光に気づいた。その光は2台の車の隙間をぬって素早く近づいてきた。すごいスピードだったので車は私達を追い越すだろうとヒーザーに言った。光は奇妙だった。大きくて丸くてコンテナトラックに似ていたが、ものすごくまぶしいので車の姿は見えない。車は追い越さず私たちの車より後方右側にいて傾いていた。反対方向から別の車のライトが丘の上を照らした；その瞬間に後ろにあった光は暗闇の中に漂い消えてしまった。

次の数時間、何度も光は現れたり消えたりした。その度に奇妙なラジオ放送が流れた。南西アメリカのどこかの放送だった。気持ち悪さを乗り越しておりヒーザーとずっとその

話をした。光が現れると必ず追いつくのに決して追い越さない。別の車が来たり小さい町を走ったりする時は光は消えるが、まばたきをしている間にまた現れる。絶対に追い越さないのだ。私たちは恐くなりなぜ光が後ろに迫りながら追い越さないのかと疑問を口にした。

ヒーザーと私は震え上がった。その光は何度も後方に近づき、誰もいない時になると近づいてくるのが不気味だった。ハイウェイは次の町に差し掛かった。町の端から次の町までは長い距離がある。奇妙な光から遠ざかろうと思いヒーザーにできるだけ早く走ってと頼んだ。町角を曲がると光は見えなくなったので大丈夫よと言った。絶対につかまらないわ！ハイウェイから追いつくのは距離的に無理だ。しかし私は間違っていた！

町を抜けた瞬間あろうことか再び光が現れた。ヒーザーも私も接近に気づかなかった。突然そこに現れたのだ。「いったいどこから来たのよ？」二人とも叫んだ。

「追いつけるはずがないわ！」私は叫んだ。ラジオ放送が再び流れてきたので二人はパニックになった。ヒーザーが見てと叫ぶとあろうことか！光は消えてしまった。私は車のサイドミラーを見ながら瞬きをした。再び現れた！振り返り確認しながらヒーザーに目を離さないからと言った。瞬きをするとまた消えた！後ろは暗闇になった。消えた場面が見えなかった！私は叫び声をあげた。

「ミリアム、見えてる？」 ヒーザーが質問した。

「いいえ」 私は叫んだ。

光がどこから来るのか二人で探していた。

ヒーザーがついに言った。「たぶんあれUFOよ！」その瞬間すごく怖くなった！

光は現れては消えるのを素早く繰り返した後で暗闇に消えることがなくなった。今度はパチパチと点滅した。そこにありながらも次の瞬間消えてしまう。

どこからともなく自分がヒーザーに怒鳴っている声が聞こえた。「車を止めて！」

「嫌よ」彼女は言った。「あなたは奴らを知らないでしょ！私たちを殺せるし切り刻んでトランクに入れることもできるわよ。私は車を止めないから！」

再び彼女に叫んだ。「とにかく車を今すぐ止めて…あなたじゃなく私だから！」なんでそんなことを言ったのだろう？ 私が左手でハンドルを握ると次の瞬間ヒーザーの頭は傾き、

トランス状態になり車を道の脇に止めた。突然まぶしい白い光の中に包み込まれた。後部座席を振り返りスチュワートやサリーやヒーザーと息子を見た。みんな薬で眠っているように静かに横たわっている。

頭が真っ白になる中で視界全体がまばゆい光で満たされるのを見ていた。光はどこから来たのだろうか？前の座席に座りながら一体全体何が起きているのだろうと思った。みんな完全に静止していた。車は道路の路肩を走り完全に停止した。車に隠れて見ていると再び大きな光が現れた。前を見るとそこに答えがあった。まぶしい皿の形をした円盤が道路に浮かんでいた。車に向かって円盤の扉が開いたのが見えた。鼓動が激しくなり死ぬかもしれないと思った。

怖がらないで。という声を頭の中で聞き続けた。怖がらないで。車から出てきて。ドアに手をかけゆっくりと開けた。まるで自分の体を外から見ているようだ；コントロールを失っていた。なぜ車から出ているのだろう？そう思った。あたかも自分自身の横に座って、自分がやっていることを見ているようだ。その間脳が体と交流できないのだ。自由意志を全て失った。車の外は寒く霧が出ていた。目の前に止まっている円盤から熱がきている。動かず立っていると6人がこちらに近づいて来た。彼らは子供と同じ位小さく見えた。大きな丸い黒い目をしている。

静かにしてあなたを傷つけないから。何度も聞いたが話す人物は見えない。その後2人が近づき車のドアを閉めて一緒に来るよう指示した。彼らは私の手を握って導いた。大きな黒い目を見ながらうっとりしていた。手は少し冷たかった。彼らはどこに連れて行こうとしているの？ 彼らとは言葉では話さなかった。ある種のテレパシーを使っているようだ。道路の左側に誘導され見上げると別な円盤が見えた。道路にある円盤より大きかった。ドア口に彼らが見えた：背の高い金髪で輝く大きな青い目をもった2人の存在だ。

少し不躰な言い方で彼らに質問した。ここで一体何をしているの？私をほっといてくれない？ 次に自問自答した。一体何を言ってるのだろう？ 入り口に近づくと小さい存在が私の手を離したのでそのまま円盤に乗り込んだ。長身の金髪の存在と会ったのは初めてではないと知っていた；彼らとはいつどうやって会ったのだろうと混乱した。

次の数時間に起こったことで、私の人生における真実、平和、受容、そしてこの体験を

理解する為の長い旅が始まった。彼らと過ごした時間の一部はその時からはっきりとしていたが、残りの部分は数週間、数ヶ月、数年間ははっきりしなかった。運命の日に円盤の中で示され告げられたこともその日に起こった出来事も最終的にはすべて意識に戻った。

一緒に過ごす時間が終わりをつげると車に戻るように円盤が着陸した。どれくらいの間だったのかはわからない。友人に意識が向いた。小さい存在たちに車に戻るように導かれ靴を脱いで後部座席に置くように言われた。あなたが車を去っていたことと靴が濡れていることを忘れてほしいの。彼らがそう言ったので以前のように催眠状態で言われたとおりにした。車のドアが閉められ小さい存在達が円盤に戻るのを座って見ていた。フラッシュとともに円盤はまっすぐ上昇しあっという間に消えた。彼らが去ったとき精神は自由になり再び思考は自分のものになった。彼らは私の頭の空間を開放した。

2つめの円盤と光のボールが去ると、車の中の全員が動き始めた。奇妙な夜にしては会話はすごく普通だった。スチュワートが質問した。「なぜ俺たち止まったんだい？僕にまた運転してほしいのかい？」「ええ」とヒーザーが答え自分の席に戻った。「今何時？」彼女は尋ねたが返事はなかった。我達4人は席を交代した。とても寒かったのでスチュワートがヒーザーに車を止めたことへの文句を言った。私は後部座席に勢いよく乗り込んだ。会話は何時間も追ってきた奇妙な光についての話題に移った。ヒーザーは謎の放送を流すラジオについて話し始めた。サリーも長い間ラジオが消えたりついたりしたことや奇妙な光に気づいていた。みんなおかしいと思った。運転手が交代したときなぜサリーが光について話さなかったのかと尋ねた。彼女もスチュワートも答えなかった。

エンジンが停止していたのでスチュワートが始動した。彼は光についてこれ以上話したくないと言いその話をやめようとした。車を道路に乗り入れるとライトをハイウェイの左側に向けた。あそこに彼らがいる！私は思った。みんな彼らを目撃できる！「見て」と叫んだ。「道の横にあるあれを見て！」少なくとも5組の大きく輝く瞳が後ろの私たちを見つめていた。

「鹿だよ。ミリアム！」スチュワートが声を上げた

「違うわよ。」と答えた。「彼らを見て！鹿じゃないわよ。あれが見えないの？」彼は再び反論し、山から降りた鹿が道路の脇にいるのは最高の草があるからだと説明した。「どう

してあんなにお互い近い場所にいるのよ？」車内の全員が私にイラつき始めた。「光のこと忘れたの？一体何がおきているのよ？」と言った。通り過ぎると疑問を口にした。「家の灯りだらけの場所にどうして鹿が立っているのよ？」スチュワートに車を止めて彼らを見るように頼んだが彼は再び反論し怒りを爆発させた。みんなあれについて黙っているのだから話を続けるなら車を止めて私を歩いて帰らせるという。ヒーザーとサリーが私を叱り付けて通過しようとした。スチュワートがキレるのが怖かったので嫌々話をやめた。バンクーバーに到着し、車を停車させるまで誰も一言も話さなかった。

陽が昇り始め、暗い空に光が差し始めると、車は私たちの家の前で止まった。あれから数時間で始めて会話を口にした。家に戻るのがいかに素晴らしいという話になったがすぐに奇妙な光へと話が戻った。それぞれがドライブ中の出来事に関する意見を持っていた。

スチュワートは笑いながら言った。「もしかしたらU F Oかもしれないぜ。失われた時間がなかったかい？」

「どういう意味？」私はたずねた

「エイリアンが君を連れて行ったら彼らと過ごした時間を数えることができないんだ。」彼は家のドアに近づきながら腕時計を見てくすくす笑いながら言った。「いいや。13時間だからいつも通りだよ。」

私はバッグを持って家に入り部屋に行った。コートを脱いでお気に入りのベージュのシャツを見た。何か黒いシミがついている。気づいた瞬間にロボット状態に戻った。シャツを脱いでゴミ箱にすぐに捨てた。ゴミ箱に捨てただけでなく、外の倉庫に持って言った。何で？ それをしながらも、自問自答していた：お気に入りのシャツなのに。どうして？ それを洗濯しないの？ サリーも洗濯するようにアドバイスしたが、私が怒ったので彼女はその話題をあきらめた。

シャツを捨てると部屋に戻った。鈍い痛みが私の右腹のところに生じた。その場所を見下ろすと直径2インチ位の丸い赤い点があった。真ん中には切開部のようなものがある。もう一度頭の中から声が聞こえた。2度とそこを見ないように。そのままにしていたら消えるから。それについて考える必要はないから。夜着を着た私は、その場所を数ヶ月間見なかった。

次の日はほとんど寝て過ごしながらか長旅から回復した。奇妙な夢を見た。再び男性と女性を見た。目覚めると覚えていることを全て書きだした。書き始めると、彼らの話を思い出し始めた。あなたはこれらを覚えているでしょう。思い出すでしょう。彼らは車に戻す前にそう言った。長身の金髪エイリアンは、輝く青い瞳と透き通る白い肌で私の目を見ながらメッセージを繰り返した。あなたはこれらを覚えているでしょう。

頭にある多くの情報はそれ自体意味をなさなかったが書き出すのは重要とわかっていた。頭の中に情報をダウンロードされたかのようで、各ピースを見ながらそれを適切な場所にあてはめた。すべての経験に圧倒された。

その夜を境に私は完全に別人になった。飲酒と喫煙をやめ、パーティと赤肉を食すのを止めた。知り合いはみな、何で私がそんなに変わったかを考えた。その夜以前は瞑想をしなかった。今や日に2〜3回瞑想をしている自分がいた。時折あのときの男性と女性に遭遇した。

当時、沢山のスピリチュアルな知識を与えてくれた複数の存在にも会った。深い瞑想に入ると、常に（エンライトメント）悟りの経験をした。

バンクーバーから戻り昼寝をした時からあることがはっきりした：自分のサイキックな力が広く開いた。まるで背の高い金髪のエイリアンが透視能力を与えてくれかのような：一生かかっても説明しきれない程の世界や宇宙に関することが理解できたし、はるか遠くまで見通すことができた。与えられた最も美しい才能だった。しかし同時に彼らが与えてくれた意識のレベルを維持することは洞察力のないこの世界においては難しかった。

エイリアンと出会った後で、どれくらいの間彼らと過ごしたのか長い間考え続けた。ようやくこの旅に関する重要な事がわかった。私たちは13時間かけて旅行をしたがいつもならスチュワートが3時間眠るところをその時は停車しなかった。2人の運転手がいたので戻るまで余計な休憩をしていない。10時間で家に戻る予定だ。つまり3時間が失われたことになる。

すべてがはっきりした訳ではない。胃の赤い点には何が行われたのだろうか？なぜそれを覚えていないのか？いくつかは曖昧だった；しかしメッセージは明らかなだ。私の使命はあなたが何者なのかを教えていくことだ。

子供の頃の奇妙な記憶が浮かび始めた。父親は彼らについてほのめかしていた。私たち姉妹が子供の頃に父が話したことから彼らと親しいと思われた。

エイリアンに遭遇してから1ヶ月後、まだ彼らとテレパシーで交流していた。ある日の午後グランビルストリートを歩いていると、どこからともなくエイリアンの声が聞こえ、宝石店に行くように頭の中で指示した。

店のドアを開けると中に入った。まっすぐ行って。そう告げたので指示に従った。躊躇せずまっすぐカウンターに向かうと右側を見下ろすように言われた。ネックレスを買ってください。あなたにとって大事なものです。

それとわかるネックレスが2つあった。一つは青でもう一つは赤だった。どれなの？と頭の中で問いかけた。個人的には赤のルビーが好みだが青のサファイアを買うように勧められた。2つとも上品で小さい星の形をしている。なぜこのネックレスを買う必要があるのか尋ねなかった。彼らと十分に接触していたので、きっと良い理由なのだろうと思った。

私はそのとき110ドルしか持っていなかった。店員に値段を尋ねると、税抜きで130ドルと言われ落ち込んだ。お金のことは気にしないで。店員は売ってくれるようになってから。声が響いた。店員を見てお金が足りないことを告げると、驚くことに値下げしてくれた。再びお金を持っていないと話すといくら持っているのかと聞いてきた；110ドルしかもっていませんと言った。店員はそれで十分ですといい、金の鎖までつけてくれるという！私はショックを受けた。

店から出ると、道を歩きながら首にペンダントをつけた。頭の中でエイリアンにペンダントの意味と買うことの必要性について質問した。返事が来た。ペンダントは青い星になっていてあなたにとってそれはとても重要です。いつかあなたはその意味のすべてを理解するでしょう。それは聖なるものであり将来多くの人々にとって非常に重要なものなのです。このペンダントは私達があなたに継続して近づくのを助けてくれるのです。

ネックレスを首にかけると二度と外さなかった。ネックレスは私が真実を知ることのすべてのシンボルとなった。真実は明らかだった：人間は惑星において唯一の知的生命体ではない。ある日、みんなも同様にわかる時が来るだろう。

記憶回復

アブダクションの経験から少しして、子供の頃におこったに起こった出来事で、そのときまで理解できなかったことや、エイリアンに会うまでは完全に忘れていたことなどが脳裏に浮かび始めた。これらのイメージはとても鮮明で、どんなに追いやろうとしても消えないものとなった。私の意識の中にそれらのイメージが戻るように意図されていることは明らかだった。これらの記憶がどのようにすべて組み合わされるのか、そしてひとつの絵となって、私の経験したことと関連するのかは、依然として不明だった。それぞれのピースが次のものの重要な手がかりになることだけはわかった。

ベビーベッドにて（1966）

エイリアンに遭遇した後最初に浮かび上がったのが赤ちゃんの頃ベビーベッドで寝ている記憶だ。ベビーベッドに横たわり天井を見つめながら言葉が出てこなかった。黒い瞳をした3人のエイリアンの顔が私を見下ろしていた。

4～5歳の頃（1970～1971?）

それは夜中の出来事で私は4～5歳位だった。目が覚めると小さい家のベッドルームを出てリビングルームに向かった。姉のジャニスも私に従ってリビングルームにやってきた。彼女はベッドに戻るよう言い続けた。彼女を無視し外に出て家の前にある農場に行った。ジャニスが私をベッドに戻そうと頑張った。もう遅いし危険だと言う。農場の中に15フィート程足を踏み入れると立ち止まった；ジャニスは3フィート離れて左側に立っていた。農場の反対側にとっても大きなまぶしい光があった。40フィート位のまぶしい光が古い小屋の上に静かに滞空している。2人とも静かに立ってそれを見つめた。すると野球のボールの大きさの青い光の玉が光の中心から出てきた。農地をこちらに向かってすごいスピードで飛んできたのでぶつかるのではないかと思った。光は私の6インチ前で止まると、しばらく浮かんでいた。やがてゆっくりと足元に向かって降りて額に登ってきた。次に私の体の真ん中の前で止まった。私の順番が終わると、ジャニスに同じことを行なった。それが

終わるとジャニスの額の前に戻り、頭に青い光線を送った；彼女は振り向くと何も言わず家に戻っていった。彼女がいなくなると、頭の中で一緒に来るようにと告げる声がした。

次に覚えているのは、長身で金髪のエイリアンと円盤に乗っていたことだ。光のような物でできている椅子に座った。光が私の周りにあったーそのとき見えたのは光と私の2〜3フィートの位置にいるエイリアンだけだった。私は何かに吊られていたが、吊りひもは見えなかった。腕は45度に曲げられ手の平は上になっている。私は怒鳴り声をあげた！針のついた小さいチューブが両腕に近づき手首から2インチ上にあった。チューブの先に何がついているのかは見えない。まるで風船のように膨らまされた感覚がして、とても怖かった！長身の金髪の存在は私の横に立ち、静かにしているように話した：すぐに終わるから。将来やってくる疫病から私を守るために、血液を変える必要があると言った。彼らがそう言ったので安心した；彼らの声は穏やかなだけでなく、針の傷みを幾分楽にしてくれた。

血液を変えられた後円盤の中を案内され窓の外を見た。とても興味深かった。彼らが探索器（オーブとして知られている）を送ったのを見ていた。みんな別々の仕事を持っているという。大気や水や種のサンプルを収集して円盤にてテストをするものや、特定の人物を召集するために探し出すものもあるという。探索器は小さいので、円盤よりも楽に各地を移動できる。もし捜索中の人物が別の人と一緒にいたら、オーブは音響シグナルを送信して周りの人を無意識にさせて眠らせるそうだ。また特定の人々や特定の関心のある地区の人々から情報を収集したりする探索器もあるという。

円盤が地球に着陸する間、窓から見るのが許された。しかし外に出るのは許されなかった。どこにいるのかわからなかったが、夜の大草原のような場所だった。外には少なくとも4つの円盤が輪になっていた。人とエイリアンたちは円盤から出て外に集まっている。私も参加したかったが若すぎると言われ実際そうだった。あれはエイリアンと人が情報交換し将来について話をする会議だと告げられた。そこには平均的な人々がいたが、少なくとも2人は制服のようなものを着ていた。たぶん軍タイプのものだ。いつかこれらの会議に私も参加することができるだろうと告げられた。

エイリアンが家に私を連れて帰ったときオブジェクトを与えられた。とても重要な物だ

から覚えていなければならないと言われた。この贈り物は将来とても重要になるという。それを埋めておけば大きくなったらそれが何の為の物かわかるから、その時に戻って見つけるようにと言われた。

ベッドに戻るとすぐに眠りについた；次の日オブジェクトを持って外出し埋めた。ジャニスも一緒に来た。彼女にも見せたが触らせなかった。埋める前それを白い布にくるんだ。お父さんから隠さなければならないことをジャニスに話した；見つかったら壊すか取りあげられると思ったからだ。

10歳（1976）

ある朝目覚めるとキッチンに向かう廊下を歩きながら前日の夜見た奇妙な夢のことを考えていた。ジャニスと母がキッチンテーブルに座っていた；父は町から出ていた。真ん中の姉のキャロルはまだ寝ていた。母と姉に家の後ろにUFOが着陸した変な夢を見たと言すと、信じられないことに二人とも私と同じ夢を見ていた！キャロルが起きて来たので夢を見なかったかどうか尋ねた。

「うん。本当に気持ち悪い夢だったよ。家の後ろにUFOが着陸したの」

全員が裏庭の円盤以外は覚えていなかった。すごく不気味な出来事だった。全員がどうやったら同じ夢を見るのかみんなで座って話したが、説明がつかなかった。

1976年、私は5年生だった。当時バクスターという既婚女性が先生だった。私はこの先生がとても大好きだった。夢を見た後意味もなく彼女のことが怖くなった。彼女は大きな丸い目をしていて説明をするときは目がとても大きくなり頭から飛び出しそうなのだ。二度と彼女を見るができなかった！彼女の目が広く開くと私は心底ビビってしまった。

UFOの夢を見てからしばらく2人の姉に悩まされ続けた。二人とも目をできる限り広く開くのだ。恐怖のあまり叫び声を上げ、止めるように懇願した！あまりにも怖がる様子を見てときどき二人は笑っていた。何でもする方がましだった。当時の私は目を突き出されれば止めさせるために言われた通りにした；それはひどいものだった！

同じ時期頻繁に夜中に目を覚まし鼻血を出していた。体が麻痺する感じがして、夜が怖かった。眠るためにドアを全て閉めなければならなかった；少しでもカーテンの間に隙間

があれば眠れなかった。いつも誰かが窓の外から見ているような気がしていた。

12歳（1978）

1978年、学校に大勢の女子に人気のある男子がいた。彼はとても可愛くてサムという名前だった。親友のジリアンが彼とデートをしていた。トリッシュという別の友達と彼について話した記憶がある。トリッシュが彼の子供が欲しいと言ったのをはっきりと覚えている！当時何のことを話しているのか本当にわかっていた訳ではなかった。若すぎた。

昼休みで雨が降っていたのでほとんどの子達は校舎内にいた。廊下は子供であふれており体育館を通過すると7年生のクラスの子たちがバスケットを練習していた。トリッシュと歩きながらこう言った。「子供は持たないわ！絶対に！」

「どうしてミリアム？」彼女は質問した。

「子供は絶対持たないの。なぜなら人間の子じゃないからよ！モンスターかエイリアンか何かだと思う！」

トリッシュは子供を持つには変な考えだと思ったので、昼休みの間ずっとなぜ私がそんな奇妙な考えを持っているのかについて話し合った。どうしてそう思うのか彼女にはっきりと説明することができなかったが、その考えはとても強く怖い感覚だった。

16歳（1982）

たまにボーイフレンドのダレンとドライブしていた。小さい町に住んでいると、ドライブは楽しみの一つとなる。明るい町から出て星を眺めるのは素晴らしいものだ。

ある晩、ダレンと彼の友達のロンと私で古い農道を向かってドライブに出かけた。ロンが運転している間、私はダレンとロンの間に座っていた。5マイルほど町から出て道路脇に車を止めた。車から出ると会話をしながら辺りを散策した。水平線に丘があった一山というよりは遠くにある大きな丘という感じだった。暗く星が見えていた；とても綺麗だった。3人は車の前で立ち話をした。「あれは何だ？」とロンが言った。そのとき私は車の前を向いており、ロンは私の右でダレンは左にいた。視界から右に向かって何かが見えたが何なのかははっきりとはわからない。

「わお！あれを見たか？」ダレンが尋ねた。今度はそれを見た！

「流星群みたいだ！」ロンが言った。

光のショーを見ながら3人共混乱したのを覚えている。見ている物が何なのか話し合った。丘の後ろに消える光はとてもまぶしくて白い光のボールのように見えた。いくつかの光には赤い尻尾がある。数分観察していると光がどんどん明るくなり空から地上に放たれているように見えた。地上に降りる瞬間完全に方向を変えながら視界から消えていった。

「流星がどうして丘の後ろに落ちるの？流星は方向を変えないわよ！」私は叫んだ。2人が反論するので苛立っていた。再び彼らに怒鳴った。「あれを見て！まっすぐに降りてきて丘に着いたら方向を変えて地上に平行に飛んでいるじゃない。あれは流星じゃないわ！一体何なのよ！？」

3人が車に戻るまで覚えていることはこれが全てだ。3人で混乱しながら町に戻った。寒かったので車のヒーターをつけた。車が何でこんなに早く冷たくなるのかわからない。数分間しか外に出ていなかったのに。アパートに戻り目撃したことについて話し合った。どれくらいの間外出していたのか誰も知らなかった。記憶が飛んでしまったようだった。

これと同じ頃私は病気になった。元気になったと思えば次の日は病気になり歩けなくなった。3日程するとかなり体調が悪くなったのでダレンに病院に連れて行ってもらった。弱ってまともに歩けなかったのでダレンに抱えてもらった。当時の医師は私の症状が普通の病気のような兆候が見られなかったので何が原因なのかわからなかった。

彼女は病院の近くにある場所に血液テストのために私を送った。ダレンと私はやっとのことでそこにたどり着いた。倒れそうになりながらすぐに横になった。血を抜こうとしたがかなり難しかった。看護師が私の様子を見てショックを受けたのを覚えている。どの位この症状が続いているのか質問されたので、3日前は元気だったと伝えた。針を入れようとするのだが、血を一滴も抜くことができない。血管がつぶれ続けている。よくないことだとわかっていた！血液サンプルを抜き出せなかったら病院に送らなければならないと告げられた。ようやく血液を抜いたが、ほんの少しの量なのでテストに十分かわからないという。家に帰る前に医師のアドバイスがあり悪くなったら病院に戻るよう告げられた。

数日後、血液検査の結果が出ると全て正常値だった。困惑気味に医師が説明できないと

いう。週の終わりには回復し私は再び元気になったのだ！

農場での出来事の後体の右側が痛くなり始めた。数ヶ月続き再び医師は説明できなかった。痛みは時間の経過と共にどんどんひどくなっていった。医師らは沢山のテストをし、私は実験に使われているような感じがした。傷みのため病院の緊急窓口に何度も行った。医師はついに確認のための検査手術を行うという。医師が手術をすると右の卵巣にグレープフルーツの大きさの腫瘍が見つかった。

私はそれがダレンとロンと一緒に農道に行ったあの夜が原因なのかと思った。何ともなかった右の卵巣があのと看から問題が始まったことは確かだ。偶然だろうか？たぶん。事実は残っている。流星は方向を変えないし地上に水平に飛ばない。ダレンとロンと一緒に過ごした夜から私は困惑しているのだ。その夜“流星”に何が起きていたのかわからない。けれども私の体は反応を示している。たぶん知らないのが正解なのかもしれない。

これらは1988年にエイリアンをハイウェイで見たときから頭の中に鮮明に浮かんだ記憶である。全てを書き出したら全体図がわかるだろう考えた。おそらく彼らが与えたメッセージはこれらの記憶と何らかの関係があるのかもしれない。時間の問題だろう。私がやるべきことは情報が注がれる間できる限り正気を保とうと努力することだ。

ジャニスに彼女が若い頃エイリアンを目撃したか本当に聞いたかったが待たなければならなかった。内容について詳しく話さないことが重要だった。すべて彼女自身で覚えていて欲しかったからだ。私が特定のことを話せば彼女の記憶に影響し、それが本物かどうか疑い続けなければならない。私が黙っていてジャニスが記憶を保ち続けていたら、それが本当で空想ではないことがわかるだろう。時間だけがエイリアンに関する秘密を明らかにしてくれるだろう。

クローン（１９８９）

９ヶ月間孤独で、誰でもいいからエイリアンについて知っている人を探し求めていた。ハイウェイ旅行から蘇えった記憶や感情に混乱しきっていた。エイリアンのことが常に頭の大部分を占めていた；自分がおかしくなっていく気がしていた。ほとんど毎週、これまで夢にも思わなかった色んな場所を少しずつ訪れていた。最初の９ヶ月間は神学会に通っていた。バラ十字会員、サイキックな人、形而上学の会合、仏教のお寺、精神世界の本屋、その他数え切れない場所に行ったが、どこに行っても同じだった：誰も私に教えることはできないのだ。しかし彼らは私の話に興味を示し、エイリアンが話したことを聞きたがった。事実確認もないままに、自分の経験を通して真実を自分の力で探し求めるように言われたり指示されたりした。

アンナを誘ってバンクーバー郊外のサリーという地区にある精神世界の本屋に行こうとした。バスで長距離を出かけなければならなかったが、誰かが答えをくれるかもしれないという希望を持っていた。到着したとき、壁にあるメモをチェックし、パンフレットやイベントのチラシを見て、店員にＵＦＯに関する本がある場所を尋ねた。男性はほんの数冊しかないと答えた。興味深いことに、ここ数ヶ月の間この話題の本を求める人が増えているという。今後もより多くの人々がエイリアンとＵＦＯに関する情報を求め始めるので、本を増やした方がいいと店員に話した。自分の体験を確認するために市内を探し回ったが、ここが唯一の店だったと伝えた。小さいパンフレットを集めた後でアンナと市内に戻った。

アパートに戻ると、資料を読んでいた。新しいグループや会合や、誰か手助けしてくれそうな人を探していると、精神世界のチラシに注意を奪われた。“スターピープルに告ぐ”その瞬間をはっきりと覚えている：心臓が激しく鼓動し泣き始めた。ようやく、そう思った。私は気なんて狂っていなかった！私の反応を見てアンナがすぐに注意書きを読み、案内先に電話をかけるように励ましてくれた。シアトルの電話番号だったがそれは些細なことのように思えた。

気を失いそうになりながら電話をした。女性が応答し、広告を見たことをビクビクしながら伝えた。彼女はカレンという名ですぐに落ち着かせてくれたので、ハイウェイでの体

験を簡単に説明した。話し終えると、彼女は自分の知っている知識を話してくれた。十分に安心したので、エイリアンが話した知識のいくつかを彼女に話した。次の2時間、アンナが座っている横で私は泣いていた。彼女は手を握ってくれていた。カレンは私の魂と精神を救ってくれたのだ。彼女は私の記憶を検証して私がまったく正気であると理解するのを助けてくれた。こういう経験をしたのは私だけでなくそれらは本物であり妄想ではないそうだ。おそらく私には感情的なサポートが必要だからシアトルに来て彼女に会い直接会ってもっと話をしようと誘ってくれた。

2日後、バンクーバーのグレイハウンド・バスステーションでシアトル行きのバスを待っていた。自分の直感が間違っていた時のために、カレンの情報をすべてアンナに渡した。もしかしておかしい人と会うかもしれないからだ。アメリカに行くのは心配だった。これまで行った場所はクランブルックとバンクーバーだけだったが、答えを知りたいという要求は強く恐れを超えていた。

U F Oに関する情報を持っていると思われる人と対面するために、4時間かけてバスを旅している間、リラックスして考える時間があつた。緊張していたが心は穏やかだった。少し奇妙な感覚だった。シアトルに着くとホテルで降りた。そこでカレンに到着したと電話をすることになっていた。彼女は夫を迎えによこすからしばらく待つようにと言った。

ホテルの玄関口で待ちながらどんな人が来るのだろうと考えていた。彼らを見つけたことは嬉しかったが、まだ少し緊張していた。カレンの夫が到着するや否や彼らの家に一緒に行った。カレンは玄関口で出迎え歓迎してくれた；お互いにハグをし彼女と会えたのでほっとして涙が出た。

小さい家に入ると、カレンの3人の友達に歓迎された。すぐに4人で気楽に会話ができた。全部話すにはまだ十分に心を開いていなかったがここに導いた経験を話した。驚くことにみんなが私と同じような経験をしていた。真夜中過ぎまで皆で話をした。それぞれが特別の使命があると伝えられていた。会話によって打ち解けた。私は孤独を感じなくなった。彼らと出会って新しい人生の道ができたと思った。全てが変わるだろう

次の日家を去る前にカレンがバンクーバーに住むジョン・デービスという男性の電話番号をくれて電話をするように勧めてきた。明らかに彼はU F Oとエイリアンに関する情報

を沢山持っているそうだ。彼と出会ったいきさつを尋ねると、私と同じように彼も広告を見て連絡してきたそうだ。彼は数回訪問したという。彼女は彼の経歴は詳しく知らなかった—しかし彼はバンクーバーに住んでいるから、私の近くににいるという。

ジョンに電話をするのが楽しみで、家に着くとすぐに電話した。電話での会話で彼は親しみやすく情報通だと感じた。すぐにお互いに会って話すことにした。私は喜んで彼と交流を始めたいと思った。やっと自分の家の近くに付き合える人が見つかったのだ。

ジョンと私はコーヒーショップで落ち合い、数時間もの間私の体験を話した。午後を丸々一緒に過ごし、お互いに得ている知識を歩きながら話した。彼はスーパーコンピューターを設置する小さい会社に勤めていた。そこには8人の男性が働いていて、小さいグループだがみんなUFOに興味があるという。

最初に出会ったときから、ジョンは知っていることの全部を打ち明けていない感じがしていた。何かを隠しているがそれには触れないでいた。ジョンはとても変わった風貌だった：短いダークヘアで—ほとんど黒髪だ。くしで片側に分けている。分厚いめがねをかけ、黒い目をしていて、肌は奇妙なオリーブの質感があった。いつもポケット付のベージュのパンツを穿いていた：カーゴパンツに似ているが当時はまだ誰も穿いていなかった。

ジョンと私は多くの時間を過ごし彼のおかげで市内に沢山の新しい知人ができた。彼はサンドラ・ジョーンズという女性を紹介してくれた。彼女とはまだ会ったことはなかったが、素晴らしい人物だということを友人から聞いていた。サンドラと私はすぐに友達になった。彼女は他人にはない人を集める才能を持っていた。まるで市内の要所に自分の分身を持っているかのようだ。彼女の影響もあり私は自分のような人々を集めてアブダクティ会議を始めた。

会議にはあらゆるタイプの人々が集まり姿を見せた。中には本当に気が違っているかのような信じられない話をする人々もいた。会議は長く続かなかったが、切実に望んでいた理解と最初の援助を得ることができた。会議の中で自分のような人を数人見出した。しかし惹き付けた注意に圧倒された；奇妙なことが身の回りに起こり始めたので、わずか数ヶ月で会議を止める決心をした。

ジョンとのつきあいは深まり、解りあえる人ができたのが嬉しかった。しかしジョンと

は沢山の時間を過ごしたが、完全に信用することができないでいた。感情を脇にやり全ての情報を話さないことで少しだけ距離を置いた。彼の人生には謎の部分があり何かが正しくないと感じていた。

沢山の人々がやって来て瞬きする間にその年は過ぎていった。気がつけば1989年が終わろうとしていた。

ロシアのリクルート（1990年初期）

それが起こったのは1990年で私はヨーグルト店で働いていた。周りに起きていることに幸せを感じていて、仕事もそんなにきつくなかった。お店が暇になると、オーナーが従業員だけを残すことがあった。この日もそんな状況だった。時間が早くすぎるようにと忙しくしていた。お昼の小さな混雑がくると、時間が過ぎて暇になった。

一人の男性がお店の横の窓を横切った。店内は空だった。彼は私をまっすぐに見ると、笑いながら前を歩き店内に入ってきた。長い黒いコートを着て暗い巻き毛の髪でひげを生やし、深い茶色の目をしていた。

カウンターにまっすぐ近づき笑いながら言った。「CIAかFBIで働いていますか？」

「いいえ」私は答えた。しまった。心の中で思った。今何が起きているの？馬鹿な対応をしたらいなくなるだろうか。たぶん。たぶんだけど。冗談でしょ！

「CIAかFBIで働いたことはありますか？」男は臆することなく質問した。

「いいえ」そう言って男を笑い飛ばそうとした。次の質問に息を呑んだがとにかく落ち着きを維持した。

「ロシアで働きたいと思ったことは？ ご存知のとおり、あなたのような人たちが沢山働いていますよ」

「いいえ。関心ありません。どうも」うつろな視線で返事をした。

「あなたのような人たちに囲まれて、みんなあなたを理解してくれますよ。あなたの能力をコントロールするのを助けてあげられます。」

もう一度言った。「興味ありません。どうも」

「あなたは自分がいかに力を持っているか知ってますか？」

「ええ。実際そうです！」男の目を睨み付けて言った。男の視線をかわしこれ以上超能力を用いて見られないようにした。

「そうですが。あなたは力をコントロールできますか？」男は質問した。

「はい。実際できます！」

すると男はこう言った。「興味があればいつでも私たちの所に来て一緒に働いてください。我々の元にはあなたのような人が10,000人働いています。自分が孤独だと感じることは二度とありませんよ」

「今は興味がありませんし、将来もありません。あなたを送り込んだ人に、興味を示してくれてありがとうとお礼を言ってください。ただし、また誰かが来ても無駄ですから。何があっても興味は絶対にありませんから！」

男は、名前を名乗らなかったが簡単に「ありがとうございます」と答え、そして店を出た。次の3日間、男はヨーグルトを買いに来たが、2度と話題を蒸し返さなかった。3日目にどうして私を見つけたのかと尋ねると、男は質問に答えずすばやく去った。そして二度と戻って来なかった。

青い目の女性（1990年中旬）

学校が始まる前の最後の週末。その夜は暖かく、ロブソンストリートは人で賑わっていた。小さいサービスカウンターに私も含めて4人が働いていた。みんながフローズンヨーグルトを欲しがった。雑談の時間もなく、列が道に伸びていた。

ドアに背を向けていると、衝動がおこり入り口を振り返るとぶっ飛んだ。ドアから奇妙な格好の女性が入ってきたのだ。躊躇なく質問した。“なぜここにいるの？”パニックになった：この状況は何かがおかしかった。どうして放っておいてくれないの？仕事中なのが見えないの？

彼女はゆったりと人の中を歩いて来たので誰も彼女に気づいていない。なぜみんな気づかないの？あんなに奇妙な格好なのに。

周りの人はみんな簡単な服装をしているのに、女はベージュの服を重ねに重ね、頭からつま先まで完全に服で身を包んでいた。あごの周りにカラフルなスカーフを巻いており、

首まで完全に隠れている。6. 5フィートの高さで抜きん出ているフットボール選手のような肩をしていた。皮膚の色も普通でなく明らかにマスクのようだ。金髪の髪は肩まで下がっており、顔に向かって引っ張られている。普通の髪というよりもカツラみたいだった。大きな青い輝く目をしていて、その目で私をコントロールしていたが、それ以外は飛びぬけて醜かった。信じられないほど気持ちが悪かった。目の前のカウンターにやって来るとはまるで注文するかのようだ。ちょっと待っていて。次に対応するから！会話はすべてテレパシーだった。

自分の考えがおかしいと感じた。これは本当に起きているのかそれとも気を失ったのか？最後の会計が終わると奇妙な女のところに行った。いくつか質問し答えを引き出そうとした。私をチェックするためになぜここに来たの？あなたもわかるようにこの世界では生きるためにやらなければならない仕事なの！私の仕事ぶりを見るためにここに来たの？彼女は黙っていた。周りを見渡すと、なぜ誰もこの女性に気づかないのか不思議に思った。たぶんこれは私の想像だわ。たぶん私はおかしいのだ。そう考えた。この女性のことは誰にも言えないだろう。きっと気は確かなのと確認に違いない。

ストロベリーヨーグルトなんて注文しないでよ！小さい皿を持ってくるためにしばらく背を向けた。再び彼女の方を見ると、カウンターの端に移動していた。そこで彼女の全体を見た。彼女は馬鹿げて見えた！ベージュのスーツは1970年代の服装のようで重く完全に体を隠している。自分を見てください！すごく場違いよ！彼女は後ろに下がり、自分の服をチェックした。次に誰かを訪ねるときは、場違いな服装をしないように！

ヨーグルトカップをカウンターに置くと、皮肉をこめて尋ねた。お金持ってますか？彼女の反応はショックだった。スーツのポケットから古い2ドル札を取り出しカウンターに置いたのだ。新しいお金を持ってないの？と問いかけた。次に誰かを訪問するときには新しい服と、お金を持ってくる。場違いに見えないように！会計をしておつりをカウンターに置き彼女に触れないようにした。彼女の手はゆっくりとカウンターに届きおつりを受け取った。彼女の手は普通の手の中の半分の幅で、指は長く痩せていて、ほとんどペンチのようだった。肉は白く少しすべり移植した肌のようにだった。

動揺しながら立ち、彼女が群衆の中を滑るように通って道に出る様子を見てほっとした。

まるで無言で彼女の道をよけたような感じだった。トランスのような状態から覚めると、合理的な思考が戻ってきた。その女は一言も発しなかった。何がおこったのだろう？なぜおこったのだろう？答えが欲しかったが、彼女を追って道に出る衝動を押し込めた。

すぐに同僚に尋ねた。「あれを見た？」

「何を？」彼女が尋ねた。

「私の最後のお客さん？」

「いいえ。見なかったわ」彼女は答えた。次から次に彼女を見たかと質問して廻った。一人の女の子がとても背の高い金髪の女性を見たと言った。しかし異常は見られなかったという。それ以上質問しても無駄のようだった。

女性の訪問を考えた時、現実感覚が失われていたと結論づけた。この出来事を二度と誰にも話さないと決めた。たぶんエイリアンについての会話ばかりしていたので精神が混乱したのだ。シフトの間リラックスしようと努めた。しかしその女性のことを振り払うことはできなかった。

数週間前トランスフォーメーションというホワイトリー・ストリーバーの本に引き付けられた。買ったものの本を読む気がしなかった。私はほとんどこの話題の本を読まないことにしている。しかし何かに惹きつけられて購入していた。本はアパートの部屋の隅に置いており、ヨーグルト店で遭遇してから1週間ずっとそのままだった。

その午後、帰宅してすごく疲れたので、休もうとした。部屋を見渡すと、トランスフォーメーションが目に入った。歩いて行き手に取り読み始めた。読み始めてから数章でこの本を読んでいる自分に疑問が沸いた。これまで何の興味もなかったのに。しかし何らかの理由で本を置けなかった。次の日の明け方まで読み続けると、起きていられなくなり、本を閉じて眠りについた。

次の日仕事から急いで家に帰った。本を読み終えたかったからだ。最後の章の“訪問者が現れる”を読んで涙が出た。そこでこの本を読むように誘導されたことに気がついた。もっと大事なことに、私は気が狂っていなかったのだ。

“訪問者が現れる”には2つの肉体的なコンタクトに関する事件が詳細に書かれている。コンタクトは別々の場所で行われた。エイリアンの訪問について複数の人々による完全な

視点が設定されている。エイリアンは隠そうとしていない様子で一般的な場所にも自由に歩き回ることができるそうだ。

本の中の2つのケースの内容は私の遭遇体験と非常に似ていた。ひとつのケースではエイリアンとの遭遇が私の場合とほとんど同じで、スーツを着て、スカーフを頬にまで巻いている部分も同じだった。エイリアンは観察者にシンプルに歩いている所を見られており、手にはトランスフォーメーションのコピーを持っている。

この本を読んでから時々泣いている。何の理由であれ、エイリアンは特別な訪問をしてくれたのだ。再び自分自身に質問をした。なぜ私なのだろう？私は誰なんだろう？

(1990後半)

父にエイリアンに会ったことを話そうとしていた。父がバンクルーバーに来ることがわかっていたので、重要な話があると告げた。父も次に市内に来たときは会うことを了承した。父との関係はうまくいったことがなかったので、話をするのはつらかった。ようやく父がやってきたので、話をする機会を設け、コマーシャルドライブ地区で落ち合うことにした。父とは安いレストランのブースで対面しコーヒーを飲みながらしばらく話をした。

父は強引な性格で誰であろうとも人に指図されることを許さない。そのため、ハイウェイでエイリアンに出会ったことをどうやって話そうかと緊張し始めた。不安げに席をずらすと、紙をもてあそびながら、父からテーブルに視線を移した。ついに父の目をまっすぐ見つめ話しかけた。「私に何がおきたのか聞いてほしい。話を聞き終えてから質問をしてほしい。お父さんが話をする前に私が言うからそれまで待っていて。」父はそれ以上コメントをせず、驚くことに同意した。

父もエイリアンと関係があるだろうと疑っていたので、エイリアンに関するごくわずかなパズルのピースを置こうと考えた。しかし疑いは気のせいだった。父に自分の経験を話すと父がエイリアンを知っていることを肯定か否定するとわかっていた。震えながら1988年の秋の日にハイウェイでおこったアブダクションに関する体験を父に話した。元いた位置に席を戻すと、父を見つめた。父はひっかきまわさず、一言も発しなかった。そのため恐ろしくて震えが止まらず、父の反応を待っていた。「どうして何も言わないの？」父

に尋ねた。

父は笑いながらこう言った。「お前が話していいってまだ言わないからだよ。」信じられない！こう思った。彼は知っている！

「ごめんなさい。もう話していいわよ！どう思う？」

生きている限り、彼の反応を忘れないだろう。優しく身を傾け、とても穏やかにしかし厳しくこう言った。「あいつらめ、何で言わなかったんだ？奴らが俺に最悪なことをしたのは、25年前だったよ！」父が自分も関わったことがあると告げている間、私の体に光の電流が流れた。父はもう一度なぜすぐに父に話さなかったのか私に尋ねてきた。

「どんないいことを私にしてくれたの？」質問した。

「もしかしたら止めることができたかもしれない！あの馬鹿者共を！」

「どうやってそんなことできるのよ？」

「わからん。でも少なくともあいつらを止めようとしたぞ。」父はうなづいて私に言った。

父に話したことはハイウェイでの出来事だけだった。それ以上は何も言っていない。しかしそれでも父がエイリアンを知っていることが十分に確認できた。私が赤ちゃんの時、赤ちゃんベッドで彼らを見た記憶に関しても父に告げなかったが、父の方から正しいと認めた。当時私は25前後だったが、父はやっと少しだけ彼の周りにエイリアンがうろついていたことを認めたのだった。彼らの目的は父ではなく私であったのでは？だから彼らはずっと身近にいたのではないだろうか？長い質問リストに新しい疑問を追加したのだった。

遅くなって来たので、家に帰り次の日の仕事に備える必要があった。次の日も父と会う約束をし、もう少し詳しく体験について話すことにした。

今度はパブで会い、飲みながらロシア人がサイキックプログラムに誘ってきた話をした。父は私を見ると質問した。「おまえはなんてやつらに言ったんだ？」

「彼らに興味ないし、これからは絶対にないわ！と言ったわよ」

父は笑いながら、こう言った。「それは良かった。それは良かった。」彼は笑い続けた。「どうしてお前は興味がないと言ったんだ？」

「お父さんがいつも子供のときから彼らが近づいてきたら絶対に行くなって言っていたのを覚えていたのよ。戦争中にパリの道端で男が近づいてきた話をしたじゃない。その男

が“ロシアンサイキックアカデミー”っていう所に働くように言ってきたっていう話をし
て、絶対に行ったらいけないって言ってたわ。あいつら俺を馬鹿だと思っているのか？っ
て。あいつ等と仕事をしたら、お前は隠れられない！地球上でやつらから身を隠す場所
はないから、彼らは最強のサイキック集団だから、私のことも精神を使って探すって。お前
を銃を使わず殺せるって；精神を使って殺すって。絶対にやつらと行ったらいけないぞ、
わかったか？子供のときお父さんが私に男がロシアで働かないかって尋ねてくるって何度
も話してたから、本当だってわかってたのよ！」

この話に対して父はただ笑っていただけだった。「この父にしてこの娘ありか」父はこう
言うと、ロシア人の会話を打ち切った。

私たちは一緒に座り、数時間話をした。父に、エイリアンと遭遇した後から私にサイキ
ック能力が拡大した話をした；驚かないと父が言った。すると出し抜けに身をよせ非常に
攻撃的に言った。「お前はエイリアンではないからな。わかったか？お前はエイリアンで
はないから；お前は私の娘だからな。絶対にそれを忘れるなよ！誰が何を話そうとも、お前
は私の娘だ！」その瞬間、エイリアンが私に話した内容を父に話すことはできないと知っ
た。父の反応は議論的で私の手に負えなかった。私は父が何を知っているのかが知りたか
ったのだが、父が攻撃的になると、情報を引き出すことは不可能になる。

会話は終わろうとしていた。すぐに父と別れた。いつかはわからないが、再び父と話す
のは数年先のことだろう。父と会ったことで父と彼らとの関係により疑問が残った。しか
し父が関わりたくないということも明らかになった。もっと重要なことは、父は私が彼ら
と関わってほしくないのだった。父と私の関係はいつも緊張に満ちたものだ。

その週の初めにジョンが電話をくれていた。彼は何かを私に見せたいからできるだけ早
く会いたいと言って来た。彼がすぐ会いたいというのは重要なことだとわかっていたので、
その夜父と会った後でジョンに会った。私のボーイフレンドのアパートの外の灯りの消え
た暗い道でジョンと私はベンチに座った。彼は封筒に手をかけると、中から文書を取り出
した。彼は同僚の一人からそれを得たと言った。この文書を私に見せたいが、私に見せた
ことが同僚にわかったら大きな問題になると警告した。どうしてそんな大きなリスクを犯
そうとしているのか尋ねると、これが私にとって重要なことだと考えたのだという。文書

のタイトルは“地球外生命体とのコンタクトに関するプロトコル”というものだった。M J 1 2 への関連が表紙に載っていた。

彼から文書を受け取ると、ボーイフレンドのところに戻った。フランクは私を待っていた。一緒に内容を読んで目を疑った。これらの頁に書かれていたものは地球外生命体と何らかのコンタクトをもった人々をどのように扱うかということの詳細情報だった。特に、政府が隔離することの可能性—政府が必要と思えば、時間を問わず拘束するそうだ。隔離された人々は、外部との接触を禁じられ、無期限に隔離されるという。またグローバルスケールでエイリアンとコンタクトがある場合には、特別の地区にあらかじめ選ばれた家族が移送されるということにも言及していた。これらの家族は外部の人々から軍事的に保護されるという。隔離者のための家や必需品の供給があるそうだ。これらのキャンプに置かれ、地球外生命体の脅威から人間を守る試みがあるようだ。文書にはこのようなことが続いていた。

この文書を読んで恐怖を感じた。フランクもあからさまに怯えている。「一体全体何が起きているんだよ？」フランクはずっと聞き続けた。悲しいことに何も答えることができなかった。私自身も疑問に思っていた。どうしてジョンはM J 1 2 文書を読むようにと私に渡したのだろうか？どこでこれを手に入れたのだろうか？私とフランクは疑問に思った。彼は政府関係で働いているのだろうか？その疑問は私の心に常につきまとっていた。

フランクのアパートで夜を過ごし文書を読んだ後で長い間話をした。地球外生命体とコンタクトがあった人々に関する指示について考えていた。私は考え続けていた。あれは私のことだ！たぶんジョンは私の身の安全を考えて、起こりうる危険に関して警告してくれたのだろう。頭の中から頁について追い出そうと、眠りについた。

次の朝フランクは仕事があったので、彼と家を出て自分のアパートに戻った。それから文書を見せたい何人かの友人に電話を入れた。ジョンは誰にも見せないようにと頼んだが、とても大事なことだった。私はテッド・マクドナルドという地元の研究者に連絡した。前の年にサラ・ジョーンズを通してコンタクトをした人物だ。彼を訪れM J 1 2 文書に関する見解を聞きたいと申し出た。彼はとても興奮してその日の約束をセッティングしてくれた。

数時間後、私は公立図書館の前のロブソン・ストリートにいた。テッドをそこで待っていた。ベンチに座り観光案内を眺めていた。前日の夜雨が軽く振ったので、太陽が輝いていてとても嬉しかった。テッドがすぐにやって来たので文書について話をはじめた。彼は別の男性とも約束をしたと言った。もし嫌だったらその人には文書を見せなくてもいいという。しかしテッドはその男性と私は会うべきだと思ったのだった。

封筒から文書を取り出すと周りを見渡した。誰も市内の他人に関心を抱いていないようだったが、誰にも見られなくなかった。文書の最初に“トップシークレット”というスタンプが押してある。一種のジョークだとまだ思っていた。テッドが文書を読み始めると、もう一人の友人が現れたので、彼は立ち上がり会いに行った。

テッドが戻るのを待つ間、他の男が近づいてくるのを見た。彼からとても奇妙な感じがすぐに読み取れた。全体を黒いスーツで装い黒髪をしていた。太陽が照っていないのに暗い黒のサングラスをしている。ゆっくりと私の横を通過するとまっすぐに私を見た。歩き続けながら振り返りこちらに戻ってきた。私の左前には新聞ボックスがあった。その前に立つと中を見るために前かがみになり振り返り私を見た。それから新聞のヘッドラインに戻った。彼の動きは明らかに厳密で計算されておりより場違い見えた。

もっとも混乱したのは彼から何の感覚も得られなかったことだ。振り返って男の背中を見ながらエネルギーがないことの理由を考えていた。岩を見ても何らかのエネルギーを感じるのに、この男は極端に気持ちが悪く何にも感じられない。人は感情から成り立っているものだ；男はまるで現実にはいないような感じだった—ほとんどホログラムか貝の抜け殻のようだ。

次の瞬間、男は私の方に向かってきた。私の前に立つとひざから数インチのところにあった。その瞬間私は理解した。奇妙なだけではなくこの男はたぶん私のためにそこにいるのだ。モノトーンの響きでこう言った。「近くに良いお店はありませんか？」なんて聞拔けな質問だろう！そう思った。バンクーバー地区で最高のショッピング地区に囲まれているのに。私の前に立っているのに存在感が全くない。目を閉じればそこに居ることもわからないだろう。もし熟睡しているときに誰かがドア口に立ったら、起きて彼らをすぐに見つめるに違いない。人のエネルギーを寝ていても感じるからだ。それくらいに人のエネルギー

に敏感な私だ。しかしこの男に関しては何にも感じないのだ。

文書をひっくり返して、“トップシークレット”のスタンプが男に見えるようにした：男の反応を見るためだ。その瞬間テッドが横に座ってきた。二人ともこの男が頭を下げて私の膝を見たのを確認した。その男は何の反応も示さず質問を繰り返した。「この辺りに良いお店はありませんか？」

皮肉をこめて男に言った。「ロブソンストリートに居れば探し物は見つかるでしょうに。引き返してショッピング地区の真ん中を探すといいですけど。」彼はそこに立ったまま一言も返さなかった。テッドと私はお互いを見た。私は奇妙な男に言った。「早く行かないと店が閉まるわよ。」少なくとも2秒間は静かに立っていたが、何も言わずに歩き去った。

男が道を曲がると、テッドと友人と私は3人とも今起こったことにショックを受けていた。「あの男は君に何を言ったんだい？」テッドが尋ねた。

「あなたが聞いたこと以外は何も言わなかったわ」

「あれはM I Bだよ！」いつものように彼が何を言っているのかわからなかった。彼の説明によれば、M I B—黒い服装の男—はU F O現象の別の部分だという。誰もこの人たちが誰か、目的は何なのか知らないようだ。彼らとの交流は通常短く奇妙だという。彼らはみな黒いあるいは暗いサングラスをしていて、古い黒い車を運転しているそうだ。私はこの情報に神経質になったが結局何もできず、ハイウェイでの遭遇から身の回りで起こり続けている奇妙な事件の長いリストに追加したのだった。

テッドと友人M I Bだけでなく、M J 1 2 文書にもとても驚いていた。黒服の男との接触があったことから2人とも文書の内容が本物だと思った。テッドはM J 1 2に関する少しの知識を説明した。しかしそれらは限定されていた。M J 1 2は1 2人の男性グループのことで、U F Oに関する知識を持っていて、この現象をコントロールしようとしているという。(M J 1 2はU F O研究の分野では非常に興味深いものだが、私自身の知識は限定されている。この話題に関する詳細情報は読者が自ら研究することをお勧めする)

2人は文書をコピーしたかったが、ジョンの言葉を聞いてそれをさせなかった。ジョンが私に見せるのに神経を使い、なるほどM I Bも訪れたのだ。いかなるコピーも懸命ではないと思った。3人でコーヒーを飲みに行き、午後の出来事について話をした。私は証言

席に座り、2人の男にエイリアンに関して知りうる全てのことを説明しながら質問せめに合わせているように感じていた。疲れたので、家に戻ることにし、ジョンにMJ 12文書を取りに来てもらった。自分の手から離れたかった！

午後の遅い時間にフランクから電話をもらった。彼はとてもがっかりしていて、明らかに考え込んでいた。警察が家をちょうど去った所だと言う。彼のアパートに誰かが侵入したそう。薄気味悪いことに、警察によると、侵入者は何か特定な物を探している様子で、フランクの部屋は明らかに侵入のターゲットにされていたという。クローゼットの中の物まで含めて全ての持ち物が持ち去られたそう。キッチン、居間、ルームメイトの部屋まで明らかに触られていた。警察は彼がドラックの売人だと思ったそう！1万ドルの価値の電気ギターとアンプも盗まれた。ベッド横にあった1オンスの金塊は手付かずでドレッサーにあったお金や貴重品もあったという。

フランクは察しのとおり強盗に非常に落ち込んでいた。私のことにがっかりしていても、彼を責めることはできない。彼はずっと私が一体何に関わっているのかを問い続けなぜ彼がターゲットにされたのかを口にしていた。私たちは誰かが文書を探していることがわかっていて、フランクを慰めようとし、侵入に導いたきっかけについて忘れさせようとしたが無駄だった。

その後すぐにフランクはもう私と会いたくないと伝えてきた。彼を責めることができるだろうか？関係が終わったことで私のハートも引き裂かれた。どのボーイフレンド達との付き合いも込み入っていたことを自覚した。私はエイリアンコンタクトの前から常に強い自立した女性だった。これらの自覚とこの事件から次に誰かと人生を共有する時が来るのは時間がかかるだろうと思った。

(1990年終わり)

この時までには全てのクレイジーなことにうんざりしていた。私自身に関して、個人的に答えが欲しいと思っていたことが多すぎた。同時にそれらの質問の答えをすでに手にしていると感じていた；頭の中にあったすべての情報を処理する必要があった。それはまるで奇妙な苦境の中にいるかのようだった。自分の経験を人に話すと尋問されているように感

じた。人に自分の経験を話すのは嬉しいことだが、質問者は私が全て答えを持っていると思っているようだった。しかしそうではなかったのだ。

あるゆっくりとした土曜日の午後、同僚と座って話をしていた。その日は涼しく湿り気があり、フローズンヨーグルト店は客足が落ち、1分が1時間のように感じられた。カップルが店内に姿を現したので、飛び上がって接客をした。彼らは同僚の前を通り過ぎると直接私を見た。アイコンタクトをしてきて、カウンターの端の遠いところに歩いていった。彼に従い何が欲しいか尋ねた。最初の反応から彼らが私に会いに来たのがわかった。

注文する代わりに男性が奇妙な会話を始めた。自己紹介をするとカウンターに近づき私と握手を交わした。次に女性を紹介した。彼女は握った手を自分に寄せると次のように言った。「ついにあなたにお会いできました。とても光栄で名誉な事です。」この人たちはここで何をしているのだろうか？彼女が言った、ついにあなたにお会いできたというのはどういう意味があるだろうか？疑問に思った。

会話を通して彼らがカリフォルニアから来ており、わずか2日間の日程でバンクーバーに来ているのがわかった。会話は奇妙で私のことが中心だった。男性は私が日記を書いているかを尋ねた。彼は将来それが私と共に他の人々にとっても重要になるかもしれない可能性を示したので、私は日記を書くことを男性に告げた。奇妙なコメントだ！そう思った。

男性の仕事について尋ねると、彼らはカリフォルニアのロッキードという会社に勤めていて、新しいテクノロジーを建設していると答えた。立っている間中考えた。なぜ？なぜ私がそんなに重要なのだろうか？私の空想なのだろうか？2人がやっと去った—ヨーグルトは注文しなかった。(数年後判明したのだが陰謀論者によると；エイリアンテクノロジーのリバースエンジニアリングがカリフォルニアのロッキードマーチンで行われたそうだ。)

彼らの背後でドアが閉まると、同僚が私に向かって歩いてきた。「彼らは何が欲しかったの？すごく変だったわよ、ミリアム。あの人たちあなたに話すためだけにやってきたみたいじゃない！」彼女の不安を取り払うように頑張ったがうまくいかずずっと彼らのことについて話し続けていた。彼女の観察によれば、まるで彼らが私だけと話をするためにカウンターの端に連れて行ったようだという。彼らが気味が悪い人たちに見えていた。

私の人生に起こったこと全てがまるでスパイ小説やSF映画のようだ。もはや舵を取る

こともできず、これからいつまで変な出来事が起こり続けるのかさえもわからない。もうアブダクションの会合にも出たくなかったし、自分は最重要人物なのではないかと感じ始めていた。自分自身の身に本当の危険が起こりうるような予感がしたがどうしていいのかわからなかった。

その女性の言葉が頭から離れなかった：「ついにあなたにお会いできました。とても光栄で名誉な事です。」彼らは何者なのか？なぜ私に会いに来たのだろうか？私の知らない何を知っているのか？質問が多すぎていて、ひとつ答えが見つかりと更に多くの疑問が沸き起こるのだった。

逃走（1990年終わりと1991の始め）

スポットライトを避けるためにビクトリアに引越しをした。大丈夫ではないとわかっていて自分をごまかせなくなっていた。奇妙な人々が周りに現れ過ぎたのでバンクーバーを去ろうと決意したのだった。

友人の中には私が危険な状況にいると気づき始めた人たちもいた。同じことを考えていたのだが、彼らの考えを一掃しようとした。私について心配するのは最後にとっておいて欲しい。普通の生活を送るようにすることで自分を保っていた。ロシア人やM I B、エイリアンの訪問、極秘文書、侵入者、もう十分だった！立ち去って、精神状態を合理的な思考に戻すべきだ。花火が周りで打ち上げられているような感覚で、もし私がひっこめば静まるだろうと考えた。

洗車のディーラーショップの仕事を得た。何も考えないような仕事のほうが嬉しかった。支払いを払うためだけの給料だったが、その方が人との交流は少なくてすむ。過去2年間に経験したことで静かな時間を過ごしたかった。

ある日仕事に行き新車の長い列を洗い始めた。道端に白いバンが停車し運転席に男性が座っているのを見た。最初は車庫のバンで何か仕事をしているのかと思った。時間が経つにつれ、彼のやっていることに疑問を持ち始めた。彼は単に座っていて、まっすぐ前を見ているだけなのだ。ときどき頭を後ろに向いて、その瞬間は私をまっすぐに見ている。そうすると前を向いてまたまっすぐ前を見ているのだ。4時間が過ぎても飲まず食わずで相

変わらずバンに留まり続けていた。

バンの後方の窓は黒塗りになっていた。それが私を不安にした。もはや疑心暗鬼になっていた―誰も私を責めることはできないだろう！この男性の出現に関して、筋の通った答えを出そうとしたが、何も見つからない。午後1時頃ランチに行くことにした。バンの後ろにできるだけ近づいて中を伺うチャンスだと思った。バンの後ろを通ると、太陽光線のおかげで長い望遠カメラが見えた！歩き続けながら怒りがこみ上げた。ほっといてほしいだけなのに。ランチから戻ると男は相変わらず同じ場所にいた。5時になると私は家に戻りその場を去った。

次の日同じバンが同じ位置にいた。しかしドライバーは別人だった。私をどれだけ馬鹿にしてるのだろうか？そう思い続けた。その後古い黒い車を見かけた。子供のときに両親がもっていたような車だ。ドライバーは黒い服を着て黒髪で暗いサングラスをかけていた。彼は振り返るとまっすぐに私を見て通り過ぎた。テッドがM I Bに関して話したのを覚えていたので、彼もM I Bかもしれないと思った。次の彼が通り過ぎたとき、ほんの数秒あとで、前回と同じことをした一車のスピードを落とし私を睨みながら直視したのだ。私は今度は笑いながら手を振った。いかにおちよくっているのかと思った。

このときはひどく落ち込んだ。このバンでは一体何が起きているのだろうか？バンクーバーから引っ越してU F Oに関する人々との連絡を止めていた。ほっといて欲しかったのだ！深いため息をついた。まっすぐに運転席にいるその男のところに向かって歩いていった。「あなた、ずっとここに一日中いますよね。何か手伝いましょうか？」

男は驚きそれが顔にも出ていた。

「いいえ。結構です」男は返事をした。

「コーヒーか何かありませんか？ひとりでずーっと一日中座っていて、トイレにも行っていないのに気づいたので。何かありませんか？」

明らかに私の反応に震えながら男は言った。「いいえ。大丈夫ですから。」

私は笑顔で彼に言った。「何か必要なら手を振ってくださいね。あなたを見えていますから」そうして歩き去った。30分後、バンは去り、二度と見かけなかった。偶然だろうか？たぶん。男が去ったのが嬉しかった。

数ヵ月後、友人のサンドラがバンクーバーから電話をかけてきた。バンクーバーを去るとき、彼女にお願いして、U F Oに詳しい人に会ったら教えてほしいと頼んでいた。彼らに会うのに興味があった。

彼女はU F O研究のあらゆる分野に詳しいとても面白い人物と出会った。彼と会った時、私の話を彼にして少しだけ私のことを話したという。彼はあからさまに私と会うことに興味を示したそう。私はあまり目立たないようにしてはいたが、こんなにU F Oに詳しい人と話す機会を失いたくなかったので、時間を設けて週末に会うことにした。バンクーバーに行くよりも、ビクトリアに来てもらうほうが私にとっては楽だと伝えていた。

天気の良い土曜日の遅い朝に、彼らはやってきた。私が住んでいた家その日は誰もいなかったのもので、誰にも邪魔されることなく会合を持てることになった。私のような知識を持っているかもしれない人とコンタクトを取ることに興奮した。

車が玄関に着いたので階下に下りて行き彼らを歓迎した。サンドラが車の中から飛び出してきてあいさつしながらハグをした。男性はまだ車の中で支度をしていた。ドアを閉めて車から出ると絶句した。*何が起きているの？*そう考えた。男性は自分をビル・ウォルターと名乗ったが、ジョン・デービスと瓜二つだった。髪は同じ色で同じスタイル、同じ目で同じようなオリーブ色の肌で、分厚いめがねをかけていて、やはり同じベージュのパンツを穿いていた。

すぐに私はガードした。明らかにバンクーバーから引っ越せば自分はひとりになれると思ったのは間違いだった。

数時間、沢山の問題について話をした。ビルは私にエイリアンに言われたことに関する沢山の質問をしてきた。彼は特にエイリアンに関するテクノロジーについて知りたがった。彼を信用できないと感じたので、できるだけはぐらかした。もしかしたら私はおかしいのかもしれない。*誰にもわからない？*この質問をあまりに頭の中でしすぎて、レコードがループしているかのような感覚だった。サンドラとのみ話をする機会がきた時、最初にジョン・デービスについての話をした。次に彼女がビルについてどれくらい知っているのか尋ねた。知り合いの中では一番知識をもっている人物だという。彼は知っている限りではコンピューターのプログラマーであり、U F O会議で出会ったそう。すぐに友人になったそうで、

彼らは私のことを話したというのだ！

その日は一日中ビルからもっと多くの情報を引き出そうとした。ジョン・デービスと同じように、ビルもまた多くの分野に精通していた。彼は自分の持っている知識を私に共有しようとしないので、私は不満に思った。時間が過ぎるごとにビルを遠ざけようとし、彼もそれに気づいていた。

バンクーバーに戻る前にサンドラとビルが夕食をしようと誘ってきた。食事の後で、みんなで立ち上がって去ろうとすると、ビルが自分の名刺を差し出した。

「あなたはジョン・デービスと仕事しているの？信じられない！」私は疑った。ージョンとビルが同じコンピュータ会社に勤めているとは！

私をあっけらかんと見るとビルはこう言った。「いいや。どういう意味かい？」

「あなたはジョン・デービスっていう名前の男性と仕事しているわね！」未だに彼はジョンという名前の男は知らないと主張した。私の恐れは怒りに変わり、こう言った。「見て！あなたはジョン・デービスっていう男性と仕事してるでしょ。小さい会社には8人位勤めていて、みんなUFOに没頭していて、あなたはコンピュータ会社でスーパーコンピュータをインストールしているんですよ。知っているわよ。一体ここで何が起きてるのよ？あなた何者！？」

ようやく彼は話をした。「あージョンか。ええ。私はジョンと働いているよ。名前を覚えるのが苦手だね。すまない。」

ビルはジョンについてそれ以上詳しく説明しなかった。夕飯代をすぐに支払いフェリーに乗るならすぐに出なければならないとコメントした。「バンクーバーに来ることがあったら電話をください。」と言った。「あなたの話を本当にもっと聞きたいです。」彼らが去るのを身じろぎもせず立ち見ながらも頭の中で疑問が渦巻いていた。彼らは何者なのだろう？二人共同職業で、しかも同じ職場で；でも実際は二人は同じ見かけで、同じ変なベージュのパンツを穿いてる。少しできすぎではないか！

(1991)

次の数ヶ月間何度もバンクーバーに戻りジョンに電話をして起こったことを話した。い

つものように、彼は何でも答えを持っていた。ビルは物忘れがひどく彼が言うには空想の世界に住んでいるという。彼らは似ているのか？彼が言うには時々人から同じことを言われるそう。私がつっこむほど、ジョンは語らなくなった。私はビルにも電話をして探ろうとした。サークルの友人にはビルとジョンの両方に会った人はいなかった。二人を同時に知るのは私だけだった。知っているU F O関連の人たちも、片方かもう片方にしか会っていなかった。私ので私に気が狂っていないという確信はとれなかった。

ビクトリアに住んでいた時期は短く、バンクーバーに住む方がより快適になっていた。友人が周りにいたからだ。わずか6ヶ月で荷造りをして戻ってきた。U F O現象からは距離を置きあまり目立たないようおとなしくしていた。他意はない；既に知り合った人たちと連絡を取らないという訳ではなかった。あるいは答えを探さなくなったという意味でもなかった。

この時期、サンドラがアリゾナのトゥーソンで開かれるU F O会議について話してくれた。それは最初のU F O会議だった。すぐに出席を決めた。私が開いたアブダクションの会議で会ったキャッシーという別のアブダクティも行くことになっていた。コストを下げるために一緒に部屋をとることにした。

まもなくアリゾナに飛行機で向かった。私と同じような経験をもつ人々と会えるかもしれないという期待から興奮していた。

数時間後、飛行機は着陸し、泊まるホテルに向かった。すぐに荷物を整理して、階下に行き、周囲の人々と話をした。私の話の一部分を話して廻った。そこで私は自分がそこにいた人と違うことに気づいた。私はエイリアンコンタクトの記憶がより多く、多くの事実から自分の考えもはっきりしていた。ほとんどの人々はコンタクトの間に実際に何がおこったのか混乱しているように思えた。

その日の早い時間に、自分がどれくらい話をするか、気をつけようと決めた。いくつかの理由から、まだ注意をしていた。例えば過去数ヶ月間、私に届く郵便物はみんな壊れていた：言い換えると空けられていた。同居人は私の経験について何も知らなかったし、私の関心ごとにも知らなかったが、彼も定期的に私の開封された郵便物に気づいたとき、それについて知りたくないと話したので、彼には何も話をしなかった。会議で見知らぬ人々に

あまりにも開放的になると、過去のことからいい結果は生まないだろうと感じた。

会議室で仕事をし、多くの人に話をした。次にアートルームに行き、ピーター・クラークという名のアーティストと話をした。彼の仕事は驚くべきもので、彼の仕事の内容に特に感心した。黒い目のエイリアンの大きいポスターが私の注意を惹きつけた。そのアートワークは注意を惹きエイリアンがフレンドリーであるというフィーリングを沢山与えてくれた。彼との会話の途中肩を叩かれたように感じ右耳に声が聞こえた。「あなたは興味深い話を持っているようですね。時間があるときに話を聞きたいです」話している人物を見ようと振り返ると不満のため息が出た。ナンバー3の男がそこにいた！ビルやジョンとそっくりの、同じ髪で同じ髪型で、目の色、オリーブ色の肌、めがね、もちろん想像どおり、同じベージュパンツを穿いている。くそっ！そう思った。終わりなんてくるの？

男には時間があるとき話しましょうと伝えた。次の数時間、彼は常につきまといこちらを見ながら待っていた。背中にずっとリュックを背負っていた。

男には話しかけず、夜の終わりには部屋に上るとベッドで横になっているキャッシーを見つけた。彼女はその日のことを“何か特別な”と呼び、話題をふられたので話し始めた。

「ミリアム、今日一日辺りをうろうろしていた男性を見た？彼ビルにそっくりだったわ！同じ髪型で、めがねで、肌の色で！」私もその男性を見かけ、彼が話をしようとアプローチしてきたことを伝えた：彼女が男を見ていたことが嬉しかった。その日まで私だけがこれら複数の似た男を見かけていたからだ。とても興奮したのは、これらの男をはっきりと見たことを確認したからだ。キャッシーと私はこの男性たちの似ている部分と信用できない点について沢山話した。

次の5日間にこの男はどこに行くにも私の後をついて来てので、何回か短い会話をした。私の最大の関心は、この男性に自分が何ができるかを探ることだ。会話の中で彼はコンピュータープログラマーだと言った—驚くことに。彼はエイリアンのテクノロジーに関連する本を書いていて、私が知っていることを書きたいという。ビルやジョンと同じようなタイプの質問をすべてしてきた。

そこには大勢のまったく知らない人々がいた。5日間ずっとに話しかけられ彼らの会話に従った。何人かは明らかに私の安全について心配していた。彼らに感謝したが、私は心

配していないと告げた。もしこれらの男性が私を傷つけるのであれば、これまでにそうしたはずだと考えた。

奇妙なことに彼らのような男性2人が会議に参加していた。二人とも同じ髪型で、めがねや肌色をしており、やはりベージュのパンツを穿いていた。また同じ黒のリュックを背負っていた。私と話した男は背の高い方で、低い方は私が近づくたびに逃げていった。おそらく彼は私とコンタクトをとってはならないのだ：少なくとも、私はそう感じた。

この間、何人かの人々は私のために背の低い方の男の写真を撮ろうとしてくれた。しかし彼は私たちを見るや立ち去り、ときどき文字通り逃げ出した。結局どうにか、クローンのような背の高い方の男性のちゃんとした写真と、背の低い方のプロフィール写真を撮影できた。写真を見比べると、背の高さ以外は人によっては双子に見えた。

会議の間、背の高いクローン男性とコーヒーを一緒にした。彼についてできるだけ詳しい情報を得ようというのが目的だった。UFO現象の中のテクノロジーの面にどうしてそんなに関心があるのかを尋ねた。彼はその話題に関する本を書いていると言うのだ：UFOに関するABC。意味はわかるが彼を信じなかった。会話は私がエイリアンから告げられた話に集中した。彼から情報を引き出すために自分の情報も少しだけ話した。男は私がフォーコーナー地区に行くべきではないと言って譲らなかった。彼曰く、まだ時期が早すぎるから必要なことを達成できないと言うのだ。「君にとってはまだ安全ではないから」と言う。意味はわからないがそこに近づかないようにと警告をしているように感じた。少なくともその時期に関しては。もっと詳しく聞こうとして、どうして近づいてはいけないのか質問するとはっきりとした答えは拒否した。彼曰く軍隊がそこに現れて地下の基地にいるという。彼の話を私は知っていた。エイリアンと一緒にいるときにそのことを示したからだ。

バンクーバーに戻ると弾を込めた。もはや私はビルとジョンに攻撃することができた。キャッシーもトゥーソンで“クローン”を見たからだ。私はビルに詰め寄るとようやく彼なりの興味深い見解を話してくれた。明らかに彼はアメリカの軍隊にいたことがあった。彼は1970年代にマインド変更プログラムを受けていた。そのプログラムは彼を深く動かし人生を変えたという。そのためにUFO現象に関わるようになったという。レストラ

ンに座って会話した中で彼は軍隊にいたときの話をし、F B I やC I Aで働いている知人がいるという。私は驚かなかった。早い時点で彼を疑っていたからだ。

ビルは私がどうやって瞑想をするのか質問してきた。詳細を段階を追って説明した。「私は必ず白い光を使うわ」こう話した。「地球の中心に自分をグラウンディングすると、地球と私をつなげるために中心にある緑のクリスタルを握るの。」この話をすると彼は驚いているように見えた。

「地球の中心部に行ったことがあるのかい？」と質問してきた。

「エイリアンのガイドでアストラルトラベルしてきたの」地球の中心部を見た人は少ないので、彼は私がそれを見たことに驚いていた。彼もまた緑のクリスタルを見たことがあるという。しかし彼は体にいるときでスピリットで見たのではないそうだ。

この深い会話にはなかなかたどりつかなかった。彼が心を開く前、まっすぐ目を見て正直に話をしなければあなたの元から去ってみんなに信用できない人だと言いつらと迫った。これは私と彼の初めての会話だー最後の会話ともなった。

ジョンとはビルよりも関係が良好で、ジョンに疑問や不安を話せばもっと情報を得られるだろうと思った。当時彼とビルの2人ともカリフォルニアとロシアに頻繁に旅行していた。ジョン曰く彼らはロシア政府のプロジェクトでスーパーコンピューターを設置しているのだという。彼にエイリアンとU F Oに関して知っている限りの情報を教えてほしいと要求した。彼は自分の会社の全員がそれらに興味を持ち、そこから情報を得ていると言っていた。彼の説明に満足しなかったので、もっと詳しく話を引き出そうとした。

ビルという時に、ジョンに全てを明かさないと2度と話をしないと伝えたことを話した。ジョンはビルからもらった情報の全てを含め、全ての質問に対して怖い話をした。彼曰く政府のテクノロジーによって彼らが電話の会話やキーワードを聞いているという。もし政府がこれらの言葉について少しでも聞きつけたら、自動で録音し後で聞けるようにしているそうだ。ロシアの政府とアメリカはリモートビューイング・プログラムを持ち、ビルはそれにしばらくの間関わっていたようだった。ビルとジョンと対決してからすぐに、彼らは姿をくらました。誰も2度と彼らから連絡がなかった。キャッシーと私がトゥーソンで会った男性について話した後、私が思うに彼らは正体がばれたので、バンクーバーのU F

○シーンから離れたのだと思った。

会議の後で背の高い方の“クローン”の写真を現地で連絡を交わした人に送った。彼女はそれをアメリカにいる別の友人に転送した。その人は同じようなプロフィールの男性に追われていたという。その女性は送られた写真を見て震え上がったそう。彼女を付回している男性も“クローン”そっくりだったのだ！

ビルの写真を撮ろうとしたがうまくいかなかった。しかしジョンの写真が会議の前から数枚持っていた。写真の中の3人の男を比べてみると際立って似ている。3人とも同じベージュのパンツを穿いているのが余計に気持ち悪さを際立たせていた。

ジョンとビルが消えてからしばらくしてカフェの仕事に戻った。ある日見上げると、彼がいた一ナンバー5の男。まったく！いつになったら終わるのよ？カウンターで他のお客さんのように接しながらこう考えていた。分別があるのなら普通以外のことを話しかけないほうがいいわよ！同じ髪の色で、目でめがねで、肌色で、はい、ダサイベージュのパンツでした。

数週間後彼の名前はセスだとしてとめた。彼は定期的にやってきて、簡単に私と話をすると食事を受け取った。会話は天気などの世間話だった。しかし会話を通して彼がコンピュータ会社に勤めていることがわかった。彼らはみんなコンピュータ会社に勤めている一この男たちは誰なんだろう？もし私を傷つけたければ、すでにやっているはずだ。彼らに煩わされさせないのが最良の策だと思った。

この数年間、どうして私がそんなに重要で注目を集め続けているのだろうかと思っていた。UFOコミュニティから完全に離れて、自分の話を人にするのを止めることにした。やり続けたら危険になりエイリアンから与えられた自分の使命を完遂することができないかもしれない：人々に自分が何者かを話すことを。

UFOコミュニティで出会った多くの人々と縁を切った。ゆっくりと奇妙な注目から遠ざかり自分の人生を送るように一人残された。

セスの存在は例外だった。彼は私の人生に留まり、どこに行こうとも私を見つけた。仕事を変え引越しようが関係なかった。飛行機を予約すると必ず12時間以内に彼とすれ違

うのだった。たいていは3日以内に会い旅行の計画はないかどこに行くのかを尋ねてくる。それは自然で簡単な会話だった；一度2～3分話をしたら、次の旅行まで彼を見かけないのだった。

私は自分が送ろうとした日常生活に戻っていった。仕事が始まる時がくればわかるだろう。UFOの世界から離れ再び社会に適応しながら静かに待ち続けていた。

アリゾナスパイラル

UFOやエイリアンに関わる人々や出来事から完全に距離を置くと1991年に決めてから12年の間、公の場に出るのを避けていた。しかしある朝目が覚めると再びエイリアンの仕事をする時期がきたのだとわかった。彼らの仕事に戻る日が来たらメッセージを受け取ることをずっとわかっていた。そして2003年の初めにその日はやってきた。

最後に私がアリゾナを訪れたのは1991年のことだ。トゥーソンでのUFO会議に出席したのだ。いつかフォーコーナーに行くことは分かっていたが、会議中クローンにフォーコーナーに行くのはもう数年待った方が良くと忠告されていた。他のクローンもそうだったが、彼らとのやりとりで警告を聞くと決めた。そのときがくれば自分でわかることに気づいていた。

2003年1月初めのある朝、目が覚めるとアリゾナとフォーコーナーに行こうと思った。何度も何度もフォーコーナーがなぜ心を占めるのか考え続けていた。やがてフォーコーナーのことが頭から離れなくなった。4か月が過ぎ、日ごとにアリゾナを訪れる気持ちが大きく強くなっていった。

エイリアンはこの地区についての沢山の情報を1988年に与えていた。もっとも重要な情報は、この世界の終わりの時になるとフォーコーナーは私にとって、また私と同じような人々にとって、とても重要になるだろうということだった。私や私と同じような人々が集まるのはそこだと言われた。最後の時が近くなった時そこは“安全な地”になるのだ。今こそ過去の恐怖と体験を見つめなければならないと決意した。

行きたい場所を全て訪れるためにはレンタカーを借りる必要があった。お金があまりかからないようキャンプで寝泊まりしようと決めた。キャンプも長距離旅行も初めてだったので、友達と一緒にいかないかと尋ねた。ほとんどの友達の仕事が忙しいか小さな子供がいるか旅行に行くお金がないかで都合がつかなかったのも、最近知り合った友達のキャリアに興味があるかどうか聞くことにした。彼女は共通の友達を通じて知り合った素敵な女性だった。彼女は20代前半で私は30代後半だったがお互いすぐ意気投合した。彼女は、最近秘書の仕事を首になったのでいつでも行けると分かっていた。彼女に電話し10日間

のフォーコーナー周辺への旅に興味があるか訊ねた。彼女は興味を示したので、私がレンタカーの支払いすることを伝えよりアピールした。

すぐにフェニックス行きの飛行機の格安チケットを見つけた。チケットの支払いをする前、キャリーに決める前に話したいことがあると伝えた。UFO体験を話すことを考えると不安だったがこれは重要だと分かっていた。次の日その話をするために会うことを決めた。

その日の午後、コマーシャル通りのコーヒーショップで会った。お店を出る前にこの話の重要性を伝えると騒がしい街通りにある店の外に出た。もし彼女が不快に感じ私を気が狂っていると思うのであれば旅に行くのを止めることができるように、正直に話す必要があると感じていた。話が進むにつれキャリーが当惑しているのが分かった。彼女に質問をする前に最後まで話させてほしいと頼んだ。私たちは車と人の少ない通りに向かっていった。外を歩くのは最適な日だ。花壇のある古い家を通り過ぎた時陽が差し込こんできた。なぜ今回フォーコーナーに行きたいかゆっくりと説明をする間日の光で気持ちがほぐれた。

人に始めてエイリアンとの遭遇体験を話す時にはいつも緊張する。数分後キャリーは私を遮った。「ミリアム！あなたが気が狂っているなんて全然思わないわ！世界には私たちが知らないことはたくさんあるもの。エイリアンに遭遇したという人はあなたが初めてだけど、私が信じていないということではないの」私はとても嬉しかったが、彼女が言ってくれたことに少し驚いた。歩きながらエイリアンの陰謀説から話題になっている問題に至るまで話をした。期待以上に彼女が宇宙人に関する知識を持っていることに驚いた。一緒に旅行に行くかどうかの決断を一晩考えるよう伝え、会話を終えた。彼女は考える必要はないと言ったが私はお願いした。

次の朝早くキャリーは昨日話した内容について全く問題ないと確認するため電話をかけてきて「いつ出発する？」と尋ねた。電話を切った後でフェニックスへの航空券の支払いを済ませた。

何かがもうそこまで来ているのが分かった。12年間もの間UFOコミュニティから離れてから、この旅が再び奇妙なエイリアンの世界に戻る最初のステップになることがわかった。その地区に行くことが非常に重要であると知っていたものの、同時に不安をも感じ

ていた。あなたは安全な地に沢山の人々を導くでしようと言われていた。そのとき一宇宙のUFOコミュニティの中で私の役割と密接に関わるであろう場所を訪れる時がついに来たのだ。

出発の前日は旅の計画に集中しようとした。お互いの行きたい目的地に喜んで合わせることができるので、キャリーとの旅を計画できるのは素晴らしかった。私はシップロックという岩と、アリゾナにあるホピ族居留地を廻ること、この二つだけをリクエストした。彼女のリクエストはニューメキシコのサンタフェと隕石センターを訪れることだった。10日間の旅の間、お互いの目的地へ行くことに問題はないとわかった。

出発前に1988年から90年にかけて書いたノートを読む必要があると感じた。ハロルドという名前の男性に関する資料を探した。詳しく書かれてある箇所を見つけて読んでみた。エイリアンからこの男性についての情報とどこでどのようにして出会うかを聞いていた。彼に会うときはアリゾナのフォーコーナー地区か、ペルーのどちらかの場所であろうと感じていた。彼に会う可能性について考えていた時から数年がたっていたので、誰を探すのか詳しく思い出すため、記憶を蘇らせたかった。ハロルドと出会う可能性があるという事については、バンクーバーを発つ前に誰にも話していなかった。

キャリーと私は5月18日の朝フェニックスに飛び立った。興奮と不安とが混在していた。キャリーに旅に不安を抱えていることは伝えなかった。私の人生は今日まで何年もエイリアンと関わっていたが、彼らと長い間距離をおいた後で、まっすぐ彼らの世界に戻って行こうとしていた。

2時間後飛行機はフェニックスに到着したが計画を変更する最初の出来事が起こった。到着が遅れたので予約していたレンタカーは誰か別の人に渡されていた。祝日の最終日だったので全く空きがなかった。その日の夜はタクシーでホテルに行くことしか選択は残されていなかった。朝には車の空きがあるだろうと告げられた。

翌日はこの遅れでゆっくりと一日がはじまった。ようやく午後になってセドナへと北へ出発し始めた。何時間もの間信じられないデコボコ道を走った後で、車は山の頂きに到着し、そこで見たものは素晴らしい景色だった。セドナの壮大な景色の素晴らしさは何年も聞いていたが、文字通り息を飲んだ。空に向かって地球から突き出ている深い赤茶けた岩

のフォーメーションは想像を超えていて、決して写真では捉えられないだろう。これらの壮大な構造物は運転している地区に点在していた。2人はなぜセドナが地球のパワースポットであるか容易に理解できたのだった。

最初にインフォメーションセンターに立ち寄った。中に入りパンフレットなどを物色した後、受付の女性に話しかけた。彼女がこの地区を旅行するならどこへ行くか訊ねた。観光で注目を集めている場所を探していないことを説明した。彼女の一番のお勧めはメサベルデと呼ばれる場所でコロラドの南西区域にある断崖の家にとっても惹きつけられた。キャリーと私は、絶対訪れたい場所のリストにそこを加えた。私たちはフラッグスタッフに行こうと激しい渋滞のハイウェイに向けて出発した。

夜遅くなったので、フラッグスタッフでキャンプすることにした。砂漠の夜は寒いと聞いていたが、あまりの寒さに驚き一晩中震えた。次の日の朝早く、ルート180の砂漠を越え、アルバカーキに向けて東に向かった。道中ペインテッド砂漠、隕石センター、そしてペトリファイドフォレスト国立公園に立ち寄った。アリゾナの砂漠は私たちの魂をこの地への深い畏敬の念と愛で満たし始めた。この区域は色彩豊かであらゆる場所に不思議が点在していた。すぐにこの世界には二つの種類の人間がいると分かった。砂とサボテンしか見えない人と、生命の存在と美を見出す人々。私たちは後者の方だった。

ニューメキシコとアリゾナの州境を超えたのは夕方5時だった。ガソリンの補給と水を買うためガソリンスタンドに止まった。私が地図を見ながら車で待っている間、キャリーは水を買いに店の中に入った。キャリーが戻ってきた時、運転ルートについて話した。メサベルダを訪れ、サンタフェに行くには十分な時間がないことは明白だったが、歴史ある古い街並みと不思議な断崖の家は滅多にない光景だったので、そこへ行くことを決めた。運転を再開すると、有名なルート666を通った。キャリーとハイウェイの数字で笑った。おそらく人はネガティブな数字と関わりのある道を通るのは、気持のいいものではないだろう。

私はクリスマスプレゼントを開ける子どものように興奮していた。バンクーバーを発つ前にキャリーにシップロックとエイリアンについて簡単に話をしていた。1988年、私がエイリアンに連れ去られた時、シップロックについてのイメージを見せられていた。彼

らがいつの日か私がここに行くだろうと話した時私は宇宙船の中にいた。ハイウェイでのエイリアン遭遇体験の後、長い間この広い地球上で、どうやって彼らが見せた場所を見つけられるのだろうかと思議だった。友達からセドナの雑誌を見せてもらう2年後までのことだ。フォーコーナーを旅する前、インターネットでシップロックについて検索した。情報は少なかったが、シップロックはナバホ族にとっての聖地であることが分かった。ナバホ族の人はシップロックが彼らをこの地にこの世界に連れてきたと信じている。

太陽は地平線近くに浮かび、オレンジ色が砂漠の空に命を吹き込み始めた。それは遠くからシップロックをみた最初の瞬間だった。近づくにつれ呼吸は乱れ始めた。まさに私が覚えているイメージそのものだったのだ。平坦な砂漠以外は何もない。空に伸びる美しいシルエットを見るため近くに車を止めた。はっきりとその姿を見た時、興奮が起こるのを感じた。目の前で一方に流れている平らな斜面の後ろに三つの峰が突き出ているのが見えた。感情の波が強く押し寄せ泣きだしてしまった。「ここだ」と思った。「これは真実でエイリアンが見せてくれたものと全く同じだ」。ようやく落ち着いた後、キャリーと私は何枚か写真を撮り車に乗り込み、ファーマングトンに向かって北へと再び進み始めた。

静寂の中夜の訪れが砂漠へとやってきた。とても長い一日の運転で二人とも疲れ切っていた。夜はすっかり更けていたので、その日は安いホテルに泊まるのが良いと決めた。疲れきっていたので、エイリアンやシップロックや終わらない自分の運命の可能性を考えないで眠れたのは有難かった。

次の日朝早く古い歴史ある断崖の家を訪れることに興奮していた。ニューメキシコからコロラド州まで横断しメサベルデに行くには数時間かかった。山脈から始まる緑の牧草地は目的地まで続き絵葉書のように完璧な美しさだった。ゆるやかな美しい起伏の山を越え、馬や古ぼけた木製のフェンスや緑の牧草地が小さな花に覆われ、青色に見えるのが不思議だった。絵のように美しい景色を眺めるため尾根の頂上で車を止めた。

コロラドの州境を越えた後、ナビをしていたキャリーがメサベルデに向かって曲がるよう言ったが時間がなかった。断崖の家に続く急こう配の風がふきつける坂を上った。山の側に近づいた時、何か不吉な様子に気づいた。木は全て黒く枯れ果て、銅像のように立っており、木の下には新しい木がわずか数フィートの高さで生えていた。ある場所は野生の

アザミで埋め尽くされ紫の海のようにだった。奇麗だったが同時に暗く陰気な風景だった。その日遅くなって数年前山火事があったと聞かされた。幸運にも火は断崖の古い家には届かなかったそうだ。

山の頂上に着いた時ツーリストセンターの駐車場を見つけた。丁度お昼だったので、陽は最も高く昇っていた。観光地の一つである歴史ある断崖の家ツアーの予約をしにツーリストセンターへ向かう道を横断した。旅は時間の余裕がない綿密なスケジュールだったので、予約受付デスクへ直行した。限られた時間の中で最適な短時間のツアーを見つけたので、チケットを買い地図をもらった。ツアーの後自分たちの足で見て回れる場所にも行くことができると言われた。

私たちのガイドは、断崖の家の周りの短い道を案内してくれた。赤土は家を建てる時の壁のレンガになっていた。このような建物を近くで見ることは素晴らしい恩恵だ。壁に触りながら、どんな人が住みなぜこの場所からいなくなりどのように暮らしていたのかに想いを巡らしていた。長い間ここに住んでいた人達の存在を感じていた。しばらく目を閉じ風の音を聞き家の周りを歩いている人々の顔を想像した。

ガイドは、更にキバに連れて行ってくれ、かつてそこに住んでいた人々が、地球の儀式をしていた場所だと説明してくれた。ここに住んでいた人々がずっと昔に去ったにも関わらず、彼らのプライベートな居住地へ招待されてもいないのに邪魔してしまったように感じた。

ツアーが終わった後、私たちはもう一つの巨大な断崖の家であるプエブロの無料ツアーに行ってみることにした。他の旅行者の足跡を辿った。私は道を歩きながら写真を撮っていた。キャリーは私の前を進んでいが、道がU字に曲がった角の辺りで見えなくなった。気温が上がり日陰でもすさまじい暑さだった。木陰で休憩した後、彼女に追いつこうと頑張った。

暑さで頭が垂れ下がりながら曲がりくねった道を歩いていた。道がカーブした時、頭を上げやせた丘を見上げた。そこに人と断崖の家を見ている短髪で黒髪のネイティブアメリカンの男性がいた。「なんてことハロルドだわ！」私は頭を振って瞬きをした。「オーケー、ミリアム。彼のはずがない、そんなはずがあるわけない。あなたは頭がおかしくなってい

て、これはちょっと行きすぎだわ」

一度に幾千もの考えが私の頭の中で繰り返された。「どうしよう？」めまいを感じながら叫び出しそうだった。

キャリーに追いついた後、手短にエイリアンとの遭遇体験の時伝えられたハロルドの話をした。1988年エイリアンは私に山の上でネイティブアメリカンの男性に会うであろうと言った。彼は短髪でハロルドという名前であること。彼を見た瞬間分かるであろうこと。出会うと彼は私に近づき沢山のことを教えてくれること。たまたま目に止まった人が長い間待ち続けていた人であることにショックを受けていた。

どうやって彼だと確かめようかと思った。「どうやったら彼の名前が分かるのだろう？」もし彼であったなら近づいて来ることを思い出した。キャリーとその場を歩き続けていたが、ハロルドに会ったかもしれない事に面喰らい、心ここにあらずだった。

キャリーは行って話しかけるように言い続けたが、近づいてくるのを待たなければならぬように感じていた。道に止めていた車に戻ることにし、彼が近づいてくるかどうか待った。20フィートほど離れた時、彼が友人を見てこっちに向って来るがわかった。呼吸が止まりそうだった。心臓は速くなり息を飲み込んだ。彼のエネルギーを感じた時、「これは人生の正念場かもしれない」と思った。後ろを振り向かなかった。もしハロルドだったら？全てに意味があったら？何が彼に導いたのか？なぜ、この旅でメサベルデに来ることになったのだろう？背後に足早に向かって来る足音が聞こえ、左を見た瞬間私の横に沿って歩いている彼をみた。

「こんにちは」と彼は言った。「マイゴッド彼に違いない」と思った。私たちはさっきキャリーと訪れた古代の場所について話し始めた。そこで彼は名前を言ったのだ：ハロルド！涙が込み上げてきそうなを感じたが、落ち着かなければならないと分かっていた。全てが何を意味しているのか推測できなかった。「何かが二人の未来に待ち受けているのだとしたら？」そう思った。

車に向かって歩き始めた時、ハロルドは毒のあるツタの種が見られるという道の脇を指差した。私もキャリーもどんなものか知らなかったので見ようと向きを変えた。脇道はたった25フィートほどだった。私たちは道の端に立ち、ハロルドがツタの葉を見せてくれ

る間話を聞いていた。彼は私たちの旅についてどこに行きどこへ向かうのか訊ね始めた。大まかな旅全体の計画を話すとハロルドと彼の友達にナバホ族が未だ強い文化のルーツを持っていることに感動したと伝えた。旅のもっとも素晴らしい面は、出逢いと文化と人々の探求だ。

ハロルドはネイティブの言語で風についての話を話してくれた。彼の話をしている時最も驚くべき現象が起こった。彼の眼を見ている間、螺旋が出たり入ったりしているのが見えた。それは決して終わらなかった。彼の顔から掛け布団が巻き上げられるようなフラッシュが一瞬見えた。それは言い表すことができない、もはや彼は人間ではないかのように見えた。この体験を理解するのに十分な時間がないくらいとても強く、そして速かったのだ。私の見たビジョンは見たときと同じくらいの速さで普通に戻った。ハロルドと会うことは計画されていたかのようだ。このようなすさまじい感情の後、駐車場に戻る小道を歩いている間、ずっと頭は空っぽだった。

旅行会社に着いた時、ハロルドと友達がモニュメントバレーでキャンプする場所についてアドバイスしてくれた。別れを告げるとキャリーと車に戻った。別れは奇妙な午後には平凡すぎるくらい普通だった。キャリーと二人で歩道を歩きだした時、感情が解放され、私は泣きだした。今経験したことを彼女に話した。

キャリーはハロルドに話すべきだと言ったが、頭がはっきりとせず、一人静かに考えをまとめから彼に話しても遅くないと思った。出会って数分で彼に私の人生に起こったエイリアン遭遇体験を話すのは不可能だった。私たちの出会いは何を意味するのか思いめぐらす時、頭の中は質問で渦巻いていた。これは私の人生で重要な出来事で、何が起こりなぜ起こったのか理解するのにじっくり考える時間が必要だった。

「ミリアム、彼がこっちにくるわ！」車のトランクの横に立っていた時、キャリーが言った。ハロルドと友達は素早く追いつき、コルテッツと一緒に戻らないかと聞いてきた。とても行きたかったのだが、残念なことにキャリーは興味なかった。回り道をしたら行きたい場所を全て回る十分な時間がないと言い続けるのだった。短い会話の後で、私たちはメールアドレスを交換し彼らは去って行った。二人はシルバーのジープに乗り出発した。

「これは全く驚くべきことだけどどんな意味があるのだろうか？」と考えた。この出会い

がどれほど影響を与えたかを思い出した時、私のエネルギーは揺れた。

駐車場に戻った時、山から下りた後で再び会えると感じていた。やはり彼らはそこにいた。道の端に車を止めていた。彼らを追い越す時手を振った。どうしてこの人に会ったのだろう？仲のいい友達とはよく起こったが、全くの他人では初めてだった。私たちは会うべくしてあったのだという確信はわずかに固まった。

出発してすぐ、モニュメントバレーに行くにはどのルートにのっていいのか分からないことに気付いた。次に休憩できる場所で止まり地図を見た。山の端には一台の車が止まる位のスペースしかなかった。少しして再び彼らを見かけた。今度は彼らが手を振って去って行った。再び道に戻った時、山の下の駐車場に止めてある車はハロルドの車に似ていると気づいた。しかし確かではなかったので運転し続けた。車を止めず駐車場を通り過ぎ、再び道に戻った。するとその車は後ろをついて来た。彼らだと気づいたので止まって窓を開けた。ハロルドは車をとめもう一度一緒に行かないか訊ねてきた。私たちは出来ないと伝えたが、一緒に行くことができたなら私は願った。キャリーの希望を尊重しなければならない。必ず連絡すると彼に伝え出発した。

赤い岩が天国に届きそうな程素敵な場所であるモニュメントバレーのゴールドディングスのキャンプ場でその夜はキャンプをした。目覚めた時本当に美しい場所だということに気づいた。岩の向こうから登る毎秒ごとに色が変わる日の出は圧巻だった。

次の目的地はキャニオン・デ・シェイ国定公園だった。レッドロックメサをドライブするのは本当に美しかった。太陽光線が私たちの目の前で赤褐色の岩に命を吹き込んだ。荒涼とした乾いた砂漠が瞬く間に変わり、一瞬毎に太陽光線は赤茶けた岩の色を薄いピンクから濃い褐色の赤に変えていた。もしあなたが一日中レッドロックに座ってその様子を眺めたなら、太陽の方向に色が変わるのが分かるだろう。時間ごとに完全に新しい命の情景を見せてくれるのだ。

キャニオン・デ・シェイ国定公園はナバホ族の居留地だ。国定公園であろうがナバホ族がその溪谷を保有している。彼らはそこに今も住んでおり、羊を飼いトウモロコシを植え、伝統的な生活を送っている。辺り一面が見渡せる場所ではトウモロコシの成長と、羊の群れが見える。厳しい生活のように見えてもこれこそあるべき生活のように思える：大地と

調和し対立していない。土地を神聖に保っているのだ。

キャニオンについてから、その美しさにすっかり圧倒されていた。キャニオンの頂上でキャンプができる場所を探すには時間はかからなかった。到着しスティーブンソンというオーナーがあいさつしにやってきたのだ。彼はとても気さくなナバホ族の男性だった。話をしているうちに、彼がキャニオンの景観地の一つであるスパイダーロックのツアーをしていることがわかった。聖なる地への個人的なツアーだということに驚いたのだった。全ては完璧でようやく少しリラックスできたように感じていた。

ツアーが始まる朝までにキャニオンの頂上を見て廻る十分な時間があった。緑色の美しい渓谷が見渡せるビューポイントから山下の景色を見下ろした。渓谷の大地の美しい生命は、言葉では言い現わし難いものだった。存在感だけではなく昔からずっとそこにあり続けてきた渓谷の生命は、私たちの心を魅了した。今回の旅の中でもっとも興味深く息をのむ場所であるのに、なぜもっと観光客がいないのかわからなかった。2人でそこがまだ素のまま残っていることに感謝していた。高台から日没を眺め、キャニオンの精霊におやすみを言った。

早朝 7 時にキャリーと私はスティーブンソンと他のキャンプ仲間たちと一緒にキャニオンの谷底にハイキングに向かった。みな水を沢山持って行ったのだが暑さにまいってしまい、スティーブンソンはゆっくり歩くように言ってくれた。彼はスパイダーロックに向かっている谷底へ連れて行ってくれた。風が私たちにささやいていた。歩きながら、スティーブンソンが話す自分の民であるナバホ族について聞いていた。道の途中で彼は小さな断崖の家と壊れた陶器の破片を見せてくれた。私たちは場を乱さないように自重しながら案内してくれたスティーブンソンに感謝した。

熱さは疲れを増長させ、キャンプ場まで歩いて戻るのが難しいと感じていた。幸いにも両端の木に谷底に沿って流れている小川があった。みんなで冷たい水のそばで休憩した。みんな私を見て笑い、私は全身に冷たい水をかけ悦んだ。そこに横たわっている間、体に水をかけながら想いを巡らせていた。「私がここへ来る前に、何人がこのオアシスを見つけたらう？」 谷底に個人的に繋がれたことを有難く感じていた。何時間ものハイキングの後キャンプ場に戻った。ハイキング中の全ての瞬間を回想した：小川の冷たい水、渓谷

の褐色の岩肌、岩壁と溪谷を覆っている緑の草。

やっとキャンプ場に着いた時、スティーブンソンは、親切に私たちを夕食に招待してくれた。彼の申し出を受けてレストランのあるシンリまで運転して行った。長いハイキングとキャンプ食だけの日々が続いていたので、夕食らしい食事を味わえるのは素晴らしい癒しだった。

シンリから戻ってきた時キャンプ場に一台の車が入り、私たちのテントの二つ向こうの場所を選んだ。彼らがテントを組み立てるのを2人で見ていた。いつも通りにスティーブンソンはカップルの方へ立ち寄り、数分話しをしていた。

スティーブンソンが立ち去った後、そのカップルはテントへ挨拶をしにやってきた。バーバラとザックと自己紹介をした。会話は普通のやりとりだった。どこから来たのか？どこにいくのか？この地区をどう思うか？キャリーと私は全ての会話に戸惑っていた。私たちは彼らが素性或来た場所を偽っていると感じていた。その話しは所々奇妙で話した後二人とも嫌な感じがしたのだ。

バーバラとザックは結婚していると言っていたが、2人の話し方は嘘をついているかのようだった。ここに来る前グランドキャニオンを登り、同じ日に下山したと話していた。いかに暑く疲れたかを説明したのだがつじつまがあわない！バーバラはシーツのように真っ白で、全く日に焼けていない。腕さえも！グランドキャニオンを一日中登山したなら体のどこかが日焼けしているはずだ。ここでは日焼け止めさえ太陽を遮るには十分ではない。次の謎はグランドキャニオンを登るなら、地上にキャンプしなければならないと言う。暗くなる前に、戻ってくることができないからだという。ハイキングは片道8時間もかかるのだ。キャリーとこの二人は、何かおかしいと感じていたが、それが何なのかは定かではなかった。

その夜疲れ果て早く寝ることにした。2人ともキャンプ旅が始まってから、熟睡できていなかった。私は毎晩少なくとも2、3回は目が覚めていたので、早く寝ればちゃんと睡眠をとれるだろうと期待した。

朝早く目が覚め目を開けた途端何かがおかしいとわかった。何かにとっても腹がたったーしかし何に対してかは分からなかった。

テントから出るとキャリーに自分の感じている気持ちを伝え、ひどい気分を断ち切るため、時間をもらえるよう頼んだ。今までにこのような気持があったかは思い出せない。腹が立っているだけでなく、同時に疲れきっていた。マラソンでも走ったかのように疲れており、エネルギー全てを消耗していた。

30分後二人とも着替えを済ませ、会話をすることなく朝食を取り始めた。私が「夕べは全く目が覚めなかった。完全に覚えてない。でも何でこんなに疲れているのかしら？もしかしたら昨夜何かが起きたのかもしれない」と言った。腕や足お腹切り傷やマークがないか探し始めた一肌に見えるどこかに。

「ええミリアム。私も昨日は目が覚めなかったわ。」キャリーが言った。二人ともおかしな夜を過ごしたのは明らかだった。もしかしたらエイリアンに連れて行かれたのかもしれないと思い始めた。キャリーと私は連れて行かれたサインが何かないか体をチェックした。

ザックが朝の挨拶をしにやってきた。少し話した後、彼がこう聞いてきた。「夕べはヒューっていう変な音が聞こえたかい？」

「いいえ」と答えた。「何の事を言っているの？」

「夕べだよー何も聞こえなかったなんて信じられないよ」彼の説明によると、キャンプ場からキャンプ場へかん高いズーッというような音が鳴り響き、キャンプ場の周りに長いこと留まっていたそうなのだ。「僕とバーバラは眠れなかったよ。だけど、スティーブソンのところへ何が起きているのか確かめに行くにはとても恐ろしくて行けなかったよ」彼の話を聞き、昨夜訪問客があった可能性が現実的になりパニックになった。

次の30分間、朝の出来事についてとても腹を立てながら歩いていた。バーバラとザックとはもうこれ以上話をしたくない。彼らがおかしな音について話したのでより腹が立っていた。どうして覚えてないのだろう？エイリアンは私を連れていったのだろうか？何故？想像だったのか？気を確かに保とうと、答えのでない質問を放っておくことにした。

その夜、キャリーと私はホピの土地を通してグランドキャニオンに向かう予定だった。その日の行程はとても楽しみだったが、まだ気分が悪く具合が悪かった。今朝の出来事を振り落とそうとしたが難しかった。荷造りし出発準備をしていると、バーバラとザックが再びやってきた。グランドキャニオンに入るパスをくれたーおかげで入場料の25ドルを

節約できたので助かった。彼らは昼食をとった場所を強く勧めてきた。ザックは何度も行き方の説明を繰り返し、忘れないようにキームス・キャニオンという名前まで書いてくれた。

出発前にスティーブンソンのところにコーヒーを飲み立ち寄った。キャリーとスティーブンソンの待つコーヒーショップに車で向かうと、彼は早速さよならを言いに来てくれた。個人ツアーがどれほど意味があったか、どれだけキャニオンを気にいったかを彼に伝えた。

ちょうどそこへザックとバーバラが再びやって来た！彼らはグランドキャニオンの地図をくれると、キャンプをするのに良い場所を教えその場所を使うように強く勧めてきた。キャリーも私もこれまで以上に彼らを怪しんだ。感謝はしたが彼らが勧めた場所ではキャンプをしないと内心思った。地図を見た時示していた場所が何百もある場所の中で最も遠いことがわかった。彼らが去った後すぐにスティーブンソンもそこでキャンプをしないようにと強く言った。彼はいつも静かに穏やかに話しをする人物で、このように強く言うことはなかった。警告に注意を払うべきだと思った。その日キャニオンを出発する寂しさと再び旅に行ける嬉しさとが入り混じった気持ちでキャニオン・デ・シェイ国定公園を出発した。

キャンプ場を去って10分位すると車に沿って飛ぶワタリガラスが見えた。数時間後、定期的に道の脇に止まっているのを何度も目にした。近づくと通り過ぎるまで車に沿って飛ぶのだ。グランドキャニオンまでずっと着いてくるかのようで、私たちの旅が安全なものになるようにスティーブンソンが送ってくれたのかもしれないと思った。

お昼時になってキャリーと私は“キームスキャニオン”という標識のところでハイウェイから降りた。そこには MacGee's インディアンアートという小さな店がありホピのジュエリー、お面、本やカチーナ人形などが置いてあった。カチーナはホピの儀式のための精霊だ。それぞれの精霊は特別なコスチュームをまとっており、人形は異なる精霊を表現するため木で彫られている。私はぞくぞくした。

良く考えた後、二冊の本とホピがデザインした特別なシルバーの指輪を買うことにした。その指輪は驚くことに安価で内側に“ホピによる製作”と記載してある本物だった。カウ

ンターで働いていた女性はとても気さくで、興味がありそうな本を選ぶのを手伝ってくれた。彼女が布で指輪を磨き始めた時そのシンボルはどんな意味があるのか訊ねると、それが男性と水を表現していると説明した。彼女は再び目を細めながらシンボルを読み、私を見上げるとまた指輪の所に戻った。「このシンボルは聖なる羽です。これはとても特別な指輪よ！」彼女は再び私を見た。「これはとても特殊な指輪で聖なる羽が彫られていますー普通はこのシンボルを使うことはありません。これはとても特別だわ。」私は身震いし自分にとって意味がある物だとわかった。これはもう一つのサインであり、どうやって迷宮が解明されるか理解した。指輪は私が来るのを待っていたのだ。指輪を手にし指にはめた時新しい人生に踏み込んだのだと感じた。エイリアン達はこの地区と私の深いつながりについて話していた；なぜかこの人々と繋がっていることをわかっていた。指輪がそれを物語っていた。

買い物を終えるとキャリーは車に戻り私は隣の店にコーヒーを買いに入った。店に入った時大勢のホピ族がレストランに座っているのが見えた。トイレから出てコーヒーを飲み、支払いをしゆっくり歩いて部屋全体を見回しながら出ようとした時、5人のホピ族の男性達が私を見ていた。数秒間位だった。彼らの頭が長い首の上からすごく長く伸びて、私のところまでやってきた。彼らは丁度ハロルドの眼を見たときのように、渦巻きのように見える大きな目で私を見ていた。ここでもまた彼らの風貌が普通に戻る前にピカッと光った。その瞬間私はホピ族とは何者かが分かった。なぜ彼らが沢山の私の質問に答えることができるのか、UFOや、エイリアン達の知識を持っているのかを理解した。突然全ての点と線が一つに繋がったようだった。立ち去ろうとドアに歩み寄った時、ホピ族に会うために再びここへ戻ってくるであろうことが分かった。私の数々の運命の力が、彼らに繋がった。

たった今本物のホピの人々に会うことを許されたのだと分かった。新しい道に入ってからというもの、かつてないほどにこれらの点は明白だった。聖なる羽が彫られている特別な指輪を手にしたことは意味があるのだとわかる。人生の新しい章が始まったのだ。1988年にエイリアンに言われたことをこの旅で全て確認した。私の仕事は今始まろうとしていた。

車に戻った時、たった今体験したことをキャリーに話した。震えていたが心は穏やかだ

った。進むべき道が明らかになったが、はっきりし過ぎた為に不安も感じていた。それ以上に何度も遭遇した謎の渦巻きに当惑した。家に帰り渦巻きの意味を知るための手掛かりを探す必要性を感じた。これだけは明らかだ：渦巻きはメッセージなのだ。答えはもうそこにあるに違いない。これまでの日々で多くの事を確信し明らかになった。そう思った。

グランドキャニオンに入り受付の女性にチケットを見せた時キャリーが日付に気づいた。それはキャニオン・デ・シェイ国立公園からきた夫婦が谷底から歩いてきたと言っていた後に購入されたものだった。実際彼らがキャニオン・デ・シェイ国立公園に到着した日と同じ日付だった。これはキャリーと私が彼らに抱いていた疑いが正しかったことを証明した。しかし疑問なのはなぜ？ どうして？ 何のために？ ということだ。キャンプ場での奇妙な夜や嘘などを考慮し、もらったメモを全て捨てた。彼らのエネルギーを周りに感じなくなかった。これらの出来事から彼らがどうしてホピの大地であるキームス・キャニオンに泊まるように促したのか疑問だった。

最後のキャンプ地はグランドキャニオンだった。スティーブンソンの言っていた公園の入り口付近にある溪谷の頂上を選んだ。テントを組み立てている時ワタリガラスがテントの隣に降りてきた。見守られているという良いサインだと受け取った。日が沈む前ビューポイントに行った。二人ともグランドキャニオンにがっかりしていた。個人的には広大な景観は確かにパワフルだった；しかしキャニオン・デ・シェイで過ごしそこで感じた地球との深いつながりを体験した後では比較にならないと感じていた。太陽が地平線低く沈みかけたので、赤い岩肌は暗く陰りドラマチックな陰影が見えず最高の景色を見るには遅すぎる時間帯だった。残念なことにこの日は旅の最終日であり、景観を見る最後の機会だった。

その夜眠りに就こうとしていた時キャリーの時計が正常に動かなかった：目覚ましをセットできなかった。帰りの飛行機が飛ぶフェニックス空港に戻るため朝早く起きなければならず2人は少し心配になった。キャリーにワタリガラスが起こしてくれるから心配しないようにと言った。私たちを見ているようだからもしそれが本当ならこの問題を助けてくれるだろう。

新しい日の太陽が早い時間にキャンプ場に差し込むと、ワタリガラスはリクエストした

時間ぴったりに鳴き2人を起こしてくれた。フォーコーナーで過ごす最高のエンディングだった。簡単な軽食をとりフェニックスと帰りの飛行機に向けて素早く南へと進み始めた。

私たちは砂漠での時が終わったことを寂しく感じていた。そこでの経験は言い現わすことのできないほど平和で魂を満たしてくれた。フォーコーナー地区ではそれ自体が色んなことを示してくれたので、私たちのハートにいつまでも残り続けるだろう。表面上では地球は荒涼とし、ほとんど死んでいるかのように見える。もしあなたが心を開くことを許せば目に耳に全ての感覚に飛び込んできてあなたに話しかけてくるだろう。そこでは今まで行った中でも最も地球と繋がることのできる場所で、まるで地球が本当にあなたの声を聞きささやき返しているようだ。なぜここに来た沢山の人がこの場所を世界のパワースポットと感じるのかわかった。

キャリーと私はこの旅で起こった出来事について考えていた。私たちは家に着き暑いシャワーとベッドの上で眠れることが楽しみだった。旅の最後の余韻を味わいいつまでも赤茶色の岩肌が頭から離れなかった。私たちの夢を満たし新しい道に向かって始まる旅となった。

空の旅も終わりにさしかかり、バンクーバーへ到着した時、私の頭は渦巻きに引き戻された。アパートに着くとすぐにインターネットでメッセージを説明する情報が何かないか見てみることにした。あらゆる記事のそれぞれの小さな破片を何時間も読んだが、なぜ渦巻きをみたのか、どうやって私に関係したのかを教えてくれるものは何も見つからなかった。フラストレーションを感じてしばらくコンピューターから離れ2～3日開かなかった。

再び調査を開始した時、南西インディアンとホピ族に直接つながる情報の糸を見つけた。

短い休憩をとった後で友人のアンナに電話した。旅での出来事を彼女の簡単に話した。ETが以前言及していたハロルドとどのようにして出会ったか話した。「オーマイゴッド！」と彼女は言った。「あなたが何年も前に彼について話してくれたことを覚えているわ」彼女は本当にハロルドなのか確かなのかと訊ねたので、出会いに関する全ての詳細を説明した。彼女はこの全てのやりとりを理解してくれた。彼女もまた渦巻きについて重要であると考えたので、その意味が分かるのを心待ちにした。私は電話を切りアンナがどれほど私の人生の不思議な体験の数々の始まりからずっと私をサポートしてくれたかに思いをは

せた。これら全てを通して来た後で未だに彼女が私の人生に関わってくれることは、大きな意味があった。

パソコンの前に座った時、太陽がキッチンの小さな窓に差し込んだ。少し余分な時間があったので、ホピの人々や文化について調べようと思った。おそらくホピの人々にとって渦巻きが何を意味するのか見つかるかもしれない。複数のウェブサイトの記事にざっと目を通していた時、ホピ族についてのある読み物に注意を惹きつけられた。偶然ホピの予言を目にし読み始め、渦巻きについての答えを見つけられるような気がした。

文字を一つ一つゆっくり読みながら泣きだしていた。「どうして今までこれを見つけられなかっただろうか？」ホピの予言はエイリアンが口頭で話していたいくつかの話と同じものだった。信じられなかった。読み続けると「青い星の予言」と名づけられているものを見つけた。まさか？涙がゆっくり頬をつたいコンピューターの画面を見つめながらももう少しで呼吸がとまる程だった。

青い星の予言を読んだ時、何をしようどこへ行こうと私の運命は決められていたのだと気付いた。この知識に降参した。引き出しから何年も前に買ったネックレスをとりだした。外さなければならぬ時以外は14年間肌身離さずそれを身につけていた。チェーンが壊れていたが新しい物を買うお金がなかったので引き出しに入れていた。あふれ出る涙とともに、箱からネックレスをとりだした。手のひらにそっと置き、目を閉じ深呼吸した。息を吐き出し目を開け1, 2, 3-9までずっと数えた。9つの点があるのだ！青い星の予言は9つの点がある青い星がこの世の最後の時が来る前に人々に準備をするように警告するために空に出現するだろうと言われているものだ。

これは1989年にエイリアンが買うように導いたネックレスで、将来それは私や他の人々にとって重要になるであろうと言われていた。

彼らが私に与えたメッセージは明らかだった。ある日空に星が現れ、すべての人々がそれを見るだろう。何者も何事もその星の出現を世界から隠すことはできない。それはこの世界の終わりが近づき準備をする時が近づいたサインとなるだろう。

アリゾナを旅しシップロック岩を見てハロルドを見つけることができた後で、このようなメッセージが明らかになり驚いていた。今やホピ族とは何者なのかなぜ彼らが何も知ら

ないずっと前から私にとって重要だったのがわかった。過去と同様に今でも私が経験したことは空想ではなかったことがわかった。宇宙での私の役割とグローバルな体験は重要だった。これ以上はっきりしたことはないー私は自分の仕事を始めなければならない。ずっと前に彼らに頼まれた仕事であるギャザリング（祈りの集会）を始めなければならないのだ。

ホピメディスンマン

アリゾナから戻るとあっという間に時は過ぎていった。家に戻りホピの予言を見つけてから自己の感情的な部分が甦り、運命を確かめたいと叫び声をあげていた。

2004年の6月18日にバンクーバーを発った。飛行機に乗るともう戻れないとわかっていた。目前に何が待ち構えているようにもそれに出会う決心をした。静かに座りこの16年のことを振り返ってみる。エイリアンとの遭遇により多くの変化が起こっていた。考えにつぐ考えが頭の中に浮かび続けた；過去、現在、そして未来がひとつの絵巻のようにつながっている。過去に起こった緊迫した出来事が混ざり合い、もはやひとつのレベルで物事を捉えられなくなっていた。質問の答えが今だかつてないほど近づいているように思えた。

ハロルドとは前回の旅から電子メールを通じて連絡を取り続けていた。まだ曖昧にしていたが1988年に彼との出会いが予言されていたことを仄めかしていた。あの場所に戻ったらもう一度会って欲しいと頼むと彼は同意してくれた。再び会って一緒に過ごすべきなのかはわからない。私の人生における彼の役割は今年の砂漠で満たされているのかもしれない。ハロルドの瞳に渦巻きが見えなかったなら、ホピの男性を見たときも同じように反応しなかったに違いない。あの瞬間が引き金になって私を真実に導き、結果として自分の運命といくつかの問いに対する答えを手にしていった。

飛行機の車輪がドゥランゴの地に足をつけた。待っている間、興奮で鼓動が高鳴った。私は戻ってきた；フォーコーナー地区に戻ってきた。自分の家だと感じる場所に。ハロルドに電話する前に荷物を拾いレンタカーを借りた。夜会って話すことになっている。予定しているキャンプ場を彼に告げると、後でそこに迎えに来るそうだ。

太陽は暑くドゥランゴを運転するのに絶好の日だった。キャンプ場に着くと、テントを設営して彼を待った。待って待ち続けた。彼に会ったら落ち着いて感情的にならないようにと自分に言い聞かせた。思ったよりもずっと遅く彼はやって来た。彼をキャンプ場に引っ張って行った。ジープから降りると、彼は嬉しそうだが反面躊躇しているのも感じとれた；明らかに私の意図がわからないようだ。夕飯を食べる場所を決めるまでの間抱擁と挨拶をしながらも、お互い少しだけ気まずかった。

ドゥランゴに戻る間ほとんど会話を交わさなかった。見知らぬ同士が始めてパーティ会ったとき交わすタイプの会話だった。落ち着くように自分に言い聞かせていた―あの話をするときは落ち着きを保たなければ。一体どこでどのようにして話を始めよう？

食事を注文し待っている間が人生の中でもっともきつい会話だった。話をした瞬間から、エイリアンについて話す勇気がないとわかった。16年も前から始まる話をどうやって話せるだろう―子供時代から人生を変えてしまった話を？より簡単な道を選ぶことにしようと思った。ビジョンや夢から得たように話をすり替えた。時間を考慮すればこれが最良の方法のように思えた。

話をする間それにまつわる感情を抱え続けていることが困難になった。悲しいことだが、感情に従った方が私にとってはよかった。涙が流れるとハロルドが居心地悪そうにし始めた。爪を噛みぼんやりと私を見ていた。彼は時々話を中断し、過去にも同じように人が彼と出会ったことで人生が変わったという話をした。その瞬間話をすべて打ち明けることができないだろうと思った。そこで私はエイリアンに遭遇したことを除いて全ての話をした。彼は私のことを何も知らないのでチャンスを棒に振ったと確信した。本当は真実を打ち明けてどうして彼と話したかったのかを説明したいのだがもう何もできない。食事を急いで終わるとお金を払いキャンプ場に送ってもらった。

太陽が沈むと星の下を歩いた。この旅は私に何をもちたのだろうか考えた。最初の日には激しく穏やかではなかったので、感情的になりはつきりとしなかった。考えが混乱しまとまらず、一晩中眠れなかった。

少し眠った後で5時に腕時計を見た。その1時間後ふいに目が覚めるとテントの外で人の声がした。時間を見てこれ以上眠れないことに気がついた。次の目的地のキャニオン・デ・シェリに着くまでに1時間の休息を維持しなければならなかった。疲れきっていたが、ドゥランゴを出て次の冒険に向かって車を進めた。

1時間後キャニオン・デ・シェリの頂上のキャンプ場に到着した。そこは素晴らしい場所だった。睡眠不足とハロルドとの夕食で完全に疲れきっていた；テントを設置しただ眠りたかった。スティーブンソンを見なかったのが、他のキャンプ場に行き誰か彼を知らないかと尋ねて歩いた。3人がスティーブンソンは別のハイカーをキャニオンに連れて行っ

たので数時間は戻らないと話していた。その日はとても暑かったがやっと眠ることができた。目覚めてテントを出るとスティーブンソンが私のところにやって来てあいさつした。彼はとても喜んでくれて夕飯を食べに行かないかと誘ってくれた。嬉しかったのだが断らなければならなかった。まだ疲れていたからだ。すると彼は明日スイートロッジを体験しないかと誘ってきたので了承した。誘われて素晴らしい体験に参加できることが嬉しかった。

その日はキャンプ場から遠くには行かず回想に時間を費やした。“もしかしたら”これが本当に全て現実だとしたら？もしここに居るべきなら？ホピの人々にとって私は重要だろうか？私がおかしかったら？人生について深く熟考しながらその夜は眠りについた。

次の朝は午後計画しているイベントに頭を切り替えた。スウェットロッジは初めてで知識も限定されていた。私が知っていたのはそれが聖なるスピリチュアルな体験であることだ。参加するためにその時間に到着するようになっていたのだろうと感じた。もしドゥランゴで前日過ごしていたらスウェットの時間となる午後にはキャニオン・デ・シェリに到着していなかったー完全にミスしていた。

その日の午前中はキャニオンのツアーで費やし、景観のいい高所で景色を堪能しながらレッドロックを楽しんだ。色が変わるのを見ていると落ち着く効果があるのに気づいた。テントに戻ると、スウェットの前に早めの軽いランチを食べた。あまりにも暑かったので日陰を探しジュニパーの木陰を見つけた。スティーブンソンがキャンプ場で通常の業務をこなし私のところに話をしに来た。一緒に座りなぜ戻って来たのか彼に話した。ハロルドと会ったことやこの地区に戻るきっかけとなった出来事について打ち明けた。彼は私がスウェットをするのはいいことだろうと言った。期待を満たしてくれるだろうと。スティーブンソンは立ち上がってあいさつし準備のために私を残して去って行った。私は砂漠の夏の太陽から涼を取るためにその場に留まっていた。

1時間後みんなで火の周りに集まりスティーブンソンがスウェットロッジのために岩を暖めていた。火の熱で火花が飛び散り木から炎があがり、輪になって待っている人々に時間を知らせた。経験に対する精神的な準備をする時だと思ったので、横に座り静かにそこでの目的について振り返った。

ナバホ族のメディスンマンが到着するとロッジに入る前に簡単に話をした。皆で彼に従いロッジの濃い空気の中に入っていった。地面の周りでそれぞれの場所を見つけ出した。穴の中は熱い石で敷き詰められていて入るなり思考は穏やかになった。

儀式が始まると精神統一をしこの瞬間を自分の魂に集中させた。メディスンマンの話を聞きながら瞑想と体験が始まった。チャンティングによって長い間抱えていた感情に近づいた。泣き出した一沢山の旅への心配と不安を解放していた。涙と儀式が私を浄化した。

儀式は段階ごとに行われ終わるたびに私は落ち着き浄化されていった。自分の魂に深くふれた経験だった。このイベントに参加できたことに幸運と名誉を感じメディスンマンとスティーブンソンとも分り合えた。儀式はナバホ族でない人達に向けに変更していると理解していますと彼らに話した。ナバホ族の為の儀式であれば違ったものになっていただろう。ナバホ族のチャントとスウェットを深く感じ経験にとっても感謝をした。

儀式は聖なるものでロッジを去った後も自分達で経験を維持するように告げられた。ナバホ族に対して敬意を表すため内容を詳細に話すことができない。ロッジから出ると次の儀式を行った：夕飯だ。初めて羊の肉を食べた一伝統的な食事だ。驚くことにそれが気に入った。みんなで一緒に座り、見知らぬ人同士にも関わらず小さな家族のように感じた。私たちにはつながりがありそれが空気にも見えるようだった。

世が更けるとキャンドルの灯りの中でお茶を楽しんだ。花でできたお茶で、参加者が数日前に摘んだものだった。その日のイベントを終える完璧なものだった。軽く遊び心に満ちた会話で夜を過ごすとなんか自分が自分のキャンプ地に戻って行った。

考えが再びフォーコーナー地区に戻らせた全ての出来事に集中し始めた。なぜホピの土地に行くのかははっきりとわかっていなかったが魂がそこに行くように告げていた。それが起こるまでただ流れに任せて待つしかない。深く考えながら自分のキャンプ地に戻ると、安眠について。

朝が来てホピの土地に行く日だと決めた。朝食を摂っているとスティーブンソンがあいさつにやって来た。その日の計画を聞かれたので出発すると伝えた。すると発つ前にコーヒーを飲まないかと誘われた。これはすべてのキャンプ者に対する誘いではないと後でわかった。スティーブンソンが誘っているのは興味を感じた人だけであり、彼らは頻繁にナ

ハボ族について学ぶ為にスティーブンソンのキャンプ場にやってくるという。スティーブンソンは本当に知りたいと思う人々に対しては喜んで自分の知識を与えていた。荷造りをした後で受付の所に運転していき、スティーブンソンと話しながら私が名づけた“スピリチュアルコーヒー”を飲んだ。

スティーブンソンは静かに外の小さいテーブルに腰掛けていた。私が車を止めると2人で座って話せるようにすぐにコーヒーを持ってきてくれた。いつものようにフレンドリーでジョーク好きな人だ。彼との会話は楽しかった。しかし滞在時間は短く私は旅に戻りたかった。車の中から手を振りながら、南西部を去る前にもう一度彼に会いに来るだろうと感じていた。「さよなら」より「また後で！」と言っていた。

キャニオンからシェリへの道に車を走らせた。自分の考えと自分自身に強さを感じていた。前日のスウェットのおかげで色々とはっきりとしたが自分の未来には多くの疑問があった。長い間背を向けてきた未来について。ハイウェイでホピの土地に向かっている間にも、自分の人生が完全に変わってしまうのがわかった。“もう遅すぎる！私はここにいる。ここまで来たのだから、もう少しだけ遠く走り続けなければ”。運命の1988年に言われた全ての事はほとんど確認されようとしていた。

目的地に着く最後の距離で自分の息が重くなっていくのが感じられた。やらなければならないことはわかっていたが、恐怖を感じ始めていた。最後の目的地が近づくにつれ息が短くなり目に涙が浮かんできた。恐怖が増大した。“これが最後よ…これは私に対しての真実を含んでいる…私の真実。穏やかに。落ち着いてミリアム”自分に言い聞かせた。“ハロルドの時のように感情的にならないで！”

最後の数マイルで大地が変わるのを感じた。家に戻るかのような感じだった。自分が長い間ずっと遠くに離れていて自分にとってこの惑星の正しい場所に戻っているかのように感じた。自分の感情を理解することが難しかった。

駐車場付近にあるMcGehee'sインディアンアートという店の外に車を停車させた。ここは私がホピの指輪を買ったところだ。深呼吸をした。今こそ時がきた。そう思った。；自分の運命に入る時間が来たのだ。

車の中に少し座り中に入る前に自分自身に集中した。息を吸い歩いて中に入った。1年

前に指輪を売った女性を見かけた。私と女性以外には誰もいなかった。そうなるべくしてなったのだ。彼女と話をする機会が持てた。彼女に話し始め、ホピの信仰と文化を理解するのに良い本を推薦してくれるように頼んだ。

ジェニファーに本のセクションに連れて行かれたとき私は彼女に心を開き始めた。直ちに感情を含ませながらホピの土地に導いた出来事について彼女に打ち明けた。ハロルドやスティーブンソンと同じように話しをした：1988年に啓示があり、フォーコーナー地区は“安全な土地”と言われたこと。本を読む前からホピの予言について知っていたこと。青い星の予言についても。そこで自分の青い星のネックレスについて、どのようにしてそれを持ったのか、山々とそれが1988年にどのようにして見せられたかについて話した。人類の創造に関する話とそれが1988年にアブダクションによって語られたこと、それらがホピの創造の物語と同じであることを伝えた。

ジェニファーは私に長老の一人と話をした方がいいと語った。その瞬間私はどこに行けばいいのかははっきりとわかった。だから私は怖かったのだ。彼女が私に尋ねずに直接長老に会わせるのはわかっていた。目に疑問を抱えながら話をしているが彼女は穏やかだった。それは恐ろしい出来事だった。彼女曰く「たぶんあなたは私たちがずっと待っていた人だわ。たぶんあなたは白い兄だわ。」何のことかわからなかったがこう考えた。自分が幾分ホピにとって重要な人物だと知っていた。しかしそれだけでなく彼らも私にとって重要な存在だ。エイリアンは最後の世界からこの世界に連れてこられた人々について話していた。ホピはこれらの人々の一部だ。去年彼らを見かけたときだから彼らを見つけていた。エイリアンはスピリチュアルリーダーとして過去の世界のメンバーから救済された人種を見せてくれた。

カウンターに歩いていくと安堵と同時に長老と話す可能性に憂鬱になった。私はいつも注目されUFOサークルの中でさえ幾分他者から離れて立っている。膨大な詳しい知識を与えられたが、今でも人に十分に話をするのは困難だ。実際私は多くの肉体的なアブダクションから距離を置き遭遇体験を覚えているように指示され、できるだけ少数の中に身を置いていた。エイリアンは私に特別の指示を与えていて、そこに立っているのはその理由なのだ。

ジェニファーとカウンターに立っている間も、内側で多くの事が起こっていた。彼女はメサにある長老の家の行き方を説明してくれた。小さい地図を書き、長老がメディスンマンを止めたこととその理由を誰も知らないことを説明してくれた。そこに行くように指示した理由は、彼が信用できる人物で明らかに沢山のことを知っているからだ。長老がいなかった場合に備えてメサの彼女の家も教えてくれた。後で家に戻るから彼女の家に寄ってどうなったか教えて欲しいと言う。

話をしてくれ指示を与えてくれたことに感謝した。もし長老の家の前に着いたら何も話さなくても大丈夫だと何度も念を押された―彼はおそらくあなたが来たことを予期しているわ。ジェニファーがそう言ったので地図を片手にさよならを告げた。考えながら車に歩いて向かった。どうやってホピに自分の知識を伝えることができるのか。また彼とどれくらい知識を共有できるだろうか。ひとつだけわかったのは私からエイリアンについて持ち出してはならないことだ；彼から会話を始めなければならない。もし彼が正しい人物でなければすぐにわかるだろう。これなら彼がどれくらいエイリアンについて知っているかわかるに違いない。

ハイウェイを運転しメサやホピの男性の所に向かう道で自分の感情が戻ってきた。私の運命―私の人生が一まさに変わろうとしていた。そうわかった。目的地が近づくにつれて、この事実が私の中に膨らんできた。

メサまでの道はわずか数分だった。押し付けがましくならないように気をつけた。遠いところからやって来た見ず知らずの人間だ―何の権利があつてそこに私が行かなければならないというのか？人や地球や風のエネルギーを感じると、幾分なつかしい感じがして、まるでその地区の詳しい知識を知っているかのように感じた。ホピ達は私を見て見知らぬ人と思うだろうが、私は自分の失われた家族の家に踏み入れるのだとわかっていた。

メサにつくと車を止めてホピの女性にメディスンマンの家を尋ねた。彼女は振り返ると、私を見て疑いのまなざしを向けた。ジェニファーが彼に会うことを指示したと告げ、渡された地図をポケットから出すと彼女に見せた。ロバートスミスと私の関係に幾分興味を示したのか、女性は私から情報を引き出そうとしたが無駄だった。ようやく簡単な行き方を教えてくれた。車を止めた場所から数件先の家だったので車を残して歩いて行った。誰に

でもするように、目を閉じて何も話さず通り過ぎた。

玄関にゆっくりと近づくとそっとノックをして「こんにちは！」と呼びかけた。

「こんにちは！どうぞ中へ」中から男性が呼んだ。男性が椅子から立ってこちらに歩いて来るのが見えた。ロバートスミスさんですかと尋ねた。彼は私を見ると幾分驚いたようだった。要件を尋ねたのでジェニファーに言われて来たことを告げた。彼はもうメディスンマンの仕事をやっていないので何もできないかもしれないと言った。私が話をするのには彼がふさわしいとジェニファーが思ったことを伝えた。

ロバートは、最初は私と話すのが気が進まないように見えた。頭を振りながら、私が探しているものを手助けできないだろうと考えそう訴えていた。それでも彼は座るように促しコーヒーを入れようとしたが私は辞退した。小さいテーブルに座ると自分の話を始めた。またエイリアンではなく夢やビジョンの形で伝えた。

ロバートと私の会話は特に激しかった。1988年に起こった経験からいかにして自分の魂のコアな部分が変わっていったか説明した。フォーコーナー地区は“安全な場所”であるという情報について話をした。シップロック岩のイメージとそれがどのようにして現実になったかを説明した。ハロルドとの出会いや、彼やホピの男性の瞳に見えた渦巻きについて。創造の物語と終末の時に星が空に現れ人々に警告や準備を告げることやこれがホピの“青い星の預言”と符号していることも語った。青い星のネックレスについても続けた一どのようにしてそれを買ったのか何を表しているかについて話した。ホピの預言をどのようにして読んだか、それを理解し同時にそれらについて知っていたか。沢山の話を彼にした。圧倒されて感情的になり座って彼と涙を流した。自分をほとんどすべてさらけ出したが彼からエイリアンについて持ち出さなければならないことがわかっていた。もし彼がそれをしなければ、彼は正しい人物ではないのだ。

しばらくして、彼は私につっけんどんに質問した。「エイリアンの話をしているのかい？」

「ええ」返事をした。「でもあなたが話題を持ち出すのを待たなければならなかったんです。」

「わかった。わかった。では話してくれないか。」彼は言った。そこで私は話を始めた。ハイウェイで起きたエイリアンのアブダクションに関する詳細と同様にエイリアンとのか

って起こったコンタクトの全ての詳細について話した。

時間が過ぎると年配のホピの女性がやってきたので、彼は私にしばらく出て行きもう少ししたら戻って来るように告げた。すぐに一人で去ると後で戻ってくると伝えた。車に戻ると食事と飲み物を口にしながらどうやって時間を潰そうかと思っていた。ジェニファーがロバートのいなかった場合について話していたのでジェニファーの家に行けると思った。そこには彼女の子供もいるだろう。仕事からちょうど帰宅する時間で家に到着するとそこには数人の家族と2人の子供達が外で遊んでいるのが見えた。他のメサの人と同じように、子供たちが私に好奇心を抱いた。そこで一緒に待っていていいと言われたので、彼らは外で遊んでいる間私はそこに座っていた。すべての出来事に畏怖した。

一番年上の女の子が私と話したそうにしていた。彼女は賢い子で居心地がよかった。学校に行く話と同じ位簡単にホピの信仰についても話をしたがそれを聞くのは素晴らしかった。彼女が話したことは全てがホピの文化と結びついており、彼女はそれについてどう思うか私に聞いてきた。彼女に質問するのは不躰だと感じたので何も質問しなかった。

女の子は名前をデビーと言いホピとホピの姉妹についての話をした。突然彼らの外国語を身近に感じた。それをホピ語で話していたが驚くことにそれらを理解できたのだ。それはエイリアンが過去に何度も私に話した言葉の一つだとすぐにわかった。

デビーは午後の日差しの中遊び続けた。彼女の言葉がいかに私に影響を与えたかを知らずに。私はある言葉の意味を尋ねた。それは“ありがとう” — 女性がホピ語でありがとうという言葉だった。私は驚愕した。1988年にエイリアンが私と話したとき彼らが使った言葉で頭の中にいつも鮮明に覚えていた。デビーが意味を教えた後、当時この言葉を話したとき声が女性の声だったのを書き出しながら考えた。*神様。どれほど遠くに私を連れていくの？すべてのことに質問するのを止めて完全に信頼するまでにとどれくらい見て聞いて知る必要があるの？*

輝く太陽の下でしばらく座ったらのどが渴いた。デビーと彼女の妹と一緒に店に行きたいか尋ねた。二つ返事だったので一緒にメサの小さいお店に飲み物を買いに行った。中に入りホピの男性と話をする間、後ろを振り返り部屋を見渡すのを促す強い感覚が走った。

あなたはここで何をしているの？頭の中で声が聞こえた。カウンターに立って振り向き、

まっすぐ私を見つめたのはノルディックの金髪のエイリアンだった！一目でわかるような異常な格好をしていた。6.5フィート位の距離に立ち、広い肩幅をしていた。スポーツ選手のように痩せていてTシャツとブルージーンズを穿いていた。青く輝く瞳は部屋を泳いでいるかのようなようだった。髪は本当に白くまっすぐで首の真ん中までたれていた。彼の青白い移植されたような感じの皮膚はよくつくられたほほ骨を覆っていた。

何をしているかってどういう意味なの？頭の中で彼に向かって聞き返した。

再び彼が質問してきた。君はなぜここにいるのかい？答えるまで彼は輝く青い目を私から離さなかった。部屋の中を見渡すとデビーと妹とホピの男性と女性がカウンターの後ろにいた。誰もこの男性に対して注意を向けていない。一目たりとも。彼はこれほど場違いに見えるのに驚くべきことだった。

彼にこう言った。あなたと同じ理由よ。家に戻ってきたのよ！彼の目を凝視した。彼は買い物の支払いをするために向きを変えた。返事がなく私はテレパシーでの会話を終わらせた。

カウンターのノルディック・エイリアンと離れるとしばらくして私たちは店を出た。デビーに金髪の男性を今までに見たことがあるか尋ねた。彼女はスキップをしながら見たことがないと言った。この話題についてはもうこれ以上やめることにした。後ろを振り返り彼が私たちの後ろにいないか確認した。戻って彼と話をしたかったが、彼はもういないと何か言っていた。メサに送られてから自分の人生は変わったことがわかっていた。エイリアンを見たことで再び確信したのだが、エイリアンたちは過去と同様今も私に多くの関心を寄せているようだ。ロバートにはこの遭遇について話さないと決めた一少なくともこの時点では。

太陽が堕ちるとアリゾナ砂漠ではデビーがロバートの家に戻るのに一緒についてきた。玄関口に着くと、ロバートが私に呼びかけ中に入るように言った。私が席に戻るまでの間、彼は大きく笑うと、テーブルの元いた場所に導いた。そこで彼はなぜ私がそこに来たのか尋ねた。私はそこに行くべき時がきたと感じたからと再び話した。2003年のある日、目覚めて再び仕事をする時がきたと悟ったと説明した。その結果私は彼とホピの人々の所に連れてこられた。ホピの土地に導いた長い一連の出来事を説明した：1988年から昨

年ホピの男性の瞳に見えた渦巻きに至るまで。私の目的はエイリアンが伝えたことの全てをロバートとホピの人達に話すことだった。この旅の目的はホピが私の知る情報を知っているかどうか確認することだと伝えた。

会話の間ロバートは頭を揺らし、彼に話していることをどうやって知ったかについて尋ねた。「君はこのことを知るには若すぎる」彼はこう私に言った。「君が今日話していることを知るまでに私は一生かかったよ。」彼は私にどうして気がふれなかったか質問した。わからないと彼に言った。私たちが知っている人で話の一部を知った人のほとんどが；ほとんどの人が手に負えなかった。想像に頭を支配され、エイリアンに全てを没頭し狂気か妄想の世界に入っていく。

私たちはどこにどのようにしてエイリアンが人々の所にやってくるのか、その違いについて話をした。彼は再び私の詳細に驚いた。彼はついに私を遮り次のように言った。

「君はどれくらい長くここに居たか知っているかい？」

「いいえ」笑いながら返事をした

「3時間いて、ひとつも私に質問をしていないよ」

「気づかなかったわ」

「なぜ質問をしないのかい？」彼は尋ねた。

「まだ答えがわかっていないのに、どうしてあなたに質問できるでしょう」

彼は頭をうなだれると、全てのことが奇妙だと答えた。そのコメントはどういう意味か聞いた。

「世界中からここに人がやって来たよ。ロシア、ニュージーランド、オーストラリア、アフリカ、南アメリカ、メキシコ、北アメリカでもこの訪問は違う」

「どう違うの？」自分が違うことをわかっていたが質問した。

「誰も君ほど知らなかったよ。いつも質問ばかりされたよ。」

ほとんどの人は受信した情報を扱うことができなかった。ある人は他人から情報を集め、考えただけなのに自分に知識があると思っていた。しかし知識は事実の寄せ集めではないーそれは理解なのだ。あなたは情報に導かれるかもしれないが、あなた自身の一部として魂に抱えるかはあなた次第だ。あなたがこれをやれば、違いがわかるはずだ。

多くの人々が知識と情報を処理できないという彼の意見に同意した。多くの人々は読んだか人から聞いて理解したと思っているだけだが、エイリアンから直接聞いたかあるいは自分自身で経験したというのはまったく違っている。知識と真実は別々に共鳴しあっておりいくつかは説明できない；他者は自分自身で見つけなければならない―それは話させるべきではない。全てのスピリチュアルな教師は、道に沿って人を助けるが、人が真実を見つけるか否かはその人次第なのだ。

ロバートとの長い会話の後エイリアンが私に外国語で話したことを伝えた。いくつかは1年前に書き出していた。それらを見て意味がわかるものがあるか尋ねた。これは彼と過ごした時にたずねた唯一の質問だった。彼は紙を見ると、私を一目見て再び頭を振った。「これをどこで得たんだい？」と聞いた。どのようにしてエイリアンから得たかを繰り返し、彼らが話した際少しだけ理解できたことを伝えた。彼はショックを受けているように見えた。その紙にはホピの言葉が書かれていた。全ての言葉を理解した訳ではないがいくつかはナバホ語のようだったと言った。話をすればするほど、ロバートは興奮しているようだった。

彼は何度も何度も私がなぜその日に着いたかたずねた。その度に自分の魂が導いたと返事をした。

ロバートは明らかにもっと知りたげだったが、全てを彼に話す時期ではないと感じていた：しかし彼にはかなりの知識を伝えていた。夜が更けるとキャンプ場より彼の家に泊まれば良いと言ってくれたので彼のホスピタリティを受け入れた。これでもっと話せる。しばらく彼の家を出て夕食を食べ戻って会話を続けた。

彼に聞いた訳ではないが私が到着したときホピの人々は儀式の最中だと気づいていて、その最後の日に着いたようだった。儀式が終わった後ホピの一同が集まって祝宴をするという。ロバートは儀式が終わるまで私に留まるようにと言った。彼には考えると返事をしたがそれはできないことがわかっていた―そこに留まる時期ではなかったからだ。ここに来た目的はホピが自分の思っていた通りの人々であり私と同じ知識を持っているか確認することだ。

ロバートがなぜメディスンマンを辞めたかについて話が及んだ。これに関して考えを述べたが、明らかにこの時期に彼を助ける為に私がやってきて彼も私を助けた。お互いにこ

の会話のことは秘密にすることを話した。私はほとんどやり遂げたものの、全てを彼に打ち明けることができなかったことと、彼もそうだったことを認めなければならない。

遅い時間になってロバートが私にエイリアンが降りてくるように呼べるかどうか尋ねた。私は試したことがないと言った。たぶんできるかもしれない。でもわからない。しかし私が現れたので彼らも姿を現すに違いないと思った。

暗くなるまで待ちハイウェイに向かって車を走らせ彼らを一目見ようとした。最初私は奇妙な感覚がしていて彼らを見ることができるだろうと思ったがそれは数分しか続かなかった。突然はつきりと頭の中で声が聞こえた。いいえ。彼らは現れないとわかった。ロバートは神経質になっていた。ロバートに今までエイリアンを見たことがあるか尋ねた。彼は見たことがないと言い緊張していることを認めた。エイリアンが現れなかった説明がついた。彼を怖がらせたくなかったのだ。

インクのような暗い砂漠の夜、しばらく星を見ながら彼の家に戻ってきた。砂漠の空は魅力的だった。まるで風の子守唄のようだ。星は私を魅了し、宇宙のミステリーに我を忘れるまで星を見続けていた。

ロバートの家に遅い時間に帰ってきた。二人とも眠らなければならない。次の朝彼が儀式を行う間に私は出発しなければならないだろう。座って短い会話を交わすと、以前のように私は感情が高ぶり、私にとっていかに意味のあることかを彼に伝えた。彼は過去のことをすべて覚えていて、前の世界から彼らはやってきたのだ！ホピの人々が長い間ずっと知恵を失わずにいたことがいかに嬉しいかを彼に伝えた。

「ホピは終わりの時に特別な役割があるのを知っています。彼らは知恵の保持者です」彼に他のホピの人々も彼と同じように知っているか尋ねた。

ロバート曰く「他にもいるがそう多くはない」そうだ。

「それは良いことだわ。少なくとも知っている人がいるのだから、少なくとも十分だわ」そのときなぜ彼にこの話をしたのかわからなかったがただ出てきたのだ。彼に言った最後の言葉のひとつが「私がここにいる理由は自分が何者か覚えているからよ」だった。

これを告げた時、ロバートが私を見てとても大きな笑顔を見せ忍び笑いをした。「君が誰か知っているよ！」そこで私はエイリアンと遭遇した夜に知った私の最大の秘密を彼に話

した。「1988年のハイウェイでの遭遇の後で思い出が蘇ったの。私が4歳のときエイリアンは私を連れて行ったわ。その間彼らは私に何かをくれたの。私はそれを埋めた。彼らはいつか私がそれは何の為の物なのかかわかるときがくると言ったの。私がそれを戻って探したら。」ロバートに話しているとき彼は私を見て笑っていた。

彼は私に身を寄せてやさしく言った。「行ってそれを見つけるんだ」

私たちはとても大きなハグをした。お互い孤独ではないと知るのは素敵なことだ。眠りにつくとき、次に何が起こるのだろうと思った。エイリアンの要求を満たすことができるのだろうか？時間だけが答えだ。

まだ日が昇っていない時間にロバートが叫んでいた。その間もっと長く眠ろうとした。前日から肉体的にも精神的にも消耗していた。彼の家に日が射さないうちにベッドから出る時間になった。彼はすでに起きて私を待っていた。その日の儀式が終わるまで滞在できるか聞いてきた。沢山のご馳走があるよと彼は言った。ホピの人々と会えるのも素敵だ。彼が話している間も自分がここを去ることがわかっていた。まだその時だと感じないのだ。様子を見ながらたぶん午後に戻ってくるだろうと丁寧に彼に返事をした。

メサに動きがあり、人々は起きて歩き回っていた。

ロバートの家から私と彼が出るのを見かけた人が近くにやって来て見つめていた。ホピ語で話しかける者もいた。彼の家に泊まったので興味を持ったのだと思う。なぜ私がここにいるのか尋ねられた時、「私と話しにきたのだ」と彼は答えた。

ロバートの親戚の家に呼ばれて朝食を食べた。家に入ると食べ物とコーヒーがテーブルにセットされていた。子供達は全員私を見つめていた：大人は礼儀正しいが彼らが私は誰で何をしていたのか知りたがっているようだ。家族が私にいくつかの質問をした。どこから来たのかー単純な質問で些細な会話をしようとした。しばらくして彼らはホピ語で話を始めた。その日にある祝宴のことだった。彼らは私が祝宴に来るか尋ね、私が居れば素晴らしいとロバートは言い続けた。私は彼らに感謝し午前中に決めると告げた。

朝食が終わり参加できたことにお礼を述べた。ロバートと私はテーブルから立ち上がり、彼の家に戻った。

彼はキバでの儀式のためにすぐ家を出る必要があったので時間があまりなかった。ハグ

をして別れの挨拶をした。目の前に立っているホビの男性がこれほど同類だと思えるのは不思議だった。まるで彼らが私の家族のように感じた一去りたくなかったが行かなければならない。時間がくれば再び戻ってくることもわかっている。ロバートと車まで一緒に歩いた。運転するとき手を振りながらバックミラーに映る彼の小さくなる姿を見ていた。メサから出る道が悲しかった。走り去る時少しだけ泣いたことを認めよう。

いつものようにその日も暑く日差しが強かった。その日はアリゾナのページにあるスロットキャニオンを見に行くつもりだった。純粋に楽しみのためだ。ここ数日間感情的に疲労していたので、自分のスピリチュアルな部分やエイリアンについて考えなくて済むように観光客の大きな流れに従いたくなった。しかし考えが完全に自由になった訳ではなかった。単に車の中で音楽を聴けて穏やかに思うまま過ごせただけだった。ハイウェイの途上で何かが車輪の後ろにいる気配がして活気付き、信じられないほど解放的になった。

午後の早いうちにページに着くと、スロットキャニオンのツアーを予約しに真っ先に向かった。タイミングは完璧であと15分待てばツアーが始まるという。スロットキャニオンは本当に広大だが、ほとんどの観光地はすごく混んでいた。渦を巻くレッドロックは水と砂の侵食により姿を変えていた。それは砂のさざ波のように見えレッドロック以外の部分は風に吹かれていた。太陽の位置が変わると毎分ごとに色を変えた。太陽光はスロットの中を動き、キャニオンの壁に繊細な色の渦をつくっている。赤、ピンク、藤色、あるいは紫と繊細になっている。人生を一瞬忘れさせ、静かな空間に連れていってくれた。

午後4時頃モニュメントバリーに向けてハイウェイを走り抜けた。キャリーと旅したときキャンプした場所はとても綺麗な景観だったのを覚えていた。ゴールデンディングキャンプ場に着くと閉まる前にシャワーをすばやく浴びることができた。テントを設営し少し食べ物をかじった。その夜は過去数日間の出来事と先のことについて考えていた。ハロルドとホビに会いこの旅の目的は達成された。次はどこに行こうかと考えた。あと一週間残っており計画もなかった。

日が落ちると夜の気配が忍び寄った。ピクニックテーブルにろうそくを灯しその日あった出来事を日記に書き付けた。夜空に星が輝くのが見えたのでテーブルに横になりしばらく見ることにした。時間が経つ程に景色は壮観になったが、疲れていたので少しの間だけ

楽しもうと思った。

ロバートと出会った後に過ごす最初の夜だ。彼やエイリアンや自分の人生を回顧しながら輝く星を見つめていた。すると遠くに何かを見た。それはとてもとてもとてもかすかな星で空を動いていた。あれは何？もしかしたら？まさか！たぶん衛星だわーそうだわ！すると、かすかな光が空を横切って移動しながら35度位の方向に向きを変えると、再びまっすぐ消えるまで移動した。衛星ではありえない。そう思った。もしかして？

その日はとても疲れていたのだからただ眠りたかった。頭上の夜空を眺めながら、エイリアンにお願いをした。もしそこにいるのなら、眠る前に見せてくれますか？大きな白い光が向こう側で光った。全部私の想像よ。自分に言い聞かせた。衛星か彗星ーそれだけよ。

朝になると疑問が浮かんだ：今日はどこに行こうか？一番いいのは自分の魂に従うことだ。簡単に朝食を済ませると情報収集のためにシャワーの近くにあるショップに行くことにした。お店に入ると可愛らしい男性が買い物を手伝ってくれた。いつものように観光化されていないところでお勧めの場所を尋ねた。彼は喜んで助けてくれ地図を引っ張り出し方角を教えてくれた。私は店を出ると嬉しくなり彼の提案に乗ることにした。

その道は雄大だった。モニュメントバレーに行けば、TVで常にやっているように、その美しさはテレビの様々なショーやコマーシャルの背景になぜ完璧に映えるのかわかると誰かが言っていた。彼らは正しいと思う。そこは美しい場所で、道路や道に沿って廻れば、巨大な岩のフォーメーションが平らな砂漠から飛び出てきて、本当に私たちに話しかけてくるようだ。車を止め景色を見るために外に出た。その場に立ちキャリーと去年来たときのことを振り返った。「キャリーがあなた達に心からあいさつをしてるわよ！」周りの土地に声を出して言った。

メインのハイウェイで車を止め、太陽が昇るときに変化する岩を眺めた。大きなメサが左の遠くに見えた。私が向かおうとしている場所だーあまり踏み固まっていない道路だ。これは私が探していたものだ。ナチュラル・ブリッジズ国立公園に向かう道で考えた。

わりとすぐロードマーケットに着きメサの方に向かった。私はあまり有名ではない、グーズネックと呼ばれるところを探していた。ゴールドディングスキャンプ場の男性が、そこは本当に素晴らしく行くべきだよと言っていた。道を曲がりながらゆっくりと注意深く運

転した。車はレンタルで土の道だった。20分運転した後砂利のパーキングを見つけた。そこには2人しかいなかったーわお！車から歩くと、グーズネックが見えたーコロラド川の蛇行が見える。川の上にボートが走っている。私の立っている場所からかなり遠くにあったので、おもちゃのように小さいボートに見えた。川は深く平らな地にカーブしており、U字型になっている。とても壮大な眺めだった。

次の停車地はメサの頂上にある砂利道の最後だ。頂上からスイッチバックしており、ここから砂漠の底の広がりを見ることができる。一台の車も見かけず頂上に向かって運転するのは楽しかった。ある場所で写真を撮るために停車した。するとトラックが見えたがタイヤが半分道路端を越えている！あと2インチしかないので落ちかけたに違いない。この道を選んでよかったと思った。

ブリッジナショナル国立公園に行く途中、もうひとつの場所で停車した。そこに一人の男性を見かけ驚いた。車から出るとき緊張した。どこからともなくひとりでやって来たからだ。その感情を脇に押しやり2人で一緒に端を歩いた。そこに誰もいなかったのも2人ともショックを受けた。メサの端を見ると、最も美しい光景を見つけた。人生で初めてのことだ。その地区の全体の光景が目の前に広がった。モニュメントバレーを背景にしてそれぞれ写真を撮影した。著しい静けさがあたりに漂っていた。まるで風が2人のために景色を眺められるように立ち止まっていたかのようなようだった。

時間が過ぎていたのでブリッジを見るためには道路を飛ばさなければならなかった。私はあちこちを飛び回っていて時間を調べていなかった；ユタ州のブリッジナショナル国立公園に入ってから気がついた。実を言うといくつかの景色を見て多少がっかりしていた。あまり興味をもっていなかったのも目印を見過ごしていた。頂上に行くにはもっと時間がかかりそうだ。いつものように地元の人にアドバイスをお願いした！

突然自分がとても疲れていることに気づき休みが必要だと思った。車を止めて1時間休むことに決めた。目が覚めるとすぐにキャニオン・デ・シェリに戻ることに決めた。優しく私を呼んでいた。

峡谷をしゃかりきに飛ばした。疲れが私に押し掛かりキャニオン・デ・シェリに着いたらすぐにテントを張って休んだ。残りの日々はあまり予定を入れず休むことにした。ステ

イーブンソンと時間を過ごし回想する時間をとった。

夜になり星が出てきた。すべて輝いていた。見上げると子供の点つなぎのようだったと思った一点と点を線でつなぐ遊びで順番はとても論理的なものだ。点の一つがないC文字の隊列が空にあった。欠けている点は第二の点で図の底だ。それぞれの点はとても明るかった。あなたですか？そう思った。そんなわけではないわ。本当にただの星よ。

すると空中にほんの小さな点が動いているのが目に入った。前の夜のようにだった。小さな点はとても遠くにあり、瞬きすると見失うのだった。再び探して見ていると点のない先に大きなCの隊列があった。十分だ。それは曲がっていて右に進んでいた。それは完全なCの隊形で止まった。他の点と同じ位に明るくなった！まるで夜空の街灯のようだ。動きが止まるとより明るくなり消えるとまた動き始める。まっすぐ40度曲がりまっすぐ動き始める。やがて柄杓星の付近を通過した。そして元に戻り星の上に位置どり、極端に明るく光りCの隊列を形成した。また消えてすばやく視界から消えた。

神様。誰かこれを見たことがあるでしょうか？自問自答した。

普通は誰も見ないわよ。頭の中で声が聞こえた。頭をかしげた。自分が見た物と頭の中で聞こえた声にすごく興奮した。シンリで電話を見つけて友人に電話をかけようと思った。車に飛び乗り一番近い電話ボックスに駆け込んだ。友人のダンに電話してここ数日に起こった砂漠の夜の出来事を話した。しばらく話をすると遅い時間であることに気づき眠ろうと思った。

再び自問自答していた。私は誰？すべてのことには理由があると思った。どうしてエイリアンはそんなに近い縁を私にもっているのだろうか？その夜に見たことを知っていたし、前の夜に見たのもエイリアンだった—もう質問ができなかった。ホピの長老と会い、ホピ族が聖なるものを保持しそれらを公表しないことを話した後、私は幾分特別な人間だということもう疑いがなくなった。長老は私だけに話したのだ。なぜなら私は彼やホピ族に導かれたからだ。彼はそれを知っていたし私もまた知っていた。まるであの夜に現れたものはそれが本当のことだと確認させるための物だった。以前おこった全てのことに対する確証だった。

頭の中に全てが埋まっていたので眠るのに時間がかかった。ようやく眠りについた。テ

ントの頂点にはカバーがなかったので、夜中に目が覚めた時、月光が見えた。犬のような鳴き声がしてテントの周りを嗅ぎまわっていた。緊張し目を開けたくなかった。シツという音を立てて脅すと眠りについた。ただちに一めったにないことだった。2回目の眠りにつく前に同じ音を聞きその夜はもう一度目が覚めた。

このキャンプ場ではいつもことだが朝7時にフルートの音がして目が覚めた。スティーブンソンはいつも朝になるとナバホ族の音楽を弾いている。一晩中犬に邪魔されて疲れていたにも関わらず、新しい朝を美しい方法で起こしてくれた。テントから出ると暑さに圧倒された。

その朝テントをしまうと、珍しいものを見つけた。テントの後ろに柔らかくて赤い、砂のような土が2つのまっすぐな線をつくっていた。テントから始まって2.5フィート位の長さで正確に平行に走っていてちょうど同じ長さだった。前日の朝テントを設営したとき何度もテントの周りを歩き回ったが線はついていなかった。実際私の足跡が線の下にあったのだ！犬だと思ったがどうやって完璧に砂で線を引いたのかわからない。テントの中を見て頭があった場所と外側を見比べた。あきらめた：眠り袋は動いていなかったのもので、その線が頭の側についていたのを確認した。

犬だともう一度思った。夜2回もテントの外で私の頭のところでうなっていたからだ。犬たちは私の耳の右側にいたように感じた。ではなぜ犬の足跡が線の付近にないのか？すべてをひとつにまとめると何かがおかしいと思った。単に犬だったのか？エイリアンだったのか？誰がわかるだろう？事実はずじつまが合っていない。疑問に思う価値がありそうなのは確かだ。

落ち着かなかったので離れたいと思った。スティーブンソンがいつものように朝のあいさつにやってきた。彼に荷造りして移動したいと伝えた。どこに行くのかわからなかった。しかし去らなければならないとわかっていた。スティーブンソンがドゥーランゴに戻るのならハイウェイ13を走って山を越えて行くと良いと教えてくれた。そこは美しい道でシップロックの驚くべき眺めが頂上で見えるよと言う。やっとわかった。見る価値がありそうだ。シップロック岩を見る別の機会が持ててわくわくした。

一度去ると決めたら時間を無駄にしたくないと思った。スティーブンソンを含むすべて

の人にさよならを言い出発した。スティーブンソンは正しかった。山々を運転するのは幻想的だった。道に沿って全てのメサが列をなしており、青い空の背景に対して兵士のように立っている。それらは雄大な眺めだった！ドライブ始めに今まで見たことのないような最も赤い岩をいくつか見たがそれらはセドナのレッドロックよりも赤かった。山を登り始めると景色は変わり草原と木々が見えた。止まって歩き回りたいかったがどの地点でも心地よく感じなかった。車や人が動けなくなる場所が沢山あったからだ。山の頂上に極端に眺めの良い見下ろす地点があった。あたり一面が光輝く紫の霧で覆われていた。すべてが初めて見る眺めだった。景観を楽しんだ後で、アザミの上を飛ぶ蝶やマルハナ蜂を眺めながら運転を続けた。

峡谷の底にたどり着くと、ガソリンスタンドと事務所に行った。席が外にあり普通のお店のよう場所だったのでそこでアイスクリームを買って腰を掛けて次の移動について考えた。ナバホ族が出たり入ったりしていた。微笑みながら質問する者やそこにいるべきではないという目を向ける者もいた。ここは観光客の立ち寄る場所ではなく、30分そこに居たが他の観光客を見かけなかった。

静かに座りその時間を楽しんでいた。するとナバホ族の男性が近づいてきた。中年で人のよさそうな人物だった。いつものように地元の人達と良い会話を楽しんだ。しばらく座って話をすると、午後からどこに行つて何をしようかと話をした。彼はハイキングをしないかと誘ってきた。息を呑むほど素晴らしいレッドロックを見せてくれるという。彼なら信用できると思ったので確かめる前だったが後についてさっき来た山に戻って行った。

山の反対側に着くと、彼は道の横に小さい白のトラックを止め、私はその後ろに車を止めた。車から出て彼について行くと、小さいフェンスまで歩いて行った。見知らぬ人の裏庭について行くのは危険なことだが感情がそう言っていなかった。ここにある岩の幾つかはこれまで見た中で最も力強いもので、そこを歩くのは楽しかった。

平和的に歩きながら男性の話を楽しんだ。羊飼いをしていた若い頃の話聞いた。彼がほとんど話し私は聞いていた。伝統的なナバホ族の人生と進歩的な世界で生きることの間で葛藤があることを話していた。そのため彼の話には沢山の痛みがあった。彼の葛藤と共に彼らの葛藤もはっきり聞いた。少し入り込んだ会話ができて、その一部になれて、特権

的に感じた。この見知らぬ男性が私の意見を求めていることに心が打たれた。彼は自分の答えを探しているのだという。

少し歩いた後で、座って休みながら話をした。ナバホの男性とつながれてとても美しい瞬間だった。時間はすぐ過ぎ去る時刻となった。彼は羊を探さなければならず、私は山を通って他の未知の目的地に向かわなければならない。

山を越える最初の旅で、誰かからギフトを受け取るだろうと感じていた。しかし誰かと出会うと思わなかったのも、このことについては少ししか考えなかった。出発する前に彼はピニオン松のところに歩いて行き、枝の一部を取った。これは彼の部族では聖なるもので、どのようにして松を乾燥させて家や自己の浄化のために燃やすのか教えてくれた。よく彼らの儀式に使われるそう。彼が私にくれたのはとても特別なギフトだった。私は松を知っていて欲しいと思ったが、自分のために取ることもそれを望むこともしなかった。そのようなことはスピリチュアルな意味で正しくないからだ。もし私と与えられるとしたら、それは与えられる物だからだ。そのような方法で名誉を与えられたことに感謝をした。

この旅の多くの瞬間と共に2人が考えを共有したことは自分のスピリットがここに導いたと感じた。男性にハグをしてすべてのことに感謝をした。お互いに意味があって出会ったのだと思った。たぶん彼に2度と会わないだろう。彼はすぐにトラックに乗ると立ち去った。

山に戻って最後の旅を続ける前に、車の中にしばらく座っていた。空の光の記憶が頭の中に再び浮かび上がった。このフォーコーナー地区にいる間、秒毎に自分の運命に近づいていると知っていた。人生の全ての面を取り払って脇へやることがもはやできなくなっていた；自分が経験したことを否定することができなくなったのだ。彼らがはるか昔に私に頼んだ仕事をする時が始まった。自分の話を人々に知らせ聞きたいと思う人々にエイリアンについての知識を共有する時期が始まった。

周辺にキャンプ場がないと気づいたとき暗くなり始めていた。コロラドのコルテッツに居続けようと思った。朝からすでに疲れていたが、時間がたつにつれて疲れが増し眠くなっていた。しかし頭の中ではここ数日のことを考え続けていた：ロバートに会ったこと、続けて2晩空に現れた光、テントの外に現れた線のこと。これらの出来事が頭の中に回転

し、16年前のUFOの出来事と混ざっていた。また1988年の遭遇後に思い出した抑圧されていた記憶についても考えた。この旅の沢山の記憶がジグソーパズルのように組み合わせたり否定できない図をつくっていた。抱え続けてきた小さな質問や疑問が一掃された。

暗くなってからコルテッツに着き部屋を取ることに決めた。安全に運転し続けることがもはやできなかった。町の中のメインハイウェイを脱兎のごとく走りぬけ、モーテルに止まって値段と空き部屋を調べた。3回目の挑戦で予算内の部屋を見つけた。

考えてばかりいた日だったので、過去から頭を空にしようと思い頭を使わないテレビを見るのを楽しみにしていた。車の中から荷物を出すと部屋に持ち込んだ。そのとき男性が赤い車を駐車場に停車させているのに気づいた。彼も荷物を降ろして部屋に入ろうとしている。夕飯のためにモーテルを出ると男性が外で何かをやっているのに気づいた。

夕飯後にモーテルに歩いて戻る道のは短かったが楽しかった。車のせわしさから気楽な場所に考えを連れて行ってくれた。モーテルに戻ったとき、車がいっぱい満室のサインが出ていた。再び男性が車のところでドアを広く開けて何かをしているのが目に入った。歩きすぎる時に彼は私を見たがお互いに話しかけなかった。

いくつかの電話をかけると枕に頭を置こうとした。いつものように一人で旅行すると、眠る前に安全のための予防措置を施した。部屋は小さかったが前と後ろに窓があったので、安全か確かめに行った。メインの窓に鍵がかかっているのに気づいた。簡単に開けられてしまうのでオフィスに電話をかけたが返事がなかった。オフィスに誰がいるかを見に歩いて行ったが誰もいない。誰かが簡単に窓から入ってくると思うと眠れないだろう。

部屋に戻ると再び男性が車のタンクで何かをしていた。自分の車に向かうと窓をブロックできる物を探した。もし問題を解決できなければ一晩中眠れないだろう。失うものは何もないので男性に近づき手伝ってほしいと尋ねてみた。彼が口をあけて話そうとした瞬間に私にはとてもはっきりとした映像が見えた：この男性は軍で働いていて私が目的でたぶんそこにいる。彼は自分をゴードンと名乗ると、喜んで手伝ってくれるという。窓をブロックするためにテントの支柱を使えばと提案された。十分にそれは完璧に機能した。お互いにお休みなさいとあいさつすると、別々の道を歩いて行った。

とても疲れていたが、眠る前にジャニスに電話をしようと思った。ベッドに戻る前に、

空に現れた光について話したいと思った。ゴードンについて彼から受けた軍の気配についても話そうと思った。部屋に入ってわずか5分後にドアがノックされた。答えるために受話器を置いた。思ったとおりゴードンだった。一緒に飲みに行かないかという。自分の直感が正しいとわかったので、彼が何者で何をしようとしているのか探ることにした。彼の部屋まで行くのでそこから出かけようと言った。電話で姉に私が知る限りの情報を話した。彼は赤い車を運転していて、ナンバープレート、部屋番号、教わった名前も全部話した。「政府で働いていると思うならどうしてその男と一緒に出かけるのよ？それがいい考えだと本当に思ってるの？」

「どうしてその人がここにいるのか知りたいなら会話をするのが一番よ。もし目的が私なら絶対に私が傷つくようなことは言わないはず。彼からたぶん何かを聞きだせるわ。もしかしたらね。」ジャニスに大丈夫だから心配しないように告げると電話を切った。

体は疲れていて眠りたかったがこの男が何者でなぜそこにいるのかを調べなければならぬとわかっていた。昨晚友人が大きく表示されたことを比較し自分の直感に従って男について調べるのは価値があることだと思いそうしようと決めた。自分の直感に尋ねたが、もしかしたら疑心暗鬼になっているだけなのかもしれない。しかしやはり強い感覚が襲う！ゴードンを見ているだけでは彼が軍にいるなどと決して思えないー彼は年をとっていて汚い長い赤毛をしていた。

ゴードンの部屋に行くとドアが開いているのが見えた。彼はテレビを見ながら私を見るなり飛び上がった。近くにパブがありよければ一緒に行こうという。同意すると彼の車に乗るために一緒に歩いて行った。そこに行くには運転しなければならない。ゴードンがたずねた。「行く前に私のIDを見ますか？」

「大丈夫です。見なくてもいいです。」彼に伝えた。

彼の返事はとても興味深かった。「本当に？大丈夫ですか？そうしたいとわかりますよ：見た方が安心するでしょう。」

この奇妙な男性に笑いながら思った。バーカ。私から何を得知したいのよ！彼の受け答えから疑いが正しかったとすぐに確信した。知らない人と出かける際には自分にルールを設けていてははっきりとした段階をふまなければならない。私のルールは彼らのIDを見て、

友人や家族に電話をし、彼らの情報を伝える。本人の同意も得るようにしている。もし私に何かあったら、警察がすぐに最低限の調査を始めることができる。悪い目的をもった人々はいつもこのリクエストをした後にはっきりとする－あるいは少なくとも彼らはおとなしくしている。

パブに着くと大きな心地よいブースに席を見つけた。一緒に居る間は、飲み物をいかなる瞬間も目を離さずガードしていないといけない。これは自分を保護することも含んでいた。才能のあるESP能力者だったら私の内側を許可なく透視できるからだ。二人の会話は気楽なものだった。しかし彼は私に非常に興味を持ったようで、どこからきてどこに向かっているのかを訪ねてきた。質問は普通のものだったが、私が詳細を与えないようにするとかなりしつこく尋問してきた。

ゴードンとの会話は、始めは気さくなものだった。お互いの旅やどこに行ってきたのか。私の旅でゴードンが興味を持ったのは幾分はっきりしていた。彼は詳細を知りたがり、異なる方向に会話の主題を何度も何度も近づけてきた。仕事の話をしていてもすぐに旅の話に戻る。私の車のこと、それがレンタカーであること。レンタカーにはGPS装置があり、州を出たら会社はわかること。それについて詳しく話した。そして自分は詳しくないが、友人が知っていて彼に話したと付け加えた。

私が感じた彼の波動とGPSトラッキング装置について話したので、何の仕事をしているのか尋ねた。たいていの人は自分の仕事は何をしているのかすぐに答えるものだが、彼は自分の仕事について何も言わなかった。私が自分の仕事を告げた後でさえもだ。これは通常の会話ではなく何かを隠しているのだと私には感じられた。仕事について尋ねると、それについては話したくないと言う。それは重要ではないと言うのだ。何度も尋ねた後で彼に職業について何も答えないのはおかしいと伝えた。何か隠しているのがはっきりしている。

長いため息をついた後こう言った。「最初に言いますが、私は市民です」ええ。市民も誰も最初っから市民だとは言わないわ！彼は私に続けて言った。「私は米軍と働く契約を交わしています」何度かつついた後でようやく軍で何をしているのか少しばかり聞くことができた。彼の仕事はスペーステクノロジーに関するものだった。

私はショックを受けなかった；反対にこの男が実際に正直に話したことに少しだけ驚いた。この男と一緒にここにいるのは偶然だろうか？私はつけられていたのか？それとも私の考えすぎだろうか？唯一わかったのはゴードンの第一印象だ：彼が軍で働いていること、私を調べに遣わされたこと。彼は最初の部分を確認させた。次の直感である目的は謎だ。

この男と座っているとき、人から見たら一体全体なぜ私がこの男と一緒に話しているのかと首をかしげるだろうとわかっていた。理由は私の中では明らかだった。もし彼が私と話をするために送られてきたのに私が話をしなかったら、別な人間が送られる。たぶん次は彼らを簡単に見分けるだろう。彼からはもう情報を引き出せないとわかったのでモーターに戻って寝ようと思った。

モーターに戻ると、彼はしつこく私の旅についてもっと聞きたいと伝えてきた。それがとても魅力的だと言うのだ。ゴードンに疲れたので眠ると告げた。

ちゃんと眠れ、次の日目が覚めると、外で車にいる人々が荷造りをしている声が聞こえてきた。窓を見ると車の窓にメモが張ってあったので見に行った。ドアを開けるとゴードンがトランクに居るのが見えたー再びだ。車に行ってメモを取って読んだ。ゴードンが歩いてきた。メモは彼からだった。出発前にコーヒーを飲もうと言う。すぐに彼は私に旅のことをもっと教えてくれと頼み始めた。丁寧に断り電子メールで連絡をし合おうと伝えた。人はなぜ私がそんなことをしたのかとまた不思議に思うだろうとわかっていた。理由は簡単だ：友人と近くに、敵はもっと近くにだ。

モーターの駐車場を出ると次に何が起こるのだろうと思った。あと4日残っており、毎日出来事が起こっていてそれぞれが私に深く触れてくる。この旅は人生でもっともスピリチュアルな経験でありずっと残り続け終わらないように思えた。どこに向かおうとしているのかまったくわからない。車はドゥーランゴに向かっており運転を続けた。

しばらくしてドゥーランゴのインターネットカフェに車を止めた。中に入ると友人にメールを送り新しい観光地を探した。そこにいる間2人の男性が地図を持ってフランス語で話しているのが見えた。出る前に彼らに観光ツアーを計画しているのかと尋ねた。彼らはケベックからやってきて、メキシコに向かって数ヶ月間旅をしているという。

キャニオン・デ・シェリの旅について話し、近くにいるのだからメサ・ヴェルデに行く

べきだと話した。その山の頂上にあるキャンプ場についても話をした。カナダ人の仲間と会うのは素晴らしかったが、道路に出て再び走るべき時間だった。

コルテッツからドゥーランゴに行く間いくつものキャンプ場の看板を見た。その方向に戻って今晚泊まるのに適した場所を探そうと決めた。いくつかの看板を見過ぎすと方向転換しドゥーランゴに戻り始めた。それはおかしかった。ハイウェイを数回行ったり来たりして決めることができない。大きな声で叫んだ。「オッケー。もしどこかに行って欲しいなら示して」自分の魂にどこに行く必要があるのかガイドして欲しかった。

目と同様に感覚もオープンにすると自分の道がすぐにはっきりしてきた。すでに通り過ぎたある特定のキャンプ場について3回止まろうと思った。今度はそこに止めようと思った。そこには綺麗なシャワーやバスルームやプールがあった！しかし最高なのは美しい小川の近くにキャンプができることだった。

テントを設営していると自分の場所を嬉しく思った。その夜はリラックスできるだろうと思った。日記を書いて幾分眠ることができそうだった。その日はリラックスできて、完全に暇だったー望んでいた通りだ。

ベッドの支度をした後トイレに向かった。歯を磨いていると女性と子供がやってきた。彼らは私の隣のキャンプ地にいて私のテントから数フィートしか離れていなかった。いつもの私ならおしゃべりだがその日は会話をする気がしなかった。

母親から得た波動を好きになった。彼女は幾分違って立ち止まり注意を惹いた。少女を見つめるとすぐにかすかな光を彼女の中に見てそれを理解した。彼女はエイリアンによって将来助けられる子供の一人だったーもしそのときがきたら。彼女は選ばれる中の一人だ！

この小さな少女には母親にしたシンプルなあいさつよりもずっと価値があった。いつものようにこの知らない人々に気楽に話しかけた。彼女はキャサリン・アンダーソンと名乗り、娘はサバンナという名だ。私たちはすばらしいつながりがありすぐに会話を少女に対して向けた。子供を観察すると彼女はとても知的で美しく直感に長けていた。この女性が自分の娘に対していかに特別な存在であることを気づいているのか知りたいと思った。

トイレで自分達の仕事を終えるまで会話が続きみんなで一緒に戻った。彼女の夫は外の

暗闇で待っていた。彼はジェーソンと名乗った。再び強い振動がやってきて、彼らに会うようになっていたとわかった。彼らは何らかの理由で特別な家族だった―その理由は説明ができないのだが。彼らに話しかけ、なぜフォーコーナーにいるのかを知ろうとした。すぐに彼らが土地を買おうと考えていることがわかった。

私は彼らにいくつかのホピとナバホの土地の旅について詳細に話した。またいかにこのフォーコーナー地区が特別な場所だと思っているかについても話した。私たち3人の会話は素晴らしいものだった。サバンナは落ち着きがなくなり、みんなでキャンプ場に戻るとベッドに行く必要があった。

キャサリンはサバンナに付き添って行った。ジェーソンと私は暗闇で話をした。いつものように星を探したが、雲が外に出ていてその夜は何も見えなかった。

私たちの会話はとても集中したものになった。彼はその地区で資産を買おうと探したが、気持ちがくじけているという。その地区で土地を買うことが正しいことなのか、彼らはサインをちょうどその日に求めたという。彼がそう話したとき、私が彼らに正しいことをしていて、正しい場所にいて、探し続けるべきだと知らせなければならなかったと思った。

ジェーソンにいかにフォーコーナー地区にやって来たか話をした。いつものようにビジョンと夢を使って説明した。フォーコーナー特は“終わりの時期”に“安全な土地”であると告げられ、シップロック岩が示され、そしてホピ族の人々に導かれていったことを話した。短い間にできるだけ多くの情報を彼に話した。彼らと出会えたことがとても幸せで、強くこの土地を探し続けることを伝えた。ジョンソンに彼らはそこに居るべきで決してあきらめてはいけないと告げた。

時間はいつも早く過ぎる。二人共眠る必要があった。ジェーソンに大きなハグをして、彼と家族に出会えたことがすごく嬉しいと伝えた。すると彼は朝私が去る前にコーヒーを飲みにおいでと誘ってくれた。ジェーソンが歩き過ぎる時もう一度空を見上げたが星は出ていなかった。今は静かにしているときだ。そう思いテントに入り込んだ。

キャンプ場にいると早く朝が来るものだ。テントから出ると荷造りを始めた。アンダーソン家が起きて隣で朝食を食べているのが見えた。頭を下げて荷造りを続けた。自分の仕事が終わったら彼らに会いに行こう。しかしわずか数分後にキャソリンがダッシュでやっ

てきた。再会でできて嬉しそうで、彼らとコーヒーを飲まないと出発してはいけないという。前日の夜の会話で夫に深い影響を与えたようだ。私は彼らに会おうと思っていたのだが、おそらく彼らは私が荷造りしているのを見て出かけるのだと思ったのだろう。そうするつもりはなかったのだが。彼女のリクエストに賛成しまだ出発しないから訪問する時間があると告げた。

車を止めて出発の準備ができると、アンダーソン家のところまで数歩足を伸ばした。大きな興奮と共に歓迎されると、尊敬の微笑みと共にジェーソンの母親のパトリシアに紹介された。すぐに彼女が好きになった。わずか数分後には私の感覚が再び確信した―彼らは例外の人々だ。私は彼らのキャンプ場に誘ってもらって嬉しかった。

小川の横に4人で座り、深い話をした。サバンナは走りまわって遊んでいた。彼女は打つような青い瞳をして言葉なしで話をした。ときどきやってきて質問をした。たぶん彼女は両親と同じように私に好奇心を持ったのだろう。そのときは私が彼らに好奇心を持っているということを伝えることができなかった。

キャソリンは再びジェーソンと二人で交わした会話によっていかに夫が影響を受けたかについて話をした。彼女とパトリシアにもその話をしてくれないだろうかと尋ねられた。彼らが土地を買うのはとても重要なことなので、喜んでそうすることにした。キャソリンとパトリシアに話すとき、彼らもまた私に向かって心を開き始めた。

彼らがなぜ土地を買うことを決め、自給自足をしようと導かれたのかがわかった。彼らがそれをするのを私は嬉しいと思うと伝えた。アンダーソン夫婦のそれぞれのイメージと考えを受け取り始めた；私は自分のビジョンを伝えると、2人に深く触れたようだった。涙が流れていた。私たちみんなにとって忘れられない経験だった。

理由をすべてわかっている訳ではなかったが、私たちは理由があって出会うことになっていたことがはっきりとわかった。私が到着する前に彼らはドゥーランゴ地区に土地を探すのは正しいことなのか、確認を求めている。私の到着によってもっとも確かなのは彼らにとって確認となったことだ。

彼らが理解できる方法で自分の経験をアンダーソン家に話をしようと試み、彼らはそれを受け入れてくれた。メッセージは非常に明確だった。彼らと一日中でも座っていられた

が、再び道路に戻らなければならないことがわかっていた。もし私が留まれば自分の存在が軽視される。それが起こってほしくなかった。お互いに電子メールのアドレスを交換し、連絡が取れるようにした。みんなでハグをすると、さよならのあいさつをした。彼らはもう一度留まって欲しいと頼んできた。しかし去る時間だとわかっていた。

キャンプ場から歩いて去ると、彼らからいかに影響を受けたかを知ることができた。レンタカーに飛び乗るとゆっくりと出発した。自分の過去と現在と未来について考えていた。それらは回転してやってきたみたいだった。宇宙のパズルでの私の役割はそれぞれの過ぎ行く瞬間により鮮明になった。若い家族の元を去るのを寂しく思った。もっと彼らと過ごしたかったが今はその時期ではないのだ。また会おうだろう。そう思った。ハイウェイでそれに集中した。

ハイウェイに戻ると、自分自身に二度と終わらない質問をした：左か右か？ 右だと思った。あと2晩残っているだけなので気楽に過ごそうと決めメサ・ベルデにキャンプすることにした。昨年キャリーと過ごしハロルドと出会った場所だ。旅の終わりにふさわしいだろう。あっという間に山を駆け上がるとその夜のテントを設定した。

その日はリラックスしながら古代遺跡を観光して過ごした。夕飯時になると雨が降り出した。すぐに止むだろうとわかっていたのでプロパン鍋で簡単な夕飯を暖めている間、木の下で濡れないように過ごしていた。今夜も星は出ない。そう思った。雲がほとんど触れるほどに近い；地上のすぐ近くで渦巻いていた。

あと数分で夕飯ができるところで、西側を見ると雲の間から割れ目が出ていた。雲の一部は夜のように黒かったが、白いものもあった。奇妙な混ざり方だった。テントの中で夕飯を食べると、軽く睡眠をとった。

起きると雨が止んでいて、皿を洗いに行った。その間質問した。再び見るだろうか？

頭の中で声がして返事をした。後で会いましょう。

今度は何をするのだろうか？ そう思った。興奮と同時に疑いもあった。

テントに戻ると、しばらく横になっていた。眠っていると、突然まっすぐ上に閉められたので、半狂乱になり、テントを空けて外に出ようとした。頭が混乱した。私、何をしているの？そこでわかった。時間がきた。

トイレにゆっくりと歩いて行くと、戻る途中に考えた。いつ会えるの？

あなたが席に着いたらすぐに始めるわよ。意味はわからなかった。雲はまだ厚く、キャンプ場の真上に浮かんでいた。キャンプ場に戻るとテントまで3段上った所のでっぺんに腰を降ろした。その瞬間大きな白い光がまっすぐに頭に直接降りてきた。音もなく雷ではないとわかっていた。6～8の車線幅で地上に平行に流れていた。

笑顔で言った。“ありがとう”自分がおかしくなくて、すべてのことは本当に起こっているのかを知るのに、これ以上余分な証明がいるだろうか？何もいない！座りながら雲の中の明るい方角を見ていると星が見えた。そこで終わりだ。そのときから16年前から頼まれていたことを十分に承諾しようと心に決めた：自分の話を書き、彼らについて人に知らせよう。真実はもはや隠せないだろう。かつてなかったような明確さを持った。この旅では新しい知恵は得られなかったが、確信はむしろ深まった。すべてなるようになっていく；私の道ははっきりしている。

私の人生はその瞬間から違っていくだろうと知りつつその夜は眠りについた。仕事をする時がきたのだ。

フォーオーナー地区の最終日は怠惰に過ごした。朝食後古代遺跡をツアーをいくつか廻った。その日は考えも低い調子で過ごした。夕飯を摂るとトイレとシャワーに行きギフトショップに行って水がないか調べることにした。トイレから出ると、数日前にドゥーランゴで会ったフランス人の女の子に遭遇した。男性らは数フィート先に駐車しているという。

最後の日に何てふさわしいのだろう。家に戻る前に社会に復帰することができる。ケベックから来た3人の若者は飲んでいて誘ってくれた。丁寧に受け入れると、その日は一晩中、エイリアン以外のことを話していた。私にとっては完璧だった。ここ2週間で起こったことについて、自分の考えを振り返って簡潔する必要があった。潜在意識をスピリチュアルで啓蒙的な旅と同化する時間が必要だった。

その夜はすぐに過ぎ、さよならを言う時間になった。自分のキャンプ場まで歩いて戻る間に、自分自身にコミットするのを感じていた。今日、古いものを手放して、新しい物を迎えよう。そう思いながら笑顔で眠りについた。

オーブとのコミュニケーション

2005年は新しい目的と共に始まった：本の執筆を続けることだ。私の話を書くことが最優先事項となり、自分の体験を世界に共有することができた。その結果、人生の方向性も変わり始め、時に日常生活の出来事に注意を向けるのが難しくもあった。

2004年にホピの男性とロバートに出会ったことで、自分の人生を人と共有する時がきたと確信した。その第一歩がUFOコミュニティに再び足を踏み入れることだった。インターネットを検索し、1991年に参加した会議が今も続いているのかを調べてみた。まだ開かれていることを確認すると、住所を伝えイベント情報を知らせてくれるよう頼んだ。似たような人々と再び関わるのに完璧な最初のステップだ。

1月の終わりのころ郵便箱を見に行くと、UFO会議からのイベント案内を見つけた。郵便受けから手紙を取り出すと封が半分開いていたのでじっくり見た。UFO会議からの手紙であることや封が開いていたのがどうにも怪しい感じがした。また始まったのだろうか。境界線を越えたから、手紙が開けられたのか？

開封された手紙に少しばかり憂鬱になった。どんな理由にせよ、続けるのかを考えるサインだと感じた。そのイベントに参加すべきか知りたくて、さらに情報を教えてもらおうと電話をかけた。コーディネーターの一人であるアダムの話はとても満足できるものだった。私が最初に参加した1991年の会議について話をしたのだ。彼は活動当初から会議に関わっており、のっけからコンタクト相手に恵まれるのは喜ばしいことだった。否定的な判断をしない人との会話は素晴らしく、自分を守らねばと気負う必要もなかった。会議への申し込みを決めるには、それで十分だった。

自分の身に起こった幾つかの出来事や、アリゾナ州ツーソンで開かれた第一回UFO会議での思い出話をアダムに語った。クローンと呼ぶ人達についても少し話をした。アダムは感心してくれたが、過去何年も数々の奇妙な話を聞かされていたろうし、私の話もそんな話の一つに思われたはずだ。ひとしきり話が終わると、彼は私に、会議に来た時は必ず自分の所に挨拶に来て欲しいと言った。

参加手続きの際、費用を安くするために相部屋を希望した。誰かと部屋をシェアするこ

とには少し不安があったが、相手のことが気に入らなければ、部屋の外で過ごす時間を増やせばいいだろう。

会議に向かう数日前、会議事務所から電話が入った。部屋をシェアする相手の名前を教えてくれた。ヴァネッサだ。それに先立って彼女から連絡が入り、初日の深夜一時頃にならないと到着できないだろうとのことだった。遅い時間に着くため、私をびっくりさせないようにと、あらかじめ連絡をくれたのだった。どんな人と相部屋になるのかという心配は、この時吹き飛んだ。思いやりの深さを考えれば、彼女はきっといい人に違いない。

2004年の終わり頃、手にすべきだと感じたといって友人が本を送ってきた。私は普段本を読まないのだが、友人がわざわざ送ってくれたので、目を通すぐらいはしなければと思った。作者であるラリーのETに関する考えは素晴らしかったが、その本は作り話、フィクションだった。それでも、作者に何らかのつながりを感じた。本の裏表紙に連絡先が記されているのに気付く、連絡を取ることにした。本を書いていることに興味を示し協力してくれるかもしれないかと思ったのだ。メールを送ってから間もなく電話で話をした。色々話をした後で、彼は私の本に協力することは考えていないが、ET会議で一緒に会えるだろうと言った。彼も会議に参加する予定なのでラフリンについたら連絡を取るということになった。自分に起きた話の全てを話せるという期待で楽しみだった。

会議参加にあたっては、表向きは“誕生日の旅行”という理由にした。職場の人にネバダまで行く理由を言いたくなかったのだ。本当のところ、ウソをついているわけではなかった。この旅行は、自分への何にも変えがたい誕生日プレゼントだった。理由付けすることで、敬意を払っている周りの人々に対し、本当のことを隠すのが楽にできるようになる、というわけではなかったが。

3月5日に空港から飛行機は飛び立ち、再びこの世での自分の居場所を探す旅に出ることになった。何故かこの会議への参加は自分にとって重要なものになると感じ、その理由は知るべき時に明らかになるだろうと思った。

ラスベガスへのフライトはスムーズに進み、飛行機は定刻通りに到着した。そこからレンタカーを借り、ラフリンまで二時間半運転した。フラミンゴホテルの立体駐車場に入る時、ウソだろうと頭を振りたくなるような光景が嫌にも目に入ってきた。“米政府専用”の

プレートをつけた車が沢山駐車してある。何故彼らがここに？と思った。仲の良い友人ダンに連絡をし、政府専用車がいることを話した；幾分私も彼らがいることに驚かなかった。

UFO会議で使う予定の会議場は、その時点では軍が利用していたことが程なくわかった。軍が三日間の一般向けの入隊勧誘を行っていたのだ。彼らが予定よりも長く会議場を使用したため、UFO会議の開始がずれ込んでしまっていた。明らかに軍関係者がいなくなった後、駐車場に停められた車の何台かのナンバープレートがついていなかったことに私は気付いた。多くの車はナンバープレートを外した状態で駐車され、会議期間中はずっとそこにそのままだった。

自分の車から荷物を取り、部屋の鍵をもらおうとホテルの中に入った。ホテルのフロントデスクで順番待ちの列に並ぶ間、軍人らしき3人がメインデスクの近くに座っているのに気付いた。UFO会議参加者の列を注意深く見ているように見えた。

列に並ぶ人々をながめ、色々なグループがUFO会議について話しているのを見て感激した。ある人達の会話に耳を傾けながら、ここにきた幸福感を味わった。この会議はとても良くなる感じがする！1991年の会議では心地良さを感じ、まるで家族というようだった。この会議もきっとそうなるだろうとすでに肌で感じていた。部屋の鍵を受け取り、部屋に落ち着くべくその場を離れた。

その後の数時間は荷物の中身を出し、パンフレットのいくつかに目を通してシャワーを浴びた。この旅行は完全な休暇ではなく私にとっては仕事でもあった。フロントに電話をかけ、ラリーがすでにチェックインしているかを確認した。ラリーの部屋に電話をつなげてもらう間、深呼吸した。呼び出し音が鳴っている間、彼に会うことが自分にとって、そして彼にとってどう影響を与えることになるのだろうかと思った。

ラリーとは簡単に話しをして、翌朝一緒に朝食を取る時間を決めた。朝一番に会うことになり、早速やらなければいけない最初の仕事をこなせると思ってホッとした。予定を組むことができたので、少し時間を取ってホテルとその周辺を散策してもいいだろうと思った。一旦会議が始まれば、おそらくそういった時間は取れないだろう。とても忙しくなりそうだから。

ホテルの周辺を歩いていると、名札をつけた会議参加者が目に付くようになったが、一

人で過ごすようにした。あっという間に日が暮れ、会議に来た理由を頭から一旦追い払おうと部屋に戻った。こういう時はテレビを見るのがいい。色々ある一週間になりそうだし、と思った。

ルームメイトがホテルの部屋に入ってきたのは、夜も更けてからだった。彼女は会議の前に南アフリカに行っていたと説明をした。互いに自己紹介をし、眠りにつく前に話はずませた。ヴァネッサが普通の人だったのが嬉しかった。一線を越えてあちら側に「いっちゃってる」人の可能性もありえた。こういった会議にどんな人が来るかはわからないし、残念なことに大勢の人が集まれば中には常軌を逸した人も必ずいるものだ。

翌日は朝早く起き、ラリーに会いに行った。朝食を取りながら、自分に起きた事を話し、彼はそれを丁寧に聞いてくれた。会議では最初のスピーカーが話をする時間が迫り、ラリーがその人の話を聞きたいのを知っていた。しかし予定の時間になっても彼は「気にしないで」と告げた。私の話を最後まで聞きたいからと。これほど詳しく自分の経験を誰かに話したのはとても久しぶりだった。自分にとって素晴らしい解放の機会となり聞いてくれたことに感謝した。彼と話したことは、会議に参加する上で素晴らしい滑り出しとなった。そのおかげでその後に続く会議の期間中、自分自身のバランスを取り落ち着いた状態でいられたのだ。

互いの経験を話し、私とラリーが会議に参加する時間となった。別れる前に会っておいた方がいいと思う人達がホテルにいと教えてくれた。彼は那些人達について簡単に触れ、たぶん私一人で会った方がいいだろうと話した。彼が那些人達を賞賛するのを聞いただけで自分が那些人達と繋がっている感覚をすでに感じた。

その後数日間グループのメンバーと一度に一人ずつ会っていった。ニューヨークから会議に訪れたグループの多くの人と心地よく素敵な形で交流をしていった。そのうちの二人は、愛情のこもった形で私に心を開いてくれた。二人ともこの会議に出席をし、そこで誰かに会うというはっきりとしたメッセージを受け取っていたようだった。ロンダという女性は出会いに感動していたようだった。話し始めてすぐ、彼女は私が出会うべき人だと気付いたそう。そして、最初にかわした会話に心から感動し、私の方も彼女がその場に居合わせてくれ、お互いに出会えたことに感謝をした。

グループの二人目の人はディーンと言ひ、ロンダの時と同じような会話を交わした。彼も誰かに会うためにこの会議に参加をしなければいけない、というメッセージを受け取ったと話した。お互いに話をし始めると、それが私だと感じたそうだ！私は彼が会議に参加したことを嬉しく思い、お互いの出会いにおそらく意味があるだろうと伝えた。彼は、多くの人が到達していないレベルでこの世界の理解を示している突出した人だった。とてもスピリチュアルで、蝶のように優雅な物腰をしていた。

ディーンもロンダも素晴らしい人で、宇宙人によっていい影響がもたらされたことがうかがえた。二人とも芯が強く、信念を強く持っていた。彼らと会話し、彼らが自らの持つ知識にきちんと対応できていることを知ることで、私自身がリフレッシュされた。多くの場合人は答えを見出すために本やありとあらゆる場所を探求せねばという思いにかられる。その点、ディーンやロンダはとても重要な秘密を知っていた。知識は自分の中からやってくる事を。本は私達が本当に求める情報の出所である、自己に内在する“その場所”に気付くまでのガイド役にすぎない。私達が探すものは全て“そこ”にあるのだ。

多くの人と会うほどますます心地よさを感じ、1991年の会議がとても気に入った理由を思い出した。常に本当の自分の姿を隠そうとする日常から、ささやかながら解き放たれる時間。そこに集う人々は、変に思われかもしれないという恐怖感なしに、自分の経験や信じる事を自由に話している。批判的な人々から自分を守らねば、という思いから解き放たれ嬉しかった。ふつう「あいつは気が変だ」という方が、エイリアンが存在する可能性を問うよりも簡単だから。

UFO関連の人達と最後に関わった時からすると、多くの情報共有のみならず精神的な成長が為されたことが目に見えてわかった。ETとは何なのかという理解が広がったことを見聞きし嬉しかった。会議の講演者の情報量も増え、参加者は社会構成を見事に反映していた。医者、教師、母親や労働者クラスの人々。社会のあらゆる階層から参加者がいた。宇宙人に関する啓蒙がどれだけ熱心に行われてきたかは明らかだった。私もその一助をなせていれば良かったのだが、これまでは自分の経験を話すには時期尚早だった。

エイリアン体験を持つ少数の人を除き、講演者の大部分は研究者だった。コンタクティ/アブダクティとして会議に招かれた人達用に、別途発表時間が割り振られていた。彼らが

望んだ場合は自分の体験を参加者とシェアすることができた。とは言えこれはまだほんの始まりにすぎない。大衆の無意識を呼び覚ますのは、ゆっくりと時間がかかるプロセスなのだ。

日を追うごとに友人達ー私がケアテイカー（保護者）と呼ぶエイリアン達ーに思いをはせるようになった。会議期間も半分が過ぎた頃、自分の部屋に座り彼らのことを考えていた。静かに座り頭の中をクリアにした。瞑想状態になりながら、会議に参加する人達に姿を見せて欲しいと頼んだ。参加者達は、エイリアンからのメッセージを広く教えるために大変手を尽くしていた。彼らにはエイリアンは有難く協力的な存在なのだと知る資格があるはずだ。目を開けながら、私をサポートしていることを教えてくれたエイリアンに感謝をした。

会議のためバンクーバーを離れる直前、これと似た瞑想をした。何年かの間に私が学んだことを一つ挙げるとしたら、それは何事も不可能ではない！ということだ。私にできることは、質問を投げかけいつかその答えが返ってくるのを願うだけだ。ベッドから起き上がり、雑念を追い払って、その日のそれからの事に再び集中した。

部屋を出て下に降りると、会議は最高潮に達していた。あちこちで人々が交流し、以前の友達や新しく知り合いになった人が、入り混じって話をしていた。なるほど、毎年のように会議に参加する理由のひとつがわかる。

ここに着いてから何度も会議のコーディネーターを務めるアダムを見かけたが、いつも忙しそうで話しかける暇もなかった。その時は、彼がくつろいだ感じでたわいもない話をしているところを見かけたので、これはチャンスと挨拶をしに行った。手短にけれども気さくに話をし、考えていたアイデアを彼に伝えた。皆で誘導瞑想をすれば、ポジティブなエネルギーの流れをかなり強くできるのではないかと考えていた。それは良いアイデアなので、提案書を書いて欲しいと彼が私に言った。そうすれば、会議の評議会にかけられるからと。もしこれが承認された場合、誰が瞑想を誘導するのがいいかと彼に聞かれた時、皆と一緒に瞑想するということがの方が、誰が誘導するのかより重要なことだと答えた。

アダムとの短い会話は終わりを迎えた。彼は行かなければいけない用事があったので、時間を取ってくれたことへの御礼と、直接話す機会が持てて嬉しかったことを伝えた。瞑

想の提案書を書こうと真っ直ぐ部屋に戻った。人々の絆を強めていく上で、この大切な行動がいかにかシンプルなものかを理解してもらえるように、できるだけ簡潔に内容をまとめた。

その晩、参加者全員のためのディナーが用意されていた。とても楽しい夜で、誰もが会話をしてくつろぎ、一緒にいる仲間と楽しんだ。再びアダムに会い、手書きした提案書を渡した。彼がその内容を気に入ったのが見て取れたが、実行するには会議主催者全員の承認を得なければいけない。2、3日以内に主催者達の意向を教えてくれると言った。時間を取ってくれたことへのお礼を伝えテーブルに戻った。

その後は、その晩ずっと参加している人々をじっくり見ることにして、楽しく過ごした。参加者が多種多様に富み全く飽きなかった。正直言って心ここにあらずという人も居た。そういった人達は社会のどんな場所にも存在しているしこの会議にもそれが当てはまると考えるのはもっともなことだ。悲しいかなUFOやエイリアン批判家の的にされがちなのが多くの場合こういった人達なのだ。

会議の開催期間はあっという間に過ぎ、ここから離れたくなかった。ホピの人達の所に戻る日のことを思い、この中のどれぐらいの人がその未来を共にするのだろうと考えを巡らせた。参加者の多くが、他の人が知れば恐怖におののくような知識を得ていた。人々は、未知な事や理解できない事に対して恐怖感を抱く。この恐怖感がアブダクティやコンタクティであるために耐えなければいけない嘲りを生み出す。会議中はひとときではあったがグループ全体がありのままの自分でいられた。

会議も最終日を迎えた。期間中一緒に過ごした人達のほとんどはその日の講演者を見たいと言っていたが、私はあまり興味がなかったのでプールに足を運ぶことにした。

いずれにせよ、自分の白い肌を少し焼いておく必要があった。家路に着く前に、少しでも日焼けするチャンスを逃したくなかった。

プールに行くと、会議参加者をプールサイドで全く見かけなかった。若い子達が、あちこちで水をばしゃばしゃさせて遊んでいたのも、少し静かなプールデッキの隅に移動した。日差しは強くとても暑かった。

デッキチェアを見つけ横になって太陽の光を浴びた。この期間中の出来事を振り返り、

出会った人々のことを思った。家に戻ってからその後上司に休暇中の話をどう話そうかと考えた。休み中に本当にしていたことが悟られないようにどうやって話せばいいんだろうか。その事を考えるだけで気が重くなった。隠し事をするのは嫌だった。

私の体はどんどんと熱気をおびながら午後の時間はゆっくりと過ぎていった。火照りを押さえるために水の中に入る。少し泳ぐと気分が良くなるので、するとまたデッキチェアに戻り横になった。とはいえ、また暑くなり、体の向きを変えたりしだすのに時間はかからなかった。太陽はどうしようもないくらい照り付けて、日差しのまぶしさだった。もう戻ろうと思う度にもう少しここに留まっていたほうがいいと強く感じた。

日差しがあまりにも眩しく、一時も目を開けていることができなかった。サングラスをかけ太陽から顔を背けても目を開けられるのはほんの一瞬だった。あまりにキラキラと輝いていて不思議な程だ。

再び仰向けになり顔にも陽の光を浴びようと頑張ったがまぶしすぎて難しい。するとどこからともなく声が聞こえた。大きく鮮明な声が頭の中に響いた。空を見上げて。私達がこれから姿を現すから。すぐにエイリアンの声だとわかった。彼らが私とコンタクトをする時のいつものあの声だった。体を起こしてデッキチェアに座り、サングラスをかけた。サングラスをかけてもあまりにも太陽が眩しく、空を見上げるのがほとんどできない程だった。日差しを遮ろうと両手を体の前に出すと正面が見えるようになった。

目を皿のようにして見つめていた。あなた達どこにいるの？と心の中で唱えた。しかし返事はない。

その時右方向にボールのようなものが浮かんでいるのが見えた。ボールのような物は一定のスピードで一直線に進んでいた。その後ろには2つめのボールがあった。プールデッキを見回し会議の参加者がいないかどうか確かめた。プールに居合わせた人に大声を出して知らせたかったがきっと皆反応せず愚か者になるのがオチだった。お互いに完璧なフォーメーションを保ちながらゆっくりと水平飛行する2基の丸いオーブが通り過ぎていく姿を見つめていた。どうしてここに誰も居合わせてないの！と思った。他の人がここにいないければ意味がないじゃない！会議中に姿を現して欲しいとエイリアンにお願いしたから？と思った。ありがとうと伝えた。これでは誰も信じてくれないわ！とも思った。

すると再び声がした。今度はもっと穏やかで静かな声で写真を撮ってと伝えてきた。カメラを持ってきたのをすっかり忘れていた。素早くカメラを取り出し2枚写した。取り終わった時には丸いオーブはホテルの裏手に回り見えなくなってしまった。

カメラを片手にあわてて立ち上がり、プールデッキのまわりに会議参加者が誰かいないかよく見てみた。プールをはさんだ向こう側に複数の講演会場で見かけたことのある男性がいた。これで全部が終わったわけではないと思いその人の方に歩いていった。空を見渡しているとホテルの反対側にオーブがちらっと見えた。オーブが消えないうちと思い、歩くスピードを速めた。一緒にこれを見てくれる人が必要だわ！と考えていた。

「会議に参加なさってますよね？」相手の返事を待たずに続け「すぐに立ってみて下さい。これ、絶対に見たほうがいいですよ。さあ立ち上がって」と無我夢中でオーブが3基浮かんでいる場所を指差しながら言った。「見て！あそこよ！」彼は飛び上がり目にしている物が信じられないようだった。

空にはさらに3基、何分か前に見たバスケットボール型のオーブとは違う形のものが浮かんでいた。私が‘スター’オーブと呼んでいる形だった。星と全く同じに見えるオーブで、互いの距離を完璧なフォーメーションに保ちながらさっき反対方向に飛んでいったオーブと同じ高さで水平飛行をしている。もう少し写真が撮れないかと柵で囲まれたプールエリアから走り出た。オーブがホテルの影に隠れてしまう前にどうにか写真が一枚だけ撮影できた。さっき見かけた男性のところに戻ると彼はとても興奮していて目撃したことが信じられないようだった。お互い衝撃的な体験についての話をし、彼は名前はジョージだと教えてくれた。

彼と私はプールサイドに立ち、見たばかりのものに心を躍らせながら、オーブの形跡が何かないかと空をじっくり見渡した。会議の間に姿を見せて欲しいとお願いした時のことを思い出しながらこれ以上ないぐらい興奮した。もう一度ぐると四方八方を見渡してみた。本当に私の願いを聞いて姿を現してくれたのだろうか？どうして信じ切れないのだろうか？いや今まで自分に起きてきたことを振り返ればわかることだ。私はにっこりとし心の中で彼らに感謝を伝えた。

どうしても会議参加者にこの体験を分かち合いたかったので、ジョージに別れを告げる

と同時に閉会ディナーで会いましょうと伝えた。ものすごい満足感と興奮に包まれたままプールを後にし、新たにできた友人を探そうと会議が行われている地区に直行した。ロビーの所に小さなグループを見つけた。そちらに向かって歩いて行き何が起こったのか話をした。最初に話した人達の中にアダムの奥さんがいた。彼女は私にアダムの所に行つて是非話をするようにすすめた。叫び出したいぐらい興奮した。この出来事を世界中に知らせたかった。人々は興奮状態のざわめきと共にエイリアンたちが私達に姿を見せてくれたことを知った。なんて素晴らしいギフトなのだろう！

展示者席がある部屋に行き、奥さんが多分あそこにいると思うわと言っていた場所でアダムを見つけた。「ついさっき、とってもすごいことが起きたの！」と、自分がバンクーバーを発つ前、それから会議期間中にもう一度エイリアンに姿を現して欲しいと頼んだ様子も一緒に含め、何が起こったのかを彼に話した。彼も私と同じ位この話に感動しているのがわかった。私にデジタルカメラを持ってるか聞いてきた。写真が見たいのだ。残念ながらデジタルカメラは持ってないと答えた。しかもプールで会ったあの男性の名前も思い出せず嫌になった。アダムにその男性の名前は？と聞かれたが、興奮しすぎてすっかり忘れてしまっていた。彼には男性を見かけたら紹介すると伝えた。

アダムは上着のポケットから私が書いた誘導瞑想の提案書を取り出した。今晚この瞑想をやってみたいか聞いてきた。プールで見たオーブの話と一緒にと言う。そういわれた時、私が会議に参加した理由はこれだったのかと悟った。彼は会議評議会から最終的な承認をもらう必要があるのでは結果は夜に教えるけれどその心積もりで準備して来て欲しいと言った。

ロビーや展示者エリアに溜まっていた人の数人と話をしてから部屋に戻った。水着から着替える必要があった。着替えの途中に車の所まで行って運転しなくてはいという強い衝動にかられた。どうして今なの？と思った。「オーケー。わかったわ」と声に出した。「どこかに行つて欲しいと言うなら、行くわよ」素早く部屋を出て車に向かった。

車に乗り込んでから深い呼吸をした。これからどこに行くのだろう？何をすることになるのか？自分のスピリットに従いなさいミリアムと頭に浮かんだ。駐車場から車を出し大通りに入った。

このあとはどこに行く？と自分に尋ねた。

右に曲がって

あなた達の望む場所に連れて行ってちょうだいと思った。すぐにハイウェイに入りラブリン郊外へ出た。辺りな所を運転したくなかったので「ねえ、私遠くまでドライブはしたくないの。もっと街に近い所でじゃできないの？」と声に出していった。

このほんの数分後ハイウェイを下りて砂利道に入ってしまった。それから数百フィート走り車を止めた。車から降りて辺りを見回した。で、今は何をするわけ？何も見つからず、聞いた。「ここに來た理由は何？」

頭の中で声が響いた。写真を撮りなさい

撮るって何を？と聞く私。どれのことだかさっぱりわからない。遠くに小さく山脈が見えるので稜線に何か隠れているのだろうと目をこらして見た。けれど何も見えない。

頭の中でもう一度響き渡る声がした。写真を撮れば写るから。

オーケー。オーケー！わかったからと思った。車の座席からカメラを取り、何が写かくわからず写真を2枚撮った。現像した時にわかるのだろうと思った。そうすれば色々な事がはっきりするだろう。出来上がった写真を手にした時、私の正気具合にクエスチョンマークがつくのか、あるいはそうではないのか。

その場所に残って欲しいというエイリアンの気持ちを強く感じたがホテルへと戻った。もう午後も遅くなっていたし、閉会ディナーの着替えをする前に休んでおきたかった。ホテルへ戻る道を運転しながら、何百人もの会議参加者の前で話すことになるかもしれないと思いを馳せた。想像するだけで緊張する。きちんとやらなければ—これは重要なことなのだから。これらの出来事は私のためだけでなく会議に参加している人達のために起きていると感じていた。

宇宙の計画にある果たすべき私の役割がとうとうその姿を現し始めてきた。今ゆっくりとそれが明らかになる時を迎えた。

部屋に戻り、午後の出来事をヴァネッサに話した。彼女はそのオーブが政府側の物だという可能性はどうかと聞いてきた。とてもいい考えだ。政府側もオーブを操っているだろうとは知っていたが、小さい頃に見た時の記憶からすると、あれは恐らくエイリアン達の

オーブだと判断できた。

ヴァネッサと私は、ディナーの前に軽く寝ることにした。眠りから覚めると、素早く夜の装いに着替えた。バンケットルームに行くと、すでに沢山の人が丸テーブルを囲んで席に着いていた。ニューヨーク組を見つけ、私達も同席していいかと尋ねた。二人が座るには十分な余裕があり一緒にテーブルを囲んだ。参加者で部屋がいっぱいになるまで時間はかからなかった。人々が部屋の中を移動する度、ちょっとした会話が沸き起こっていた。皆と一緒に過ごす最後の夜だった。誰もがアイディアや住所を交換し、最後の言葉を交わそうと、せわしなくしている空気を感じた。

全員が席に着くと、アダムを探して部屋の中を見回した。瞑想の件がどうなったか、そしてオーブの件を他の参加者とシェアしていいかを確認したかった。彼は午後の出来事を話すことはできるが、会議評議会側は、その場に居合わせた男性と一緒にやってもらいたい意向だと私に伝えた。まだその男性を見かけていなかったがいずれやって来るはずだとアダムに言った。午後の出来事の話とメディテーションをする持ち時間が6分ほどだけだと言われた。時間たっぷりという訳ではないが許された時間の一秒一秒に感謝した。まだ男性の名前が思い出せずにいる自分が馬鹿みたいに思えた。オーブにばかり気がいって人のことはおかまいなしだ。

しばらくするとアダムが参加者に向けて簡単なアナウンスをし、私を紹介した。私は緊張していたが深呼吸をすると大丈夫になった。私がすべきは話をすること、それ以上は考えないようにした。短い誘導瞑想をした後でプールに出向いた時の状況を説明し、オーブを見たこと、エイリアンがどうやって姿を見せることを伝えてきたのか、そして居合わせた男性がいたことを話した。残念なことに、まだこの会場でその人を見かけていませんが、見つかり次第彼からもその時の話を聞けるでしょうと付け加えた。時間制限があったのでいつも以上に緊張したが考えていたよりは上手くできたと感じた。

演壇に立って一堂に話をしながら、自分達を見るように、というエイリアンの言葉を聞いたことを誇りに思った。もし彼らの言うことを聞かず、上を見ようとしていなければ、彼らは私達のためにそこにいるのだということを、私達に見せることができなかったはずだ。6分はあっという間に過ぎ、アダムがそろそろまとめてと言いながら、私の後ろに立

つ気配を感じた。私は皆に向かって、プールで私と一緒にになった男性が到着したらお知らせしますので、彼からも話をしてもらえようとして確約した。

ステージから下り自分の席に戻った。その途中多くの人達が体験したことを聞かせてくれてありがとうと言ってくれた。終わってほっとしていた。席に座ると食事の開始が告げられ、ゆっくりテーブル毎に食事を取りにビュッフェテーブルへと移動した。

その晩はつつがなく過ぎていったが、まだプールの男性の手がかりはなかった。彼がここにはいないように思えて、不安とともに苛立ってきた。期間中はずっと見かけたのに、どこに行ったというのだ？他の人達は私がこの話をでっち上げたと思うんじゃないかと疑いはじめた。皆が写真を見せてもらえないか聞いてきた。残念ながら現像していないのでそれもできなかった。

プールの男性が部屋の入り口に立っているのを見かけたのは、スピーチが終わって随分と時間が経ってからだった。彼の方に歩いて行きアダムが彼から会場の人に午後出来事について話しをしてもらいたがっていると伝えた。彼はそれは無理だと言った。自分はとても内気で今こうして話すのでさえ大変なのに大勢の前でなんてとてもじゃないと。何てことだと思いつつアダムに知らせにいった。例の男性がここに現れたが彼は人前で話したりしないだろうと伝えたかった。皆をがっかりさせてしまうような気がして困り果てた。

アダムは彼を説得してみてくれないかと言った。会議全体に何が起きたかを伝えることが重要なのだからと。私はこの点を伝えたがプールの男性はそれでも拒んだ。この話が全部私の作り話ではないことがわかってもらえるよう男性本人からせめてアダムに話をしてもらうよう説得した。プールの男性であるジョージと私がアダムの方に歩いていくと彼は男性を見て「ジョージ、君だったのか？」と言ったのだ。ジョージは第1回を除き毎年会議に参加していたためなるほど二人とも知り合いだったのだ。少しは甘い言葉もささやきつつ、最終的にはジョージに話をしてもらえることになった。私達は腕を組んで体をスウィングさせながら一緒にステージに一緒に上がった。

ジョージは私がプールの所で彼の方に走って来た時の様子や、訳もわからないまま立ち上がり空にオーブが浮かんでいるのを見つけた時の状況を全員に向けて話した。参加者はその話に息を飲んだ。手をたたきはやし立て叫び声を上げた。それはもうすごかった。私

達は一緒にステージから下り、二人とも上手く終わったことを喜んだ。その後の私達はダンスパーティのベルのようだった。私は新しい友達と一緒に自分のテーブルついたが、そこを通り過ぎる人達は一旦立ち止まって体験をシェアしたお礼を私に伝えてくれた。

夜も終わろうとしていた。そこを発つのも数時間を残すのみだ。12時間後には帰りの飛行機に乗るのでその夜ラスベガスまで運転しなくてはならない。部屋には荷物を詰め終えたバッグを残していたので、後はそれを持って出るだけだった。私は当初飛行機の時間に間に合うようにラスベガスへ着くためここを朝4時に出発するつもりだった。しかし夜が進むにつれ2、3時間だけ寝てもかえって疲れるだけだと気付いた。ここを離れるまで出来る限り皆と一緒に過ごしたかったので午前2時に出発することにした。

ディナーが終わると、ホールのどこかしこにも小さな集いができていた。人々はパーティを始めそのいくつかに誘われた。ヴァネッサと結びつきを感じたもう一人の女性のメラニーと一緒に集まりに行った。ダイニングルームでは人々がペンを取り出しこれが最後のチャンスと友人となった人達のメールアドレス聞く場面が繰り広げられた。また家に戻らなければいけないのかと思うと悲しかった。どうして世界中にこういう人達がもつというようにならないのか？と思った。連絡先を交換しニューヨーク組にさよならを言った時は涙をこらえなければいけなかった。まるでちょっと立ち寄った昔の友達の所から帰る時のようにそれは辛いことだった！

私達3人はボールルームを出てホテルの部屋で開かれたパーティへと向かった。そこは間違いなく面白い人達の集まりだった。そこで話されていたのはESPや空中浮遊といったことだった。座って話しに耳を傾けながらどうやって私の人生こんな所にたどりついたの？と自問せずにはいられなかった。私の人生は他人とはかなり違っていた。普通の人はほとんど耳にしないことを大量に知っているばかりか、陰謀論や政府の隠蔽、軍の関与についても受け入れていた。私の座るその部屋には物理学者や元軍当局者、科学者、ラジオの司会者、普通の人達そして私がいた。何というコンビネーションだろう！

ヴァネッサ、メラニーそして私は、下のラウンジで誰か集まっていないか見に行くまでしばらく話しをしていた。下に降りるエレベーターの中で、その日ずっと感じた感覚が全開になった。家に戻る途中、彼らに会うことになると思った。私がこの感覚のことをメ

ラニーに伝えると、彼女は大丈夫心配することないわと言った。彼女は、会議の後に、私が自分の想像力にやられてしまうんじゃないかと思ったろう。私には自分は大丈夫だとわかっていたが、その感覚は強かったので、再び彼らに会うことに疑いはなかった。とは言え、ただ彼らを見るだけなのか、それとも連れていかれるのかはわからなかった。二つに一つだったのでどちらかわかるのは時間の問題だった。

ラウンジに着くと、ニューヨーク組の何人かに出くわした。午前2時近くになり、もう出発する時間だと知った。この小さなグループを眺め、もしまた会えるとしたら、いつになるのだろうかと思った。似通ったスピリットの親密さは紛れもないものだ。E T体験を持つ人達に初めて会った時の強い感情がまだあるように、彼らとの結びつきはずっと私と共にあるだろう。言いたくはなかったが、残るわけにはいけないので、出発しなきゃいけない時間だと伝えた。

皆と抱き合いその場を離れると涙があふれてきた。泣き崩れてしまうから後ろは振り返らなかった。フロント係は私の車を表に回し荷物を手伝ってくれた。私の悲しみはとても深かった。新しい友達ができ心穏やかな一週間を過ごした。今はもうこれから戻っていく世界に頭を切り替えなくては。

ラフリンの街の灯りが瞬く間にバックミラーから消えていった。普段はハンドルを握るのは大好きだが今は違う。夜の運転は好きではないし、友人であるエイリアンに遭遇するという感じがあったので、何をどう待ち構えればいいのかわからなかった。

速度を上げずに走っていたので、何台かの車が追い越していった。私はスピード狂ではないし、普段制限速度で運転している。夜はもっと用心深く運転する方だ。15分か20分程したところで一台の車が後ろについた。追い越して欲しかったので、スピードを落とした。しかしスピードを下げても追い越していかない。外は真っ暗闇で走っているのは私とその車の2台だけだ。後ろの車は追い越すのが気が引けてるのかも思い追い越し車線になるまで待ち絶えず後ろをミラーで確認した。

追い越し車線になっても彼らは追い越して行こうとしなかった。私はもっとゆっくり走りはっきりと尾行されていること気付いた。頭を左右に振りながら私のことをどれだけ聞抜けだと思ってわけ?と思った。更にスピードを落とした。それでもまだ後ろについたま

まだ！ハイウェイだと言うのに時速20マイルまで速度を下げ路肩に車を寄せた。これでは彼らも追い越すしかない。私の車を止めるつもりなら別だが、私は彼らに選択肢の予知を残さなかった。

とうとうその車はこちらにぴったり並んだあとゆっくりと先に行った。白いバンのナンバープレートには米国政府と記されていた。通り過ぎる際私は言葉を選んで選り大で叫びつけた。そのあと私は車を止め、彼らが角を曲がり視界からいなくなるのを待って再び車を動かした。

そこからラスベガスまでの道のりは変な感じだった。夜は道路も違って見えるのはわかっていて、自分が何だか全く見当違いの場所にいる感じがした。ラスベガスに着くまでに必要以上に時間がかかった。何もかも見覚えがなかった。飛行機に乗り遅れるかもしれないと思い始めた頃、やっと見慣れた場所を目にするようになり、ラスベガスがそう遠くないことを知った。

その後怪しい車両は見かけなかった。何度も窓の外にUFOや何かのサインがないかひっきりなしに見ていたが全く何も見えない。ラスベガスの中心部に近づくにつれエイリアンに会うという感覚がどんどん強くなった。どこかに行かなければという感覚があったが、それは一体どこなのだろう。

とうとう声に出し「聞いて。私を連れて行きたい所があるなら、そこまで案内して！もう、外をきょろきょろと見ながら運転するのも限界なの。このままじゃ、事故を起こすわ」と言った。自分の下りるハイウェイの出口がどこかと注意して見ていたが、いざ出口というところで何故か躊躇もせずに通り過ぎた。行くべき所に向かっていると感じていた。これからどこに行くの？まだこの車をレンタカー会社に戻さねばならなかったがこの辺りの地図を持っていない。大丈夫かと気持ちが落ち着かなかった。ベガス・ストリップの灯りが遠くなっていくのが見えた。空港はその地域に近くレンタカー会社もある。灯りのある方に戻っていけば大丈夫だろう。

別のハイウェイ出口の標識が出ていた。その車線に入るにはもう時遅しという頃にどの方面に通じる出口かに気付いた。頭の中であなた達の望む所に案内してちょうだい。それに従うから。と言った。更に幾つかの出口を通り過ぎようやくハイウェイを下りた。その

先は曲がり道がくねくねと続いていた。走り進むうちに正しい方向に向かっているのが分かった。角にガソリンスタンドがある大きな交差点まで走り続けた。道を聞くのにこれ以上うってつけの場所があるだろうか。

車を寄せて停車し外に出た。なるほどここはエイリアン達が好きそうな場所だ。その区画のまわりの照明はとても明るかった。建物の外やガソリン給油ポンプに沢山の明かりがついていた。建物のある方を見てみるとちょうどその建物の上、空の低い所に輝いている星が目に入った。よく見てみると、それが星ではないとすぐにわかった。私が上を見上げると、真上に2つ目のオーブが、左方向に3つめのオーブがいた。3基とも強い輝きを放ち、光害や空のかなり低いところに位置していることから考えるとどう見てもただの星とは思えない。オーブの方を見て「ハロー！」と声をかけた。

了解。今からどうすればいい？と頭の中で語りかけた。

写真を撮って、あとはただ見ていてと聞こえた。それじゃ何だかマヌケみたいだ。誰にも気付かれないようにガソリンスタンドの駐車場で空を見上げるなんて無理だ。皆私をいかれた奴だと思うだろう。

あなたが見える。それがあなた達だってわかるけれど、ここにただじっと座ったりはできないわ。再びこの瞬間を他の人をシェアできるだろうかさもなければただのマヌケ思われるだけだ！と思っていた。

レンタカー会社にどうやってたどり着けるか知る必要があった。道を聞かなくてはいけない。選択肢は3；車に給油中のリムジン運転手聞くこと、自分の車の脇に立っているタクシー運転手に聞くこと、ガソリンスタンドの店内にいる店員に聞くこと。

タクシー運転手を選ぶととてもわかりやすく行き方を教えてくれた。何だか混乱してきた。というのも何故か今いる場所を知っているような感じがしてその人が教えてくれたのとは反対に行くべきだという確信があったからだ。彼はもう一度行き方を教えてくれ念押しに更に一回繰り返した。「ちゃんとわかった？ほんとかい？反対の方向には行っちゃいけないよ。いいかい？」彼はこんな調子で譲らないので、私は文字通り従うと約束しなければいけなかった。

車に戻ると運転手が正確に教えてくれた方向に走らせようとした。道路を出発すると、

急にスイッチが入りすぐに笑って言った。「わかったわ。何を見て欲しいの？」

タクシー運転手が教えてくれた方向は金網フェンスの反対側で裏手がベガス・ストリップ側だった。そのちょっと上に星が出ていた。笑顔になりクスクス笑った。そうよねと思った。会議でオーブがちゃんと現れたんだから、また現れて当然じゃない？

車を止めて外に出た。金網フェンス所に立つと懐かしい声のはっきりと頭の中で語った。写真を撮って。躊躇せず従ったがなぜだろうと思った。誰もこれを信じないだろう。誰も。どうやって信じられるというのか？私は一人だし、星のような物の写真は何の証明にもならない。すると再び声が聞こえた。何度も写真を撮り続けて。太陽の光の進行が分かれば移動してないってわかるから。

そこで私は立ってしばらく待ち次の写真を撮影した。フラッシュが消えると思うざるを得なかった。こんなの駄目よ！カメラも性能良くないし！次の5分後頭の中で叫び声を聞いた。すぐにここを立ち去らなければ。今すぐに。そうしないと大きな問題に巻き込まれてしまう！カメラをつかむと車に飛び乗りできるだけ早く走った。ドアが閉まりかけた瞬間に見上げると、警察が反対側からゆっくりと私の横を過ぎた。運転手が必死に作り笑いをしている間、私はゆっくりと車を走らせた。

そこでその地区の注意書きを発見した。フェンスの所に警告が出ていた－全部読み終える時間がなかった。フェンスの向こうの左側には沢山の車が停車していた。空港とストリップに向かう大きな草原を見ていた。ここはどこだろう？たぶんここはエリア51の駐車場でここから大きい白の航空機が毎日離陸している場所だ。やっとわかった。そして震え上がった！

次の1時間もっと写真を撮りたかったので大きな円を描いてドライブをして廻り止まる度に写真を撮り続けた。何度方向を尋ねても最初の感覚が正しいとわかるだけだった。もしタクシーの運転手が指示してくれた方向に進んでいたら2分以内にレンタカー会社に着いていた。しかし私は動かない奇妙なオーブを観察しながら、頭の中の声を聞き写真に撮り続けている。それも何か分からないものだ。クレイジーだ！

太陽が完全に昇ったがスターオーブは依然として動いていない！もう待てない。車を戻しに行かないと飛行機に間に合わない。彼らをもっと写真と撮って欲しいのを強く感じて

いた。「もう行かないと。待てないわ。飛行機に乗れなかったら次の飛行機のチケットを買うお金がないもの」と大声で叫んだ。しばらく立ってオーブを眺めた後でその地区を運転すると1分後にオーブが消えてしまった！少なくとも1時間見続けて1インチも動かなかったというのに。私が去ろうと思った瞬間に消えるなんて！彼らだわ！後は写真を現像してそれがエイリアンのオーブであることを証明するだけだ。

レンタカーはほんの先で鍵を渡して20分後の空港までのシャトルバスに乗ろうとした。駐車場で待つ間エネルギーを解放したかった。ベネッサに電話をした。彼女はまだホテルの部屋にいるはずだ。ホテルを出て起こったことを説明したかったのだが、オーブの話によって彼女を怖がらせたようだ。彼女はオーブが政府のために働いていると言うのだ。私には関係なかった。私をジャッジしない人と自由に話すことができた。それで十分だった。

バンクーバー行きのフライトは時間通りに離陸した。移動中はずっとここ24時間で起こった出来事について考えていた。オーブを目撃しただけでなく2回も見たのだ。ラフリン郊外で私が運転したときのフィルムにも写っていたら3度目だ。この場所にたどりつかせたイベントを振り返ると、まるでドミノの列のようだとわかる。いつになったら全てが倒れるのだろう？もしオーブが写っていたら少なくとも自分が正気であるという証拠を握ることになる！自分に言い聞かせた。私は正気を保てる人間だ！怖いように聞こえるがそれは本当だとわかっている！

家に着くと午後眠りについた。眠るとき撮影した星のことが頭にあった。どこで現像しよう？起きた時友人の友人に電話をし、必死になって写真にたどり着いた出来事について説明した。自分を馬鹿にしながら！再び私は場違いな感じがして、私が信じていることを受け入れてくれる人々の所に戻りたいと切望した。友人の友人と話をしたことで、自分次第で居心地が良くなるのであって他人が自分を心地よくしてくれる訳ではないと学んだ。貴重なレッスンだった。

その後で薬局に歩いて行って写真の現像をした。店員の男性に黒くなってもいいので全ての写真の現像が欲しいと頼んだ。それから幾らかかってもいいからすぐに現像して欲しいと頼んだー誰にもそれを渡さないこともお願いした。被害妄想のように聞こえるだろうが、ネガティブな考えを脇において私は正気だと思い続けた。薬局を出て自宅に戻った。

やっと1時間経ってゆっくりと歩いて行った。できあがった写真を見たくなかった。私にとって重要な瞬間だ。なぜ彼らが写真を私に撮らせたのか理由がわかっていなかった；しかしひとつだけわかった：もし撮影できていなかったら、まだ正しい時ではないのだ。

お金を払うと深呼吸をしてカウンターから立ち去る前に小さな包みを受け取った。家に戻るまでの間、路地に光が差しているように感じていた。歩を遅らせると現像したての写真を見ようと封を開けた。会議で会った人々の写った写真を見ずにパスした。

そこにははっきりと、プールサイドの最初の写真に2つの丸いオーブが写っていた。2枚目の写真には3つのスターオーブが写っていた。ラフリン郊外のハイウェイで要請されて手探りで撮影した2枚の写真には言われた通りに目に見える形でオーブが写っていた。目の前に真実があった。全部の写真にオーブが写っている！道端で立ち止まり涙を流した。空を見上げて言った。「ありがとう！ありがとう！」私はそうささやいた。

新しい道を歩む

UFO会議後の人生は興奮に満ちたものですぐに新しい人生が展開し始めた。わずか10週間後には荷物をすべて倉庫に詰め込み仕事を辞めることにした。居た場所に自分をつなぎとめるものがなくなり、自分の魂のガイダンスを聞く自由があった。母の健康状態がしばらく良くなかったのでかなり心配だった。彼女はまだずっと前にエイリアンコンタクトがあった小さい町に住んでいた。そこに戻って4～5歳のときにエイリアンから埋めるように指示されたオブジェクトを探さなければならないが、これは簡単な仕事ではない。そこで探すのに穴を掘らなければならないからだ。この2つの問題からクランブックに戻る方がいいと決心した。

クランブックに戻り母との生活を始めたら、旅行で母の元を離れるのは難しいと思った。毎年恒例のロズウェル・フェスティバルのために、ロズウェルに住む作家と会うことを申し出た。南西部にもう一度戻って自分の魂にエネルギーを与えるよい機会になるだろう。

仕事も家も無くわずかなお金しかない状態で友人のPCの前に座り旅行の計画を練った。自分の魂のために世界で最も美しい場所に滞在するには3週間位がいいだろう：フォーコーナー地区。私にとってすばらしい新しい人生の始まりだった。

もはや自分の真実を人に隠すことはなくなっていた；仕事を始め自分の経験を人とわかち合う時がやってきた。パソコンを眺めながら右手を上げ人差し指でキーボードを叩き、画面に映る旅行日程を承認した。深呼吸をして息を吐き大きな声で言った。「2週間後には家も仕事もお金も無くなるわ。あなたの仕事を始める準備ができたわよ。そこに居て私を助けてね」エンターを押すとその瞬間に自分の人生が変わるのを感じた。最終決心だ；ほっとしながら、過去を振り返らないし、もうこれ以上隠し事はしないと思った。自由を感じたが、本が終わるまでは先は長いと感じていた。

仕事に出かけるまで2時間あったので、友人の犬を連れて短い散歩をした。犬と公園にいと、頭の中から声が聞こえた。外を見て私たちが見えるから。ネバダの時と同じように言われた通り空を探し始めた。

見えないわよ。そう思った。

後であなたに会うから。頭の中で聞こえた。友人の家に戻るまで空をずっと探し続けたが何も

見えない。そこで仕事の前に少し休憩した。

4時15分頃に家を出ると仕事場までのバスが出ているバス停に向かった。完璧な日だった；空は透明なブルーで、白いふわふわした雲が近くにあった。いつものように目を空に向けた。本当に何かが見えるという期待はしていなかった。49番街に折り返しバス停まで歩いた。そこで待っている間空を見上げていた。すると2羽のハゲワシが頭上を回転しながら去っていった。

これは良い前兆だと思った。最後に2羽の鷲を見たのはアリゾナ旅行の前で、2003年の5月まで遡る。鷲に笑顔向けながら姿を見せてくれたことに感謝をした。バスが来ないか道路に目をやり再び上を見ると鷲は去っていた。

49番街は市内の賑やかな通りだ。バンクーバーは緑の町として沢山の木々があることで有名で、家はこの道路に面していて、大きなツガの木が回りに生えていた。巨大なヒマラヤ杉の垣根が横にあり鷲はそこに隠れたのだと思っていた；もっと広く見える場所を探すため側道を30フィートほど歩いて空を見た。

真上を見るとスターオーブともう一つの丸いオーブが銀色の緑の色に輝いている。嘘でしょ！と思った。2つの大きいふわふわとした雲の横に浮かんでいる。動かずじっとしている。あなたなの？と尋ねた。5時だった。空は透明なブルーで太陽が出ていた—この時間には星はないはず！彼らだと確信した！ありがとう。ありがとう。頭の中で話しかけると、満面に笑顔を浮かべた。

オーブを見ながら道端に近づくとポケットに手を入れて携帯電話を取り出した。3人に電話をかけたが誰も電話に出ない。この瞬間を誰かと共有したかった。やっとシャノンという友人とながった。電話で話し始めると2つのオーブは大地に向かって動き始めた。2つとも同時に動き始め降下する時もずっと同じフォーメーションを保っていた。

シャノンに目の前でおこったことをすべて話した。ほとんど同時に2つのオーブが動きを止め、木々の真上にきた。彼らは今私の道路の上に居り家の裏庭の近く4階の高さにいた。

このことにとても胸を打たれオーブに聞いた。メッセージがありますか？とてもはっきりした声が返ってきた。私たちはいつもあなたと一緒にです。私は泣き始めた。悲しみではなく純粋に感謝と喜びを感じたからだ。こんなことが起こるなんてなんと恵まれているのだろうか！コンピュータに座っていたのはわずか2時間前だ。彼らに助けを頼み、彼らは確かに私が孤独ではないと

示してくれた。私がどこにいても何をしようとも彼らはいつも一緒にいる。表現しきれない程の大きな愛情が私に伝わった。

シャノンとまだ電話でしゃべり彼らがどんなに近くにいるか話していた。オーブは両方とも静止している。しばらくすると丸いオーブが動き始めた。何をしているのかわからないが地上に水平に動きながらスピードを上げてスターオーブに近づいている。その瞬間2つは一つになるかと思ったが、丸いオーブは木の稜線に隠れて消えるまでスターオーブの下にあった。

スターオーブは次の数秒間動かなかった。シャノンはなぜ私が泣いているのか理解できないようだ。とても幸運に思うからだと伝えた！私の反応をわかっていたとは思えない。地上に視線を降ろすと涙を拭いた。再び見上げるとスターオーブは去っていた。

電話を終えるとバス停に戻る時間になった。どうやって人生のこの地点にたどりついたのだろうか？と思った。祝福されていると感じ目の前の道は正しいものだったと思った。もう待つ必要はない；私は正しい道に従うよう選ばれたという事実がこれ程はっきりとしていた。

その夜仕事に行くととても静かだった。すべての人々を見ながら彼らが私のような人生でならばどうするかを想像した。気が狂ってしまうだろうか？私よりもずっとまともな経験をしながら、現実を認識していない人々を見てきた。私はエイリアンにとって幾分重要に違いない。彼らは私にはっきりと示している。午後またもや彼らは私が魂に従い集中力を維持するようにサインを与えてくれたのだった。

2週間の仕事はあっという間に過ぎ、リラックスする前にフォーコーナール行きの飛行機に乗った。この旅では他の旅のようにどこに行きたいかだけしかわからなかった。もしあらゆる瞬間の計画を立てれば、待ち受けている出来事を全て失うことになる。ここ数年で学んでいた。見たい場所の候補はあるが、自分の魂が追々どこに行きたいか何をしたいのかを伝えてくるだろう。

アルバカーキには1月30日に到着した。そこで3月のUFO会議で出会ったハーベイという作家と直接会うことになっていた。会議で知り合ってから最初に本を書くのを手伝ってくれるのではないかと考えた。ニューメキシコに一緒にいる時にお互い会う約束をしていた。

彼はレンタカー付近で私を待つことになっていた。その場所に着くと彼は長距離バスの窓付近で立っていた。こちらが気づく前に彼はすぐにやってきた。私たちはロズウェル行きのハイウェイに乗ろうとしていた。

ハーベィは最初から正しい人かどうか疑問だった。私の信仰と同じように私の経験についても特定の側面についての私の視点を説明するのがとても難しいとわかった。

彼は極端に分析的で、お互いのパートナーシップがうまくいくのかわからないという感じがした。私たちの考え方はほぼ間逆だったのでよい本を書けるのかもしれないが、プロセスはあまりにも難しすぎるのだ。

次の数日間ロズウェルで過ごし、そこで自分が一体何をしているのかと疑問に思った。ハーベィは多くの講演者の話を聞き私は取り残され一人で放浪していた。私はほとんどのゲストの講演を聞かなかった。1988年以来私に与えられた知識はここ数年でようやく受け入れられるようになっていた。最初から自分で決めていたのは、他人の情報を度を越えて鵜呑みにしないことだ。多くの人々はこれを馬鹿げたことだと思っている；なぜ私が新しいことを何一つ学ばないかと言う。理由は単純だ：必要な情報をすべて持っているからだ。私の経験は膨大で詳細なので自分が現実に経験したことを他人に講義してもらう必要があるだろうか？なぜ誰かに私の経験が良いものか、悪いものなのか教わりたいだろうか？私は自分が経験したことをわかっている。地球上の誰も私から真実を取り払うことはできない；自分で判断する。

フェスティバルは7月5日まで開催されたが、終わりまで滞在する気がしなかった。7月4日に目が覚めると、ここを去るという強い衝動に駆られた。ハーヴェィはアルバカーキから車をレンタルしていたので町を出る方法がなかった。これは試練ではあったが、それほど大きな問題ではない。自分の中で強く去ろうと思っていたので、乗り物の方からやってくるだろうと思っていた。

いつものように私は正しかった：素晴らしいアーティストがアルバカーキに送ってくれると誘ってくれた。ハーベィにそのことを告げると彼はがっかりした。フェスティバルに居る理由は、ハーベィに会うため、一緒に働けるかを確認するためだ。彼は非常に優れた作家だと思ったが、自分の経験を自分で本に書かなければならないと感じた。私の望みはハーベィが私の内面を理解してくれることだ。

アルバカーキへの道のりは長かったが、アーティストと一緒にいて楽しかった。彼はとても優しく面白い男だった。ようやく夕飯の時間になって到着し、私は次の旅程のために車を借りた。その後で一緒に夕飯を食べようとそれぞれの車で運転して行った。素晴らしい会話を交わし夕飯

も美味しかった。これはキャンプ食でない最後の食事だとわかっていた。

夕食後疲れすぎる前にどこかに着きたかったので出発しようと思った。太陽は水平線まで低くなっておりレストランを出ると車まで歩いて行った。何にも制限されない自由を感じた。私はシンリの方角に向かおうと思い、道がどこに向かっているのかを確認した。お互いにさよならを言うと、車にさっと乗り込み次の冒険に向けて準備した。

太陽が落ちるにつれて、とても疲れを感じたが運転し続けた。休む前にシェリキャニオンに到着しなければならないと思った。遅く着いても問題ないだろう。自分を限界まで追い込み、ようやく自分のお気に入りのキャンプ場に朝一人で到着した。疲れきっておりキャンプ場に車を置くとすぐに車の中で眠り込んだ。

フルートの音で目が覚めた。スティーブンソンがまもなくやってきてあいさつした。彼は正しい日に到着したよと言う：スウェットロッジが午後からあるそうだ。スティーブンソンはくすくす笑いながら最初にスウェットロッジを申し込んだ人がその日に延期したいと言ってきた話をした。さらにメディスンマンもスティーブンソンに最初のスケジュールよりも日がずれて遅れるだろうと話したという。彼曰く、彼らは私を待っていたに違いないという。昨日ここに着くまでに起こったことを考えると可笑しかった。もしロズウェルを次の日に去っていたら、最初の計画通りこの機会を逃しただろう。

その日はリラックスして過ごし、前日の夜の眠りを補充した。スティーブンソンがスウェットロッジの石のための火を準備し始めた。彼のところに歩いて行き、手伝いたいと申し出た。彼は喜んだので、私は木をファイアピットまで引っ張り始めた。そのとき女性が近づいてきて同じように手伝い始めた。自分をシャントレと自己紹介した。彼女はどうやって旅行して来たか、フォーコーナーをどうやってキャンプしたかを語った。彼女はスピリチュアルな旅の途中で、私と同じく魂の食べ物を探しているのだとはっきりとわかった。

火がとまり始めると、シャントレと私はテントに戻りスウェットの準備のために着替えをした。ロッジに再び戻ると、去年そこで会ったヨーロッパの男性を見て驚いた。話し始めると、私がとても強いスピリットを持っているに違いないと言う。なぜなら前日までみんなスウェットをするのにふさわしくないと感じていたそうだ。

メディスンマンが到着し、数分間その場の参加者に話をした。彼がスウェットのためにハーブ

を準備しているとき、それが何か質問をした。話したくなければそれを尊重すると伝えた。彼は話してくれただけでなく、それを一部与えてくれ味わってごらんと言う。彼のオープンさに感動し感謝した。彼が歩き過ぎるとスティーブンソンが私はとても特別に違いがないと言った。メディスンマンは彼が質問しても答えないそうだ。それは私にとって大変光栄だった—しかし幾分変だが驚かなかった。

スウェットロッジはフォーコーナー地区の旅を始めるのにちょうど十分なものだった。驚くほどに私を解放してくれ集中するのを助けてくれた。儀式は終わり、各々は伝統的な羊肉の夕飯に集まる前に、支度のためにキャンプ場に戻って行った。

去年の時のように、夕飯の時は特にお互いが心を開いているとわかった。疲れていたがとても素晴らしい経験だった。みんな戻り始める間に、スティーブンソンがやってきてメディスンマンに彼が頼んだ儀式に私も参加するか尋ねた。彼の誘いを光栄に思った。これは本物のナバホ族の儀式だ。返事をしながら他の人たちには尊敬の意味を込めて儀式についてどんな詳細も誰にも言えないだろうと思った。

儀式が始まる前に、テントに素早く戻らなければならなかった。シャントレと歩いて行った。数分間立ち話をした。私について、非常に興味深いことをコメントしてくれた。私のことを何も知らないのに。彼女はスティーブンソンとメディスンマンと私のやりとりに驚いたという。ナバホ族の人々とはっきりとした結びつきをもっている私がうらやましいと言う。

暗闇の中で彼女は言った。「まるで、あなたのことをあるいは何かを認めたようだわ—あなたがここに来るのはまるで決まっていたみたい」その瞬間、彼女は気づいていないとしても自分の魂と良いつながりをもっている人だとわかった。彼女が明日の朝発つ前に話したいと伝えた。お休みを言うとすぐにテントに向かい、ホーガンという伝統的なナバホ族の家に儀式のために行った。

儀式の後でスティーブンソンとメディスンマンと私は深い休まる眠りについた。起きるとシャントレと一緒にコーヒーを飲んだ。彼女が出発したいと言うので電子メールアドレスを交換した。彼女に簡単に話すと私がどこか人と違っていることがわかると言った。キャンプ場を去るまでの残りの日をスティーブンソンと一緒にシンリの周辺を楽しんだ。

次の日アンダーソン家に電話をしコロラドに訪れたいと申し出た。彼らはドゥーランゴの近く

に土地を買ったそうだ。そこは去年出会った場所に近かった。そこで夏にキャンプをする計画を立て、一緒にキャンプをしようと招待してくれた。完璧なタイミングだった。私が着く前に、彼らは先について支度ができるのだった。

朝の早い時間にシンリを去ると、コロラドに午後辺りに着いた。周辺を回りようやくアンダーソン家の土地を見つけた。砂ぼこりの道の方角に曲がり私有地に入ると、心臓が素早く鼓動を始めた。この家族に去年会った後で本を書き始め自分で書いた話を送っていた。出会ったときはエイリアンについて何も話していなかった。そこで彼らは沢山の質問をしてくるだろうと思った。嬉しいと同時に緊張しつつ興奮した。

道路が険しかったので、ゆっくりと車を走らせた。最後の角を曲がるとキャンピングカーの横で立っている彼らを見た。私の知らない女の子も一緒にいた。みんなで見上げると手を振り、私は彼らの横に停車した。

ジェーソンとキャソリンは私と同じくらいに興奮していたようだ。ジェーソンが姪を紹介した。リンネという。彼女は20代前半のように見え、彼らの娘のときのように、彼女もまたこの家族と驚くべきつながりがあるのが見えた。すぐにこれは面白い訪問だとわかった。

次の2～3日間、アンダーソン家に自分の話を共有した。彼らはお返しに一家の哲学とこのコロラドの土地にどうやって導かれたかについて話をしてくれた。土地を買うにあたり、自給自足が最初の理由だった。彼らの究極のゴールは、街の喧騒から離れ、現在住んでいるようなより平和で満たされた人生を送ることだった。ジェーソンとキャソリンとリンネは地球の生徒で、どのようにして足跡を残さないで去れるかを次々と学んでいるそうだ。自家製の石鹸、自然の家、メディカルハーブ—わずかな数個の話題しか話さなかった。ドゥランゴのキャンプ場で出会ったとき、なぜ彼らに惹き付けられたのかははっきりとわかった。もしエイリアンがメッセーを出したいと願うタイプの人を心に描いたらアンダーソン家のような人々だ。

リンネは若く面白い女性で本物のつながりを感じた。彼女は戦士の魂を持っている：強く、決心ができ、集中している。彼女の別な部分は天使のようだ：デリケートで情熱的で愛と共感に満ちている。彼女は常に地球への愛を口にし、それが痛みで満ちて、社会がいかに地球を破壊し始めているのかを語った。彼女は地球の光の存在の一人だ。ここへは人々を平和的な存在になるように導くためにやってきた。リンネのような若い人々と会うのは、人類への希望を与えてくれる。

彼女の強さと私たちが生きるべき道の知恵は彼女の周りの人々にも強さを与えている。

地球と調和して生きること；古い方法を覚えていてそこから学ぶこと；私たちに供給してくれているすばらしいこの場所のすべてに感謝を与えること—今日それを自給自足と呼ぶ。エイリアンから言われた全ての事からこの家族が彼らのガイダンスに従っているのがわかる。彼らが気づいていないとしても。一ひとつの場所に腰を据えること。私が告げられた安全な土地：フォーコーナー地区。

アンダーソン家との時間が過ぎ終わりに近づいていた。心の内側で笑うのを抑えられなかった。とても幸せでコロラドで彼らと会う選択をした。キャソリンに親しみを感じていた。彼女は私の失われた姉妹のような感じで、同様に母親のようでもあった。このことは彼女に黙っていたが、彼女の側にいると安心した。

みんな私がホピのメディスマンに再び会いに行くのを知っていた—問題はそれがいつなのかだ。コロラドで2日間考え、ある朝行く時が来たとわかった。キャサリンが朝食を作ってくれてみんなで私の次の目的地であるホピの居留地について話をした。

ロバートの所に再び行くのは緊張した。この旅はスケジュールされていない訪問であり、そこに私が行く必要はなかった。少なくともエイリアンの視点から見れば。訪問は自分の人間としての感情を沈めるためだった。けれどもそれ以上の確認は必要なかった。ただそこに行きたかった。

ホピの地へ向かう道のりはとても美しかった；レッドロックメサを通り過ぎ、それらが目に入るといつものように深呼吸をした。その地区のフィーリングが大好きだ：まるで家に戻るように感じる。心地良いのだが簡単に説明できないのだ。

コロラドからホピ居留地へ向かうにはシンリを通らなければならない。しかしこの時期スティーブンソンに会いに止まるつもりはなかった。一帰りの道まで待たなければならない。目的地に近づくにつれて到着したらロバートに何と言おうか考えていた。自分の経験をすでに本に書いていて、来年には公にリリースしなければならない。私の目的はロバートに自分の目標を打ち明け、反応を見ることだ。

赤い太陽が地球にお休みを言い始めていた。運転中ロバートのビジョンを見た。彼が家をもうじき出ようとしている所だ。会えないと困るので早く走った。30分後には彼が出かける事がわかっていて。時計を見続けたが、時間が過ぎるにつれて彼に会えないことがわかった。訪問を彼

に伝えていなかったが、もし自分の魂が彼と話したければ、私が着いたとき彼はそこに居る事を信じた。

車をメサに止めると20分過ぎており彼に会えないとわかった。私の希望は少なくとも彼が戻って来ることで旅行に出かけていないことだ。ロバートの家の前に車を止めた。前回のときのよう
に車から出るとすべての目がこちらに向けられていた。

暗闇がせまりロバートの家のドアに近づくと中が暗いのが見えた。とにかくドアに向かった。もしかしたら。ドアは開いていたので頭を軽く中をのぞいて呼んでみた。反応がなかった。

去年は道路を渡ったところにある親戚の家に連れていかれ、朝食をごちそうになった。たぶん彼らならロバートがどこか知っているだろう。その家は子供たちが大騒ぎしていた。ドアを開けノックをする前に中の何人かがすでにドア口に向かって歓迎していた。

「ハロー！」と言った。

私を見るとみんな言った。「ハロー」

「ロバートのいる場所を知ってますか？もしかして町を出ていますか？たぶん20分程で行き違ったと思うのですが」

女性が混乱した顔で「約束していましたか？」と尋ねた

「いいえ。彼と会えなかっただけです。そうですね？」彼らは奇妙な顔でこちらを見た。

「彼はキバに行ったよ」

「わかったわ。また戻って来ます。彼はどれ位そこにいますか？」

答えを知る前に彼らはすでに一人の子供をキバに送り、ロバートに私が来たことを伝えていた。彼らは私の名前さえ聞かなかったと思う。変な女性が彼に会いに来ただけわかっていたはずだ。私は去年ロバートと朝食を頂いたことがあると彼らに話した。何人かがホピ語で話し、ロバートの声が後ろから聞こえた。

「ハロー！ハロー！おいで」ロバートは手を振って一緒に家に戻るように促した。歩いている時ドアの所で彼はくすくす笑って言った。「ここで何をしているんだい？来年まで君が来ると思わなかったよ！」彼がこう言ったので私も内心笑った。これは想定外の訪問なのだ。

満面の笑顔のロバートと座った。「ここで何をしているんだい？」もう一度尋ねた。

彼に「ここに来たのは自分の体験を本にするためです。これをあなたとホピの人々に話したか

ったんです。あなたの許可を得るためではないです。自分の人生について書くのだからあなたの許可はいりません。エイリアンから頼まれたことをやっていて、それに従っているんです」と言っ

った。

「わかった。では私は何ができるのかな？」ロバートはより真面目に尋ねた。

「はっきりとわかりませんーたぶんホピの人々が書くことを受け入れてくれるか知りたいんだと思います。本を書くことをみんなに知らせるために来たんです。」

すると彼は望みどおりのことをしてくれた。「長老達を集めてほしい？それならすぐにできるよ。君の望みがわからないが。たぶん君は一对一で彼らと話してそれぞれが知っていることを確かめたいのか、あるいはグループで話したいのかな。教えてくれないか。」ロバートは私に身を傾けながら言った。

ロバートが私を感じたように感じたのは明らかだった：たぶん、おそらく、私はホピ族にとって重要な人物なのかもしれない。ホピのところにやって来た第二の理由は、土地を再び感じるためだ。エイリアンからもらったオブジェクトを探しに故郷に戻ったとき、この土地について考えたかった。たぶんそれを探す手助けをしてくれると思ったのだ。これらが本当なのか、当時はわからなかったが、それは正しいと感じていた。それはとても重要なことだった。自分の魂に従っていた。あなたの魂に従うことを学ぶことーこれはこの生での鍵なのだ。

「今は彼らに会う必要はないです。まだ早いと思います。」ロバートに伝えた。なぜこの言葉と言ったのか理由はわからない。時々自分から来たものでない言葉が頭の中に形成され話すことがある。自分の魂からやってくる言葉だ。長老達と本当は話をしたかったが、エイリアンはそれを喜ばないのではないかとわかっていた。

「ここにどれ位いるんですか？再び出発するんですか？」ロバートが聞いた。去年は儀式の後の祝宴に私も出てほしいと彼は思っていたが、それはできないとわかっていた。私も泊まりたいが、みんなに会う時ではないと思う。今回は。そう言った。できるだけ長くいるようにします。私は沢山時間があり、急いではないんです。彼は家にいてもいいと言った；喜んで彼のもてなしを受け入れた。

ロバートの出現で贈り物をもらったように感じていた。彼はその夜はキバで他のホピの人々と儀式をやっている最中だった。彼は私が家に泊まってもいいから、彼はキバに戻るとい

戻った後、最後に会った時から起こった出来事について数時間話をした。私は故郷に戻ったことと、エイリアンが子供の頃私にくれたオブジェクトを探し始めた話をした。

次の数日間、ロバートと私はほとんどエイリアンについて話していた。しかし全てではなかった。私は自分の家に戻ったような気がした。毎朝彼の親戚の家に朝食を食べに行った。そこで私が何をしているのか、みんなが疑問に思っているのは確かだ。特に家に泊まらせてくれている。次の夜、ロバートはハイウェイの近くのレストランと一緒に食事をしたいか尋ねた。いつものようにあまりお金がなかったのでコストを下げるためにキャンプ食ばかり食べていた。そのため彼の提案に感謝した。

私の車に乗り込んでレストランに行こうとすると、ホピの女性が隣からロバートに向かってホピ語で叫んだ。彼らは私について話をしているのは確かだった。私の方を見てお互いを見合っていたからだ。ロバートは笑いながら車に乗った。ロバートが走り出したとき、彼女が何を言ったのかを聞いた。「彼女は君を遠ざけるように言ったんだ。君は良くないっていうんだよ。夕飯を作ってくれないからー君が夕飯に連れて行かなければならないって言うのさ。」笑いながらこう言った。

「彼女に何と話したの？」笑顔で尋ねた。

「君が夕飯に連れて行くのではないと言ったんだ。僕が連れて行くんだってね。」彼は応えた。「そうだ。みんな話してたよ。全員がね。タベキバに戻る前にすでに質問が始まったよ」またくすくす笑いながら話した。

「彼らに私がここで何をしてるって言ったの？」と聞いた。

「君はただ話をしに來ただけさと言ったんだーそこで彼らの注意を惹いてしまったんだ！」ロバートが返答した。

「みんな君となんの用事があるのかしつこく聞いていたよ。」

「君なら何て答えるかい？」と彼は言った。

「まあ、同じことを言うでしょうね。あなたと話すためだけに來たって。」

お互いに笑った。二人で全てのことを秘密にしていたので、みんながおかしいと思っているのだ。そう結論づけた。いつかは自由に話せるに違いない。そう思った。そうしたかったがまだそれにふさわしい時ではなかった。私にとってホピにとってそしてエイリアンにとってもーいつに

なるかわからないが私は待たなければならなかった。

メサで2晩過ごした後で、旅に戻る時期が来たと思った。もっと留まって居たかったがその必要が無くなってしまった。目的は果たしていたから、次に進まなければならない。ロバートと私は最後の数分間に会話をし、私が戻る日のことを話した。次に戻って来る時には泊まるだろう。もっと重要なことは、エイリアンのことについて聞きたいと思う人にわかち合うだろう。彼はそれを喜んでいるように思えた。別れのあいさつをする前に、最後の瞬間を静かに座り分かち合った。

メサを出発する時、最後にもう一度バックミラー越しにロバートを見た。ホピ居留地への旅は前回の時よりも穏やかだった。自分の精神と体が魂と一緒に始め、調和を始めるのを感じていた。隠すことは何もない。待つ必要もない一時間は手元にある。

すぐに次の旅のことに思いを馳せた。家に戻る前にまだ数日残っていたのでリラックスできる機会があった。フォーコーナー地区で残された時間は気楽に過ごせるだろうと思った。最後にキャニオン・デ・シェリに止まり、コロラドに戻る前にスティーブソンに会いに行こうと決めた。最後の日をアンダーソン家の土地でキャンプをしながら過ごそうと思った。

キャニオンからコロラドへの運転はのんびりしていて、いつものように美しかった。これまで何度も自分の道に導かれ、同じ道路を通過した。数え切れない程、レッドロックメサを通っただろう。青い空に大胆なサビ色は壮観だった。それを見る度、最初の時のように見つめた。

まるで時間の流れに乗っていないかのように感じていた。ゆっくりと運転し、眺めを見ていた。アリゾナ／ニューメキシコの越境の近くで車を止めて休んだ。ふいにやって来た場所だが素晴らしい場所だった。見渡す限り建物が一つもなくロケーションの寂しさを感じたかった。昼下がり
の太陽の中で荒涼とした砂漠の土地に落ち葉が散らばっている。車から出ると脇に立った。

ロバートと過ごした数日間の出来事を回想した。かつてこの不思議な砂漠の宇宙に住んだことがあるのだろうか。荒涼とした眺めでも地球のエネルギーを感じられる。耳にささやく歌のように一緒に調和を歌うようにと誘っている。たとえスピリチュアルな人でなくてもこの地区を旅する人々は地球が砂漠の中に留まるように促しているのを感じるに違いない。人がそれを自分で経験するまでは、魂の十分な効果を本当に伝えることはできない。

ちょうど時間が来たので旅に戻ろうとした時、近い距離で車の右側に何か2つやって来るの

が見えた。スターオーブが浮かんで過ぎようとしていた。「ハロー！」それに言うと、笑った。頭を傾げながら彼らにまた会えるなんて何て幸運なのだろうと思った。数秒で彼らは消えたのでアンダーソン家に会いに出かけた。

コロラドに戻るとアンダーソン家がちょうど夕飯の時間だった。彼らは私にとっても優しくしてくれてとても恵まれていると感じた。この旅の間ずっと多くの人が無料のキャンプ場と食べ物を提供してくれた。私はものすごく嬉しくて全てに感謝した。夕飯の時間にホピの長老を訪れた時の話をした。

リンネ、キャサリンとジェーソンは私が戻ってきてホピの話をしたのをとても喜んだ。前回の訪問ほどには興奮したのではないと説明した。もっと穏やかでもっと集中した旅だった。ホピの男性が、私が話せるようにと他の長老達を集めてくれようとしたが、私が断った話をした。当時は彼らに話せることがあまりなかったからだ。

眠る前の夜遅くに、次の日メサ・ベルデに行く計画を立てた。古代のアナサジ遺跡をもう一度見ることができるので楽しみだった。ハロルドのことを考え始めた。2年前にどうやって彼と出会ったか。眠りにつく時その瞬間のことが感じられた。その出来事が私の人生をいかにして形成したか、1988年にエイリアンが与えた情報を確認させてくれたかなどについて考えた。

目を開けると太陽があり朝の暖かさがあつた。眠った気がしなかった。瞬きしている間に新しい日のために目が覚めた。アンダーソン家はみんなテントの外に出て既に朝食を作っていた。外に出ると暖かい笑顔で歓迎され、挽きたてのコーヒーの匂いがした。

コーヒーと簡単な朝食の後で、みんな私のレンタカーに飛び乗り、メサベルダに出発した。ハイウェイはキャンプ場から近かった。ハイウェイから遠い道に沿ってはげ鷲が旋回しているのを見た。これは良い前兆だとみんなが思った。目撃したことに驚きはしなかった。バンクーバーのバス停で日中にスターオーブを見かけたが、その前にハゲワシを見たことを思い出していた。

メサ・ベルデに着く前までハゲ鷲を見かけたことについて興奮しながら話し続けていた。山の曲がった道を運転しながら、最後に訪問した時から変化が起こっていたことに驚いていた。草むらはより成長し去年よりも緑が増しているように見えた。熱によって死んだ彫像のような木々は少なくなっているようだ。

観光センターに着く前の最後の角を曲がると窓の左側を見た。2度見た。車からそう遠くない

100フィート位の所に2つのスターオーブが逆方向に進んでいた。あまりに信じられなくて首を振った。何かの閃光を見ているのだろうと思った。目を広げてオーブをもっとよく見ようとした。

3回目に目撃したとき、前部座席に座っているジェーソンに窓の外のを左を見るように伝えた。オーブを彼に指差そうとした。残念なことに遅すぎて遠くに行ってしまったので見ることはできなかった。ジェーソンが見れなかったことを悲しく思ったが、また彼のために現れるかもしれないと思った。

次の数分間で観光案内所に着いた。ジェーソンと私は外に立ち、ツアーチケットを買おうと並んでいた。シップロック岩が遠くにあり、やさしい紫のもやで覆われていてミステリアスな気配を漂わせていた。しばらく眺めながらスターオーブのことを考えていた。突然遠くに同じ方向から別のオーブがやって来ているのが見えた！目を疑った！瞬きするとしばらく消えていたが、再び目撃した。

もしジェーソンや他の人に見せるならすぐに知らせなければならない。ジェーソンを腕でつかむと、オーブの方向を向かせた。とても離れた場所にあったので、目で追うのは難しかった。赤い砂漠の土と、遅い朝の明るい日差しの中に混じっている。「見て」ジェーソンに指差しながら言った。「別のオーブがあるわよ。見える？消えかけてるけど！」彼は熱心に目で空を探した。ジェーソンの近くに立ち、腕と指でオーブを示そうとしたが、残念にも彼は見ることはできなかった。私にもほとんど見えにくくなっていたので仕方がないと思った。

リンネ、サバンナ、キャサリンは私たちの近くに立ち止まった。手を振りながら他のオーブを見たので、ジェーソンに指差していたことを告げた。彼を助けることはできなかったが、意図的にジェーソンが彼らを見る機会が設定されてたように感じた。

アンダーソン家が山と過去の魂を楽しんだことが嬉しかった。土の上を歩くのは光栄だった。古代遺跡で空を見て地球に触れていると、神秘の力の強い感情を感じられた。

日はすぐに過ぎ、キャンプに戻る時間となった。戻るとみんな料理など夜の準備に忙しかった。

バンクーバーに戻ったら、数週間は後始末をして、クランブルックに引っ越して年老いた母の世話をしなければならない。姉は私が故郷に戻るチケットを払ってくれることになっている。ジャンスに伝言を残し、クランブルック行きの飛行機のチケットを買う最終決定をする前に連絡を

待っていると伝えた。夕食の準備を待つ間、ジェーソンの電話を借りてジャニスに電話をした。短い電話だったが、彼女はすでにチケットを買ったというのでがっかりし、彼女にまた折り返し電話をすると告げた。会話が数分以上かかるとわかっていたので、一番近い公衆電話に行ってアンダーソン家に迷惑をかけず、自分で電話代を払おうと思った。

20分後ガス給油場に行き、電話でジャニスと話をした。飛行機のチケットのことで数分間議論した。チケットは予約しており、既に支払いも済ませてあったのでどうしようもないということが理解できた。変更はできないが、彼女がチケットを払ってくれたことには感謝をしなければならない。

アンダーソン家のキャンプ場に戻る運転の間、まだ落ち込んでいた。突然ラジオから歌が流れてきた。「なぜそんなに悲しいの？キャサリンと一緒にいれば安心よ。目を閉じて頭を彼女の膝に置いてごらん。彼女が慰めてくれるわよ。悲しまないで—水平線に見えるでしょう。船は遠く離れてそこにあり、あなたを今迎えに行くところよ。故郷が恋しいことを知っているわ；私たちもあなたが恋しい。地平線に見える船があなたを家に連れて行くわ。悲しまないで。西を見て。船がそこからやって来てあなたを家に連れて行く。船を見てごらん。—それらは銀色よ」

それは女性の声だった；バックに音楽はなかった。ロックステーションにしてはおかしい。そう思った。何が起こったのだろう？歌が終わるとラジオでハードロックが流れた。結論を急ぎたくはないが、歌はメッセージ一種なのではないかと思わずにはいられなかった。通常のラジオやテレビから来るメッセージとは異なり初めての体験だった。頭の中で歌について思いを巡らす時、聞こえた歌に意味のある説明が見つからない。エイリアンを除いては。これは非常に不気味だった！

キャンプ場に戻ると、今聞いた歌についてアンダーソン家に話をした。みんなそれは普通でないと考えたが、同時にみんな私が歌の詩を覚えていることに驚いていた。できない理由がないのだ。はっきりとその歌は通常のラジオ局の音楽の文脈に沿っていないので、特に注意を払っていたのだ。曲がないだけでなく、詩も普通ではなかった。注意を惹いた理由は完全に場違いだったのだ。まるでベッドルームのドレッサーの引き出しから、バターの塊を見つけたような感じだった。

フォーコーナー地区の最後の夜をこれほど素晴らしい人々と過ごせたことはとても嬉しかった。

た。最後の晚餐は、過去3週間を回想しながら過ごした。この旅は私にとって変換点だった。戻ったら本を書くことがわかっていて。時が来ればたどって来た道が明らかになるだろう。

次の朝荷造りをして車に乗せた。ここを発ってアルバカーキに戻り家に帰る飛行機に乗らなければならない。受け入れがたい事だ。結局私は既に家にいるように感じていたのだ。とてもつらい朝だった。さよならを言う前にできるだけ長居した。キャサリン、ジェーソン、サバンナ、リンネに大きなハグをして、泣きながらさよならを告げた。とてもつらかったが車に乗って、場を避けるために急いで去ったのだった。

運転する間みんなが別れの手を振るのを最後にミラーで見た。また戻ってくるわ。自分に言い聞かせていた。別の日に別の年に。

アルバカーキへの運転は退屈で、家に帰る飛行機はなおさらだった。飛行機がバンクーバーに降りると、すぐ先のことに集中した。すぐに仕事のことが思い浮かんだ。クランブルックに戻る前にお金を作りたかった。数週間しかなかったので、後始末をした。結局クランブルックに着いたときはどれくらいの間そこに留まるのかわからなかった。

探求のはじまり

バンクーバーには着いたばかりだが、すぐにクランブルックに行く飛行機に乗っていた。ジャニスが空港で出迎えてくれて母の家に連れて行った。2005年の8月1日のことだ。クランブルックを去ってあと1ヶ月で20年が過ぎようとしていた。この時期に再び故郷に戻るのとは奇妙な感じだった。

空港から家までの道で、周辺を取り巻く美しい山々を見る機会に恵まれた。子供の頃からそれらを見るのが好きだった。若い頃からクランブルックに戻る度に山は私の心を捉えた。若い頃から日常夢を見ては、山に住む動物や山の頂上が美しい野草や草原で満たされている姿を想像していた。

道路に車を止めると、母が窓から見えた。彼女はすでに笑顔で再会するのを待っていた。家の玄関に向かって歩きながら、人生の方向がシフトしたのを感じた。これは新しい始まりで、エイリアンのリクエストに応えるための選択の一つだった。

母は私が家に戻って一緒に住むのがとても嬉しそうだった。階段を上ると部屋の灯りがともり、母に大きなハグとキスをした。私の到着に喜びに溢れていて、クランブルックの最初のステップが良いものとなった。

目標ははっきりしていた。優先順位は母の世話をすること。同じくらい重要なのが、子供の頃にエイリアンがくれたオブジェクトを探すことだ。体験談も本に書かなければならなかった。最終的にコミュニティカレッジで勉強し、仕事を探そうと思っていた。

これらの目標をジャニスに話した。驚いたことにどこにオブジェクトを埋めたかについてある考えを持っていた。教わった内容は私の記憶と同じだった。ジャニスに贈り物を見せた後、それを古い白い布で包んで土に埋めた。彼女にそれを触らないように言い、2人で父が見つけてないことを確認しなければならなかった。そこで穴に埋めて岩と土で隠した。埋める時姉と一緒にいたことを覚えているが、彼女が覚えているとは思わなかった。彼女は白い布のことや父から隠したことも覚えていたので驚いた。彼女に場所を尋ねると、位置を私に教えてくれたー彼女の記憶は私とまったく同じだった。

ジャニスとオブジェクトについて話をするのは始めてだった。彼女の情報をインプット

するのは重要で、私のモチベーションは高まった。しかしまだ少し問題があった。ジャニスはオブジェクトを動かしたあいまいな記憶があったのだ。それを聞いた瞬間私のハートは沈んだ：もし彼女が動かしていたら、どうやってそれを見つけられようか？最初に浮かんだのは記憶回復のための退行催眠だったが、彼女にそんなことを頼まなかった。それはパンドラの箱を開けるようなものだ—一度空けたら決して閉じられないだろう。

ジャニスからもっと情報を引き出さない限り、オブジェクトを掘るのに意味はなかった。そのため私は忍耐強く待った。答えは時間が経てばわかるに違いない一週間後ジャニスが話をしにやってきた。退行催眠を受ければどこに動かしたかを思い出せるかもしれないと思っていた。私の影響ではなく彼女が自分で選択をしたことがとても幸いだった。今私がしなければならないことは、そのような繊細な情報を見つけられる信頼できる良いヒプノセラピストを探すことだった。これは小さい町では難しいだろうと思った。

次の週はジャニスに退行催眠ができる人物を探すことに集中した。少なくとも1日2回は瞑想し宇宙からその情報を得ようとした。正しい人を私の人生にもたらすためだ。週の終わりが近づくと私の努力は実った。不思議な状況である女性と話していた。15年前バンクーバーで少し話したことがある人物だった。会話の中で彼女がヘレンというヒプノセラピーをするカウンセラーの名前が出てきた。彼女が名前を挙げた時点で彼女がジャニスを助けられる正しい人だとわかった。彼女を紹介された状況に驚いた。ヒプノセラピストのリクエストが返って来たことだと知っていた。いまや私がしなければならないことは、本当にその仕事をする正しい人物であるかどうかを彼女に会ってたしかめることだった。

その日の午後家にまっすぐ帰りヘレンと後日会う予約をした。私はとても興奮した。子供の頃に埋めたオブジェクトにひとつ近づくステップをもたらしてくれると思った。—可能性のある運命にひとつ近づいたのだ。

ヘレンに目を注いだ瞬間から彼女といることが心地よく感じた。しかし彼女と話して直感が正しいかどうか確認しなければならなかった。居間に座り長い会話をしヒプノが必要な理由について話をした。エイリアンと私の家族との関係についても話をした。彼女はとてもオープンで全ての話を受け入れてくれた。ヘレンはジャニスがオブジェクトをどこにおいたかを思い出すセッションをすることを興奮気味に同意してくれた。

ヘレンはジャニスと私にエイリアンとの遭遇が起こった日のできる限り正確な日付を特定して欲しいと言った。正確な日がわかればヘレンを助けることになり、退行催眠の間導く質問をしなくても済むという。ヘレンがジャニスを質問して導かないことを頼んでいた。質問することについてよく考える必要があった。

ジャニスと私は正確な日付を思い出せなかったが、私がおそらく4～5歳であったとわかっていて。つまりそれは1970年か1971年に起こったことになる。どうやって思い出そうかと二人で考えた。忍耐強く待ち運命が導けば、情報がきっと私にもたらされるだろうと思った。

とにかく退行催眠のセッション日が来るまで数週間は待たなければならなかった。その間、子供の頃のアブダクションがおこった正確な日付をつかむのに集中した。ジャニスと時期について話し合い初秋か春と決めた。農地には野菜がなかったのも、時期が正確なのは知っていた。年を決めることについては重要な問題で、二人ともより詳しいことを思い出すことに集中しようと話し合った。ヘレンと話した数日後、キャサリンと一緒にジェームズ・ジョンソンというギリアン人の両親に会いに行った。ギリアン人は子供の頃の友達で、12歳のとき私は彼らと1年間一緒に住んだ。両親の家での生活はとても困難だった。彼らが両手を広げて家に連れて行ってくれたことが、非常に嬉しかった。彼らは私にとって第二の家族のような人達だ。

クランブルックに戻ってから、キャサリンとジェームズ家に数回訪れた。彼らがまだハートに私の居場所をとっておいてくれたのはナイスサプライズだった。私が故郷に戻って成し遂げたいことのひとつが、古い知り合いにエイリアンに関する自分の体験を伝えることだった。それは難しいことだとわかっていた。自分を奇妙な人と馬鹿にされる場所に身を置こうとしている。しかし私はその道を進まなければならない。

ジョンソンの家に向かう途中、エイリアンとの交流を話す決心をした。彼らに対して正直になりたかった。彼らの反応に対する心の準備をした。

みんなで近況を報告しあった後に自分の話を告げるときが来たと感じた。最初に話し終わってから質問して欲しいと告げた。そうしないと終わりに到達しないからだ。

話し始めるとすぐ彼らはさえぎり、私を信じると言った！リラックスできたので、すべ

てを話したくなった。短い時間で核心に触れることができた。エイリアンの交流のハイライトを2時間で話し終えると、キャサリンが私を驚かせた。

私がまだ若い頃、ジョンソン家族は私の家から道を下ったところに住んでいた。地域はとても小さくて、その地区の家族の多くを覚えていた。キャサリンはある住人がU F Oが私の家の前の畑に浮かんでいたとみんなに話していたのを覚えていると言い始めた。明らかに彼はU F Oを目撃した年に話している。しかし彼はアルコール依存症だったので、誰も彼の話を聞かなかったようだ。みんな彼が幻想を見ていると思っていた。キャサリンがこの話をしたとき、何年だったか記憶しているかと質問した。しばらく考えたあとで、記憶の限りでは1970年ではないかと語った。

キャサリンにU F O話を聞いたあとで体にセンセーションが走った。4歳か5歳かははっきりしていなかった。しかしついに他の人が私の年齢を確認してくれた。私はとても嬉しくて、新しい情報を興奮気味にキャサリンやジェームスと分かち合った。彼らにこの情報は子供時代にエイリアンと遭遇した日を特定するのに必要で探していたものだと言えた。ジャニスと私が特定の夜についていかに鮮明に覚えていたのか明らかであり、驚くべきことだった。私たちの記憶は特定できるもので、36年後になってあの運命の夜の出来事に関する証拠を補足しているのだ。エイリアンと遭遇したのは私が4歳の時だったのがこれではっきりとした。これがあればジャニスの記憶を回復のためにヘレンはより良いガイドができるだろう。

私の話を最後まで聞き終えると、キャサリンとジェームスは彼がU F Oとエイリアンについての彼らの見方と存在を信じることを打ち明けてくれた。彼らのオープンさと私を受け入れてくれたことに対してとても感動した。彼らは私にとって重要な人々だからだ。彼らをととても尊敬し、子供の時からしてくれたことの全てに感謝している。もし彼らが私がおかしいと考えていたら、とても悲しくなっただろう。今は自分自身でいられるように感じ、何も隠さず人生を共有していると感じられた。

エイリアンについて数時間話した後、戻る時間になった。ジョンソン家を去るとき、キャサリンとジェームスにハグをした。私を受け入れてくれたこと、特にエイリアンの話も受け入れてくれたことがいかに私にとって重要で意味のあることだったかを伝えた。興奮

すると共にほっとしていた。:オブジェクトを探す為に必要なパズルのピースをひとつ手に入れたことに興奮し、受け入れられたことに安心した。

次の日、ジャニスに電話してジョンソン家での会話の内容を話した。子供の時に夜の農場で起こった事について話し合った。二人ともその夜はまるですべての生き物がいなくなつたかのように、周りの世界が眠っているようだったのを覚えている。なのになぜその男性はU F Oを見たのだろうか？ 唯一の論理的な結論は、彼がすごく酔っ払っていたので、その当時エイリアンが彼を眠らせることが出来なかったのではないかということだった。ジャニスはアブダクションが起こった年を思い出したことを喜んだ。今こそヘレンに電話してヒプノセラピーのセッションを予約できる事になった。

ヘレンに電話したとき、少なくとも後2週間は待たなければならないといわれた。36年待った後で数ヶ月なんて？ 急ぐ必要など無かった。掘り出すまで後1ヶ月はかからないだろう。初秋の時期だったが土地はもっと柔らかくなっている必要がある。つまり春まで待たなければ探せない。ただ待つことしかできなかった。

一週間後のある午後にジャニスが電話をしてきた。共通の友人のケリーが前の年に愛する人を失くしていたのだが、ある場所で彼の灰を撒くので一緒に来ないかと誘われたという。去年私は彼女のパートナーからメッセージを受け取って彼女に伝えていた。このため彼女は儀式に参加して欲しいと私を誘ったのだった。

1時間後にジャニスが迎えにやってきた。ケリーと妹のヨランダも一緒だった。4人は車で町を出てハイウェイにいた。その夜の暗さはぞくぞくする感じで、実際にそうだった。私は窓の外のトラックを見ていた。いつものように星を眺めながら世界にあいさつした。突然やって来て誰も周りにいないから、彼らにとってジャニスの前に姿を現す完璧な機会になるわね。と思った。文明を後にして田舎に向かう間ずっとこのことばかり考えていた。

ジャニスがあなた達と再び会えるいい機会だわ。私たちは儀式に行く所だから遮っては駄目だけど、あなた達が姿を現したらいいのに。残りの道をドライブする中、マントラのように唱え続けていた。

一時間半後ようやく目的地に到着した。トラックは川岸に止まり、みんな車外に出た。私は上を見渡した。周辺の山々や丘が見えたが、とても暗かった。星は今こそ空で力いっ

ばい輝き、夜の空にきらきらしているのを見ると本当に美しかった。

ケリーはトラックをすばやく降り川沿いを歩いた。ひどく泣いているので、みんな彼女をそっとしておいた。私はジャニスに言った。「もし彼らを見ても驚かないで！あなたが怖がらなければ、彼らはもしかしたら姿を現すかもしれないわ。」

5分も経たない頃ヨランダが怖がり始めた。「神様！見てU F Oがいる！」彼女は私たちの方を向いて、空を横切るオーブを差した。ジャニスと私は見つめあい、笑いながら肩を揺らした。

頭の中で感謝しつつ叫んだ。「一分間止まってくれない？あるいは速度を落として姿を見せてくれない？」こう話したとき、彼らは速度を落としたが動き続けた。ヨランダは見たものが信じられなかった。星のオーブは光のボールのような姿で空の低い位置にいて、こちらに向かってやってきた。まったく音もしなかった。ヨランダは私たちも見えているかを尋ね続けた。私とジャニスが彼女のように上下にジャンプしていないのが不思議そうだった。彼女はオーブが私の要請に答えてゆっくり進んだ事について考え込んでいた。

ジャニスと私はヨランダにそれが見えているが怖くないと伝えた。すごく普通にふるまっていた。次の瞬間ケリーの泣き声が聞こえたので、U F Oの話をやめて皆で彼女の元に行くべきだと判断した。私は再び姿を現してくれた彼らに感謝をした。エイリアンが証拠を送ってくれたことが嬉しくて、再び現れるかもしれないと空を見続けていた。この儀式はとても聖なるものだから邪魔しないでと頭の中で繰り返していた。そこにいる目的を彼らが邪魔してはいけないのだ。

ケリーは水の中で愛する人のことを泣きながら話している間、3人は川岸に立っていた。彼女は灰を川に撒いた；この時みんな泣いていた。ケリーが岸に歩き戻ってくると、私たちは彼女に向かって話しかけた。みんなで手をつなぎ輪になった。4人は暗闇に立ちお辞儀をするとそれぞれが別れの言葉を告げた。私は目をあげ空を見上げた。そのとき2つの光の玉が向かってくるのが見えた。オーブが2つ増えていた。頭の中で素早くはっきりと厳しい言葉で言った。戻らなければならない。この儀式をさえぎってはいけない。これは私たちにとってとても聖なるもので、この瞬間に来るべきではないわ！一番遠いひとつのオーブが暗くなり、一番近いのは止まり、来た方向に戻り始めた。彼らが去ってくれたこ

とに頭の中で感謝し意識をグループに戻した。

話し終わるとトラックまで戻った。とても寒く時間も遅くなってきた。戻る前にトイレに行こうとトラックの後ろで用事を済ませた。その時空を見た。円盤で飛んできてと素早く頼んだ。誰も周りにいなかったの、彼らを見たかった。こんなに遠い場所に来るのはいつになるかわからない。立ち上がりながら頭上を見た。「ワーオ！」そう叫んだ。左側の山から別の山の端っこまで、大きいオレンジの光が走っていた。すごく早くて広がったので、とても驚いた。少なくとも100フィートの幅はあった。流星群の筈がなかった。あまりに低く大きすぎた。端から端まで音もなく過ぎ去った：流星の通り方でなかった。彼らが私の前にあらわれてくれたことに対して、恵まれていると感じ再び感謝した。

トラックの所に行くと、ジャニス、ケリー、ヨランダが話していた。彼らに光の筋を見たか尋ねると、誰も見ていないと言った。あまりにも静かで、まばたきの間の出来事だったので驚かなかった。しかしまた何も見ていないことに対して悲しかった。しばらくして、みんなでトラックに乗り町に戻った。

次の日ジャニスとヘレンとの予約日が近くなったがまだ退行催眠を受けても大丈夫か確認した。彼女は心の準備はできていると言い、もしUFOに関して何かが見えれば、もっと安心できるだろうと思っていた。

日々は流れるように過ぎ、ジャニスが退行催眠を受ける日があつという間にやってきた。2人でヘレンのところに行くと、彼女はジャニスと2人だけで話したいという。2人が部屋から出てきた時、2人とも私が他の部屋で待っているのがベストだと感じたそう。1時間のセッションが終わるとジャニスが部屋から出てきたが、何の情報も得られなかったと打ち明けた。助けになるような記憶は戻らなかった。一日で答えが得られなかったことは驚きには値しない。

さらに2回のセッション後ジャニスとヘレンがついにヒプノルームから喜びながら特定の情報を持って出てきた。ヘレンは記憶が回復したことについて特に喜んでた。私は部屋に導かれ偉大なる謎の答えに備えて座った。

ジャニスとヘレンは、オブジェクトを完全に動かしていたと言う。ジャニスは私が埋めた場所から友人に見せるために動かしたことを思い出した。ジャニスはそれを子供時代の

友人の所に持っていった。オブジェクトを返してもらおうと、ジャニスは最初に置いた場所から1フィート以内にもう一度埋めた。彼女が唯一変えたのは、最初の時よりさらに深く埋めたことだ。これはいいニュースだった。；3人とも喜んだ。今私がすべきことは、春までまって探すだけだ。

オブジェクトがどこにあるのかわかってとても嬉しかった。掘るのが待ち遠しかった。ジャニスにその場所に一緒に来るように尋ねた。そうすればその場所のことは覚えているからだ。現場に到着して場所を見た瞬間に心臓が沈んだ。目の前にある土地は子供の時とまったく様子が変わっていた。思ったよりずっと難しい仕事なのは明らかだった。ジャニスと私は周辺を歩き回り正確な場所を探ろうとした。地形は子供の頃とまったく変わっていた。かつてあった建物は無くなっていてブルドーザーが土を押し上げていた。大丈夫だと自分に言い聞かせ続けた。きっと見つかるわ。エイリアンからの贈り物を見つけ出せなければ、私の人生におこった道はいったい何だというのか？

ジャニスと私は局何かを埋め、それを見つけ出そうとしたことは確かだと思った。私がすべきことは決心することだ。そうすれば、もしかしたら奇跡が起こるかもしれない！

2005年の年末になると、新年の春になり土地が柔らかくなるのを待った。同時に私は本に集中した。そうすればエイリアンのオブジェクトを見つけた時、何が起きても準備ができるだろうと思った。

2006

2006年になると、エイリアンの贈り物を探すために土地を掘る日が近づいてきたと思いはじめた。状況が揃い探し物を見つけ出せるのは時間の問題だと思われた。

何度かオブジェクトを探しに行った。その中の数日はジャニスと一緒に来て2人で探した。不運にもその年は結果なしに過ぎた—しかし私は辞めなかった。

2006年は私にとって障害のある年だった。その土地で過ごす時間もなかなかとれなかった。まだ早すぎるというサインだと思った。

再び引き返し待つ必要があった—正しい時がきて再び動き出すときを待たなければならない。同時に本にも集中しながら心を開いてエイリアンにガイドを頼み続けた。それが必

要であれば。

私の記憶は正しかったとあらゆることが告げていた：ジャニス、父、ホピ、キャソリン、ハロルドや他の多くの者。彼らには決して背を向けられない。それは私にとっては不可能だった。どれだけ時間がかかろうとも自分の仕事を続けるだろう。ケアテイカーとして知られるエイリアンに対する奉仕を。オブジェクトも探し続けるだろう。自分が経験したすべての真実は完結するだろう。

パズルピース（目的）

1988年にエイリアンと遭遇した時、直接頼まれてこの本を書いている。彼らは何者で世界に対するメッセージが何なのかを人を教えるように頼まれた。多くの理由でこの仕事を始めるのに長い時間がかかり本を書き始めようと思う度に正しいと感じられなかった。

この本を書くにあたりこのスタイルを選択した理由は－あわててストレートにメッセージを伝えるのではなく、自分に起こった出来事を羅列して書いていること－単純だ。読者であるあなたがエイリアンのメッセージを聞き始めるためには、少なくともUFOとエイリアンの存在を受け入れてもらわなければならない。エイリアンの存在が前提で、少なくとも頭の中で存在する可能性を持っていなければならない。そうでなければ、メッセージが読者であるあなたにインパクトを残さないのだ。

私の人生で起こったエイリアンに関連する幾つかの出来事をあなたに伝えようと試みた。私の目的は自分の感覚を研ぎ澄ませて形作った瞬間をあなたに示すことだ。自分の世界を垣間見せて分かち合おうとした；私が書いた出来事は全て本当であり完全に真実だ。時々おこる小さな出来事が自分の人生を変えてしまったことを伝えようとしている。どうしてなぜ私がこの結論に達したのか。自分の話を組み立てて説明しようとした。

もしあなたが自己の探求をし始めるとき馬鹿げたことだと否定しないで欲しい。もし何か为正しくないと感じられればそれらを信じないで欲しい。自分の直感を聞いて、それに従いより、多くの情報を調べて欲しい。メインストリームにできるだけ近づき維持して欲しい。そうすればより継続して正確さが得られるだろう。

読んだことをすべて信じないことだ。中にはUFOとエイリアンを使って興味を惹き付け、人生に安心をもってこようとしている人もいる。UFO学は社会のようなものだ：全ての人生の歩みを含んでいる－合理的で信じられるものから精神的に不安定なものまで。より話が馬鹿げていれば信用性も失う。自分自身で答えを探し始めたらより単純な答えを求めよう。

この惑星には多くの人々が違うタイプのエイリアンとコンタクトを取っていると主張している。それについてはUFOコミュニティの中で多くの会話がなされている。違うエイ

リアンの種類について情報が集まるにつれ、混乱しかつうとうしくなっている。この混乱に負けてあなたが真実を見出すのをくじけないで欲しい。誇張があったり間違っていたり馬鹿げたものもあるが、本物で誠実な答えを見出すこともできるのだ。イエスキリストの誕生の前から世界中でアブダクションや目撃情報はあり、それを裏付ける証拠も見つけることは可能だ。

私が遭遇した存在は、身長が7～8フィートあり金髪で青い目の存在だ。彼らはよく金髪あるいは長身金髪として言及されている。この本は彼らについて書いておりメッセージも彼らからやってきたものだ。UFOコミュニティでは彼らは多くの名前をもっているが、どんなラベルをつけようともすでに書かれている彼らに関する情報は限定的であるように私には思われる。あるタイプや他のエイリアンに関して情報を提示されたが賛成できないものもある。彼らにラベル付けはしないようにしている。

過去から現在まで彼らから与えられた情報は、平和、愛およびバランスだ。私の全存在をかけてこれらのエイリアンは心から人類に最高の関心を抱いていると信じている。彼らは決して他の人を傷つけるようなことを私にしろと頼んでいない。彼らが指示を与えたのは、エイリアンについてみんなに知らせることと地球と地上に存在するものをすべて尊重することだ。彼らは土地の法則とそれらの人に従うことを指示している。彼らのメッセージは決して世界を軽視することではなく；むしろ尊重し調和を持って生きることだ。

あなたに話したことはすべて自分の経験からきたものであり、彼らから直接伝えられた知識だ。他のソースから学んだものを自分のものとして情報を伝えることは決してしていない。

この本をなぜ別な時間でなく今書いているのか。世界は大きな変化の間際にきており、準備する時がきたからだ。もはや時間にも無駄にはできない。私たちは地球にネガティブな方法で影響を与えており地球は私たちを振り落とそうとしている。エイリアンが私に与えた預言的なメッセージは、他の人に伝えられたのと同様世界に共有することが今こそふさわしい。終わりのサインは近づき見え始めている：気候の変化、せわしない世界、他者に無関心な人々と地球と切れてしまっていること。

最近まで警告やエイリアンのメッセージは少しも受け入れてはもらえなかった。私の前

に多くの人々が現れてエイリアンの存在を教育して来た。彼らの仕事により私や私のような人間が彼らの基礎の上に建設しようとしている。もし私が今よりも前にこの話をしたならば、意味のないことだったに違いない。私たちは惑星にとってとても重要な時期にきている。近い将来私たちが取る行動は、人類の種として生き残ることができるかどうか、運命を決定づけるだろう。

ハイウェイで1988年に遭遇した数時間の後で、真実、平和、受容、理解を見出す旅が始まった。その日エイリアンと過ごした時間の一部は頭の中で最初の瞬間から鮮明に覚えている。残りの部分は数週間、数ヶ月、時には数年かかって明らかになった。運命の日に円盤の中で見せられ告げられたことと同様、その出来事が起こったことで私の人生は永遠に変わった。

以前のように世界を無視した目で見ることができなくなった。一度あなたが真実を知ったならそれらは決して取り去られないし消えない。真実はあなたの魂の中で泳ぎなにも誰もそれを変える事はできない。パンドラの箱は開かれたら最後決して閉じられないのだ。

エイリアンが私に情報を共有した時、経験もさせてもらった。言い換えると地球に災害が起こった後、数千人の人々が叫び腕を伸ばしている上空を円盤が浮かんでいる写真を見せられたのだ。私はそこにいた。

これらの理由から体験とエイリアンとの交流は本当であり人々に対してとても深いレベルで影響を与えている。他の生命として生きこれらの経験が自分の中にすでに備わっていると想像してみたい。例えば：ロッククライミングの本を読みそのドキュメンタリーを見ることはできる。友人がロッククライミングについて経験したことを彼らから聞くこともできる。しかしあなたが実際にやらなければ経験していないのだ。つまり、これはエイリアンがやっていることなのだ。彼らはロッククライミングの知識を与えただけでなく、同様に経験もさせている。どのようにしてこれができるのかわからない。しかし私はその理由から伝えられた情報により彼らの警告を無視することはできないと知っている。本当のことを知れば過去に戻ることはできないので生き方を変えなければならない。

このような通常ではありえないエイリアンとの交流がある人は常に遭遇の後で、完全に人生が変わり、与えられた指示に従おうとしている；よい生活を送ること、地球を保護す

ることすべてのものと調和すること。持っているものを全て尊重するように言われている：食べ物、水、この世界を。体と同様魂も聖なるもので、生命体は権利が与えられ、思慮深くなければと伝えられている。

多く聞かれる質問：なぜあなたはこれらのメッセージを受け取ることを選ばれたと信じるのか？私が選ばれたのには沢山の理由があるだろうが全ては私の考えだ。

私の理解ではエイリアンは私たちを創造することを助けた。私はエイリアンが神だと主張している訳ではない。しかし彼らは人類を創造する手を持っていたと彼らに言われそれを信じている。これは人がよく言及しているエイリアンによって行われた遺伝子プログラムの可能性に導いているかもしれない。おそらく人類の始まりから惑星中でエイリアンが特定の家族をいつも監視していて世界に新しい遺伝的なDNAのストランドを紹介しているのではないかと思う。

文中に書いているように私の父は同じエイリアンから一生コンタクトを受け続けていた。私の最初のコンタクトの強い確かな理由として理解できる。私が多くのメッセージを受け取っており人生を通して何度も彼らに会っているのはおそらく私の魂の中に何か強さがあったって情報を処理しながらも合理的でいられるからではないかと思う。それぞれのコンタクトにおいて与えられたデータを想定外の明確さで受け取っており処理することができている。そのため彼らは私に与え続けることを決めているのだ。これは長身金髪のエイリアンとコンタクトをしている人々の多くに真実だと思われる。もっと多くの情報を処理できれば、彼らをもっと教えてくれるのだ。

私は選ばれたのか、あるいは自分で志願したのか？なぜ私が選ばれたのか？いかなる答えもこれらの質問に対してはただの考えであり、本当の現実に基づいていない。事実だけが残る；私たちは孤独ではないのだ。

だれでもこの経験をできるのか？私の想像ではもし状況が正しくてタイミングが正しければ、誰でもエイリアンを肉体的に見ることができるだろう。彼らは瞑想の時にも同様にやって来る；肉体の形で連れて行かれた人々がコンタクトを維持し続けるにはこの方法がよく使われる。瞑想を通してエイリアンがコンタクトをとってきた人々は、彼らの頭の明確さと同じメッセージを受け取る。メッセージはしばしば個人のフィルターを通さずに得

ることはできないので、常に反論し時には自身を疑うことも大事だ。

1990年の初めこの話題に関しては他の人が解釈したものを読まないことに決めた。私の精神が1988年に円盤に乗った日に起こったことをはっきりと覚えていられるように。なぜ私がこのような経験をしたかについて研究家の説明を聞くのは困難で、自分の体験を他の人が解釈するのを聞くのを想像するともっと大変だった。結局経験は私のものなのだー私への贈り物なのだ。自分の経験を覚えてなければ他の人が起こったことを話すのを受け入れてギャップを埋めることができるだろうか。それは理にかなっていないと思う。

1988年、UFO学は一般の人にはわかりにくい話題であった。エイリアンが与えてくれた真実の存在になることについての知識はすべて安心できたし、私の記憶は正しくはっきりしている。数年かけて数少ない本を読み、講演者はもっと詳しい話をする人は少なかった。自分の話を人に打ち明ける機会を限定し、できる限り人に影響を受けない形で記憶を維持しようと思っていた。

1991年と2005年にUFO会議に参加した時でさえ、めったに講演者の話を聞かなかった。私は常にこのようなタイプのイベントに出席する人に対して意識を集中していた。人は理由があって集まっているように思える。同じような考えの人や同じグループのエイリアンからコンタクトを受けた人を見つける個人で活動しているようだ。

世界中でどれだけ多くの人々がメッセージを与えられ、お互いに似通っているかは明らかだ。コンタクトのあった人が覚えている情報は、同じフレーズで始まっている。たとえば「今こそそのときだ!」というフレーズは多くの最初のコンタクトで類義語である。あるいは金髪エイリアンとコンタクトがあった人々は受け取るメッセージを突然のグローバルな変化のイベントに集中している。これらの情報の詳細はしばしば識別できる。エイリアンからのメッセージで存在のコアな部分に影響を与える事はこの現象の重要な側面である。例えば：終末のときフォーコーナー地区は安全な場所のひとつであると多くの人々は言われている。

その他

1988年におこった遭遇体験により当時は本当の経験をした人々を見つける能力を持

っていた。UFO会議のような顕著なイベントだけでなく日常生活においてもだ。全く知らない人でもバー、コーヒーショップ、本屋などで沢山見つけたことがある。複数の例を話せるが特に2つの例を選んでみる。常に自分が認識したことを人に話すわけではないが、毎回自分が正しかったことが証明されている。

ある日のバンクーバーでエイリアンに関する本を見るために本屋に行った。決してそれらを読まないがこのタイプの本は今何の情報が公に発信されているのかがわかる。パズルのどの部分が最近当てはまったのかが見ればわかるからだ。私は通常はカバーだけ見て何の本かについてだけ読んでいる。

私が本屋に着いた時通行人と思われる男性が本を見ていた。彼は私を見なかったが私は笑顔だった：彼はエイリアンからコンタクトを受けていたことがわかった。彼は本を置いて後ろに下がった。私は彼が手に取っていた物と同じ本を手にした。彼が去るときにこう言った。「それは全部本当だよ、君もわかっているだろう」

「ええ、わかるわ」彼を見て笑顔で返事をした。

彼は笑顔を返した。彼が歩き去るとき言った。「よし！仲間だね！」お互いを認知したのだった。二人共私たちは孤独ではないという知識に目覚めていた。お互いにエイリアンとのコンタクトを認識しそれがわかったのだった。

別の本屋でも、お互いに認め合うという出来事があった。店から2ブロック離れた所で頭の中で声が聞こえた。あなたにとって重要な人にお店で会うわよ。

本屋に入ると新刊本を見に行った。目を開いておくためだ。自分が探している人が誰なのかわからなかったがハートと精神を開いていた。30分間通路を見て廻り、音楽のコーナーに行くことにした。コーナーに着き見上げるとそこに彼女がいた！彼女は沢山のコンタクトがある！そう思った。彼女と話す必要がある。もし彼女が自分の経験を十分に気づいていなかったら、驚きだ。彼女と話すまでは放っては置けない！部屋を横切る女性がコンタクトがあったと気づいただけでなく、長身金髪エイリアンだったのもわかっていた。

現実の問題はいかにして会話を始めるかだ。最初に彼女を認知した瞬間から従業員だとわかった。彼女の方に歩き出すとこちらを見た。笑いながらこんにちとはと告げる。名前のタグはアルマとあった。考える前に会話が進み、スパイラルジュエリーがセールになって

いることについて話をした。お互いにスパイラルシンボルに惹き付けられていた。アルマと会話を始めるのにいい方法だった。彼女はとてもフレンドリーでおもしろい女性だとすぐにわかった。

彼女をコーヒーに誘ってもっと深い話をしようと考えていた。—しかしどうやってそれをすればいいのか？奇妙な人間だと思われたくなかった。話題はホピにふれたがお互いにエイリアンとUFOについては触れなかった。私たちは深いつながりをフォーコーナーに感じていて、彼女はエイリアンとコンタクトがあったことを確信した。

レジのところに行くと、彼女は買い物をレジに通すために一緒に向かった。大胆にも彼女は同じ興味関心ごとがありそうなので話をしよう誘ってきた。まるで見えない強い糸が2人の間にあるようで、互いにひっぱりあっている。よい考えだと思うと告げた。私もまた彼女と話すのに興味があった。アルマと電話交換をして都合のいいときに電話するようにと力強く伝えた。

数週間後アロマと会った。彼女の方から電話をくれた。その日に会う予定になっていたのがわかっていて。お互いの人生について語り合った時、すべてが明らかになった—お互いに多くの共時性があったことを見出した。しばらく話した後で、直接会って次の日程を決めて会話を終わろうと決めた。

アロマと私が次に会った時は数時間話し込んだ。それはとても面白い会話で何も驚かなかった。自分のエイリアンコンタクトについて話すと、彼女は自分の経験をお返しに話した。会話の中で私を見た瞬間にコンタクトがあると気づいていたことを白状した。彼女も私と強い気持ちで話そうと感じ、そうするまでは私を離さないと思っていたそうだった。私たちは同じグループのエイリアンからコンタクトがあり、お互いに最初に認知し合ったので、お互いに惹きつけられたのだった。

アルマは今日もとても良い友人で私に自信を与えてくれている。彼女は私の友人に新しく加わったのだが、私にとって価値のある人だ。彼女のエイリアンに関する知識と彼女の魂は膨大だ。彼女はとても美しい魂であり、自分の人生に彼女が入ってくれたことを嬉しく思っている。

エイリアンとコンタクトのあった人々は誰？

エイリアンコンタクトのあった人々は、肉体的にコンタクトがあった話よりもっと共有すべきことがあると理解するのはとても重要である。エイリアンが私たちに知識として与えたのはメッセージなのだ。私たちアブダクティはメッセージの一部であり立ち止まって聞くべき時だ。直接肉体的なエイリアンコンタクトがあった人々というのは、私が気づいた所、全ての人がある出来事によって完全に人生が変わっている。どのように人生が変わったのか？遭遇の前と後の信仰は何なのか？エイリアンを見たらどのように感じるのか？これらは私のような人間に対してなされる質問の一部だ。次はあなたかもしれない。もしエイリアンが自分をグローバルなスケールで表す時はあなたにとって良いことがある。少なくとも彼らが何者で何を代表しているのか共通の知識を持たせてくれるだろう。

エイリアンが私に伝えた全ての知識を説明することは難しいし、これらの存在とのアブダクション／コンタクトの経験をあなたに十分に理解してもらうのは不可能だ。あなたはそれができない。エイリアンの代理人として私のような人々は沢山の情報を自分自身の中に置いている。私たちは人間として言葉を通して理解できるように知識を翻訳する能力が欠けている。これらはこのグランドデザインの参加者である私たちへの彼らからのギフトなのだ。

授かった知識により、アブダクティは彼らのリクエストに背を向けることはできない。私たちはなぜ彼らがリクエストしているのかを理解しているからだ。自分達の特別な仕事をやり遂げようと追い立てられる理由はできないと言うのが不可能だからだ。私達が何者かということの一部となっているのだ。

エイリアンから共有された情報の複雑さを分析して見せよう。あなたが生まれた瞬間から言葉を理解し始める。最初にあなたは言葉で話しかけられ大人になると文字や言葉や本など沢山のものがあなたの世界の一部になる。最初はそれらを何一つ理解していないが幾分それが重要だとあなたはわかっている。このプロセスは数年かかりある日すべての小さいパズルピースがあなたの目の前に現れる。生まれてからやってきたことがひとつになり、あなたはしゃべれるようになり、読み書きができるようになる。もちろん常に学ぶためのコースがある一言語、書き方などなど。あなたが必要な情報はすべて目の前に現れている。

あなたはただ時間をかけてそれらを学び、*鍵*を入れて全てをひとつにまとめる。

肉体のエイリアンコンタクトの場合としよう。私たちは内側に*鍵*として知恵をもらっている。それらは言葉で説明するのをはるかに超えている。世界の全ての言語を学ぶのには一生かかる。まるでエイリアンが私のような人々に一度の訪問で世界中の言語を与えたような事なのだ。そこで私たちが人に何かを言われ尋ねられた場合しばしば説明できない。私たちがやるべきことは情報の*概要*を説明しようと試みるだけだ。

私たちコンタクティ／アブダクティはしかしながら全ての答えを持っているわけではない。それぞれが特別の仕事を与えられ、人類がよりスピリチュアルで感情的であるように助けようとしている。私たちはみな宇宙の視点と理解に対する基礎教育を与えられている。そこから私たちそれぞれが教わった何らかの主題の分野において任務をやり遂げる必要がある。ある人は技術について知っていてある人は技術はわからないが星座やヒーリングを知っているかもしれない。この為いかなる人間のイデオロギーや宗教やエイリアンコンタクトも妄信してはいけない。私たちはそれぞれが別々に教育される。そのため全ての答えは持っていないのだ。私たちは依然として人間であり、自分の誤解を同じように疑わなければならない。この現象のあらゆる側面について私は自分に問い続けている。あなたに対しても、私や他の人のことを調べる時には同じ事を願う。

私や私のような人々は特定の理解レベルを持っていて、人類が必ずしも見えない部分の事柄に自分で気づくプロセスを助けている。私たちは集団で行う全てのことが他の次元や世界に影響を与えていてこの責任は軽くとられるべきではないと学んでいる。これはエイリアンのメッセージ一つだ。

エイリアンと直接、肉体的にコンタクトをとったことのある人々の多くは、公に話すことを選ばない。一般社会でばかにされることを考えなければならないからだ。あなたの同僚、隣人、あるいはあなたの親友の仲にいるかもしれない。何年も知っている人で普通と何も変わらない人かもしれない。自分達の秘密を守りながら、この世界に同時に存在し続けなければならないのだ。

もし、その時がきて、エイリアンが人類にグローバルスケールで現したならば、私たちは影から出てきて人間とエイリアンの中間者となるだろう。私たちを怖がらないで欲しい。

話しをする機会を与えて欲しい。私たちはそれを待っている。

私たちがエイリアンのメッセージ代理人だったとしても、完全ではない。肉体の世界で人間の体に生きており自由意志がある。みんなのように自分のレッスンを学びにここに来ている。単に異なる人生の視点をもっていて世界に共有するのを待っているのだ；時間がきて地球の人が聞く準備ができたなら、アブダクティやコンタクティ達は立ち上がり、一緒に怖れや馬鹿にされることをなく自由にオープンに自分たちの知恵を共有するだろう。

私の父親

コンタクトがあつてすぐの頃、現象のある側面を見ながら父もまたコンタクトがあつたに違いないと思った。自分のパターンと同様1990年にアブダクティミーティングにやってきた人々もまた父を思い出させた。ハイウェイで連れて行かれた日の後で父の関与を疑った。

自分のコンタクトは父を通して私に受け継がれたものだと多くの理由から感じた。父はいつも世界の終わりの日について話していて、取り付かれているようだった。彼は幾分精神的に病んでいて、よく人が彼を見ていると主張した。よくサバイバルスキルについて話し、多くの場合ESP能力の実演をしていた。自分が人より特別な遺伝子を持っていると話し私たちの家族も“特別”な遺伝子を同様に受けついでいるという。子供の頃から私たちは単に生まれたのではなく、“繁殖”されたと言っていた。子供の頃からその話を聞くのは恐ろしかった。

父の関与している可能性はそんなに重要ではないかもしれないが、ハイウェイでのアブダクションの後に理由を与えてくれるように感じた。UFOアブダクティグループと話し始めてからコンタクトが彼らの家族の歴史で行われたことを知っていたので、自分は正しいのではないかと思った。会議の間皆で疑ったのが、あるいは実際知っていたのが、コンタクトは家系に受け継がれているということだった。また多くの人々が、コンタクトが大体5・6歳の頃から始まったと回想している。

父にもコンタクトがあつたかもしれないという別の理由は、コンタクトがあつた人と話した時何人かはおかしかったからだ。エイリアンの情報をうまく統合できずに結果として、

うまく社会に適応していなかった。彼らが受け取った情報によって精神がおかしくなり、完全に引きこもってしまっているように思われた。現実と幻想の線が見えず、後者に呑みこまれるのを許してしまっていた。奇妙な遭遇にも関わらず、最初に私は全てのことに論理的な説明を見出そうとした。その後でエイリアンの関わりについて疑ったのだ。

1988年にエイリアンと過ごした時、彼らは私が彼らの一部であると話していた。彼らは特別に私を一部創造したという。父の壮言やハイウェイでの出来事を話したあとの反応から、私は金髪碧眼のエイリアンとのハイブリッドの可能性が高いと思わる。結局私が生まれた頃に頻繁に父は彼らを見たと言っていた。彼らは当時から常に父の周りにいて付きまとったと話していた。このことから、エイリアンは父を訪問していたか、あるいは私の為だったのかもしれない。

私の生物学的な両親は；私は間違いなく両親の子供で、両親特有の遺伝的かつ肉体的な特色を持っている。そのためエイリアンは私のDNAを何らかの方法で最初のコンセプトから変更したのではないかと信じている。

父と最近エイリアンに関してした話は、ほとんど成果がなかった。すでに知っているであろう情報を私に与えることを拒否された。小さいコメントから、彼が喜んで話すこと以上に沢山のことを知っていることが伺えた。

座って父と話したとき、沈黙し、ため息をついていた。笑いを押さえ邪悪なあざけりをしながら私の目の中心を見て言った。「政府はお前を恐れている。彼らはお前をエイリアンの一部だとみなしている。」

「どういう意味？」父に尋ねた。言いたいことは充分わかったが、父から言ってほしかった。

「彼らはお前を人間でなくエイリアンだと思っている。お前は似ている。だからお前を恐れているのだ。気を付けなくてはならない。関わるべきではないぞ。お前の人生は壊れてしまうぞ。そうなってほしくない。これは俺がお前にできる唯一のアドバイスだ。」

今日、父が私に話したことを含めなければならない。将来父が知っている価値ある又は興味深いエイリアンについて、あるいは私のことについて喜んで話してくれることを望んでいる。

母と姉にコンタクトを告げたこと

最初にハイウェイで起こったことを話した時、私の家族はみな予想外の反応をした。彼らの反応を伝えたいと思う。そうすることでこの現象がそれぞれの人に触れ、いかに影響を与えたか、同じように私にもどれほどの影響を与えたかを分かち合えると思う。

(1989)

姉にハイウェイで出会ったエイリアンとのコンタクトを告げるとき、幾分勇気が必要だった。自分の経験を最初に消化しなければならず、どうやって会話を始めようかと計画する必要があった。クランブルックに行って直接会って話をするための飛行機代や車代がなかったもので、姉には電話で話すしかなかった。ジャニスとキャロルに話した時両親には話さないでと頼んだ。自分の口でママとパパに話したかったからだ。

それぞれ電話を通して長い会話をしたが、ジャニスとキャロルの反応はショックだった。二人共泣き始め同じ事を言った。「あなたは私の妹じゃない！ あなたはエイリアンよ！ 私の妹に何をしたの！」落ち着かせるのに時間がかかり、私だよ、本当の妹だよと確信させるのは大変だった。とても奇妙な反応だった。でも完璧な理由はないのだ。

ハイウェイの遭遇の日の後、私はすごく変わらざるをえなかったもので、周囲の人はとても心配した。子供時代はスピリットガイド、アストラルトラベル、他の次元や他の宗教的なあるいはスピリチュアルな性質に関して何の概念ももっていなかった。サイキック能力を持って成長したが、それを十分に理解していなかった。アブダクションの日の後で、サイキック能力はピークになり、すべてのスピリチュアルに関する知識と理解は突然拡張した。まるで実際に他の世界にアクセスする許可が下りたような感じだった。1988年の遭遇以降、約2年の間その世界にどっぷりと浸かっていた。一生かかって勉強するような内面にあるスピリチュアルな生命に関することを、たった一晩で学んだかのような感覚だった。通常の社会で、それだけの量の明晰さをもって生きるということは極端に困難だったが、結果的に落ち着き、与えられた全ての情報をよい形で吸収させた。今日もある程度はアク

セスすることはできるが、しかし最初のコンタクトからは沈下していった。私がコンタクトの後で人が代わって見えると言った人もいた。

2人の姉にエイリアンに連れて行かれたときを覚えているのか尋ねた。その夜に何が起こったのか、私には鮮明な記憶はないと話した。4歳の頃、私が家を離れてエイリアンがいる農地に行ったとき、ジャニスとは私と一緒にそこに行った。しかし彼らは彼女を家に送り返した—彼女は私たちと一緒に来なかった。ジャニスは平均的な人よりも直感的でキャロルもまた極端な直感能力をもっている。キャロルもある点において連れていかれたことを示す記憶があった。あるタイプの円盤が窓の外に現れ、自分が地球の上に高く昇っていったのをはっきり覚えていた。人生を通じて意識的にこの記憶を保持し続けている。キャロルはそれを本当に経験したことのように感じていて、不吉な予感で恐ろしいことのように感じている。

もしエイリアンのコンタクトが部分的にエイリアンの遺伝的プログラムと関連があると推測すると、キャロルとジャニスもそれぞれ何らかのコンタクトのあったことは理解できるだろう。この主張を少し補強できる物もあるが完全に法則化されるべきではないだろう。

母への告知

母には自分の経験を電話で伝えたくはなかった。個人的に会って話すべきだと感じた。たぶん、たぶんだが、この主題に対して幾分光を灯してくれるだろうと思っていた。このためクランブルックに向かった。たぶん彼女も同様に連れて行かれたに違いない。彼らが言ったとおりもし私が部分的にエイリアンであるとしたら、母はある時点でインプラントされてなければならない。おそらく奇妙な出来事の記憶がおぼろげにあるだろう。

家に戻ると母に話す瞬間を計画しようとした。とても緊張し母がどういう反応をとるかが心配だった。訪問してから数日後、自分の経験を話す正しい瞬間を見つけた。まだ明るさの残る夜の時間、彼女の前のカーペットの床に座り、母は大きいアームチェアに座っていた。いつものように質問する前に一度すべてを話し終わらせてほしいと頼んだ。そうすると説明しやすくなる。話しているとき、最初の母の反応はより穏やかでテーマについて考えていた。私はいつも母が哲学の生徒だと考えている。母はその主題に対してと科学に

対してよく教育されていた。質問のほとんどはエイリアンが私に話したことを確かめようとしたことだ。エイリアンから伝えられたいくつかの哲学を伝えると、母はショックを受けた。私の見通しや人生の理解は完全に変わった。私たちの哲学的な会話の中で母は私に瞑想をしているのかと尋ねた。もちろん答えはイエスだ。彼女は私にどのようにするか実演してほしいと頼んだ。私はなぜ母がこのような瞑想法に対して感心があるのかわからなかった。しかし彼女が受け入れる方法を助けるのであれば、何でも話そうと思い、私が母に伝えていることが嬉しかった。

床に座って足を内側に曲げ、標準の瞑想位置に丸めた。手をひざに置き目を閉じた。白い光が吸い込み、吐き出すのを視覚化した。2分くらい同じ位置にいて母はそれを見ている。自分が変わったのがわかった。体中がくすぐったくなり、まるで体が崩れ落ちて自分の本当の自分があらわれたような感じがした。その瞬間母が叫んだ。「あなたは誰？娘に何をしたの？あなたは私の娘じゃないわ！あなたはエイリアンよ！」私は飛び上がり母が廊下を歩いていきバスルームにいく後を追った。母は泣いていた。

母は明らかに私を怖がり、向こうに行くように叫んだ。母をようやく落ち着かせると、なぜ怖がるのか尋ねた。「あなたは私の娘じゃない！ 私の目の前で変わったのを見たのよ。もはや娘に似てさえいないわよ」

30分かけて私は母の娘でエイリアンじゃないことを確信させた。実際エイリアンは私の一部は彼らからきていると言っていた。結局私はエイリアンかもしれない。私は確実に家族にその情報を伝えるつもりはなかった！私が瞑想をしているときに何が見えているのかを母に尋ねた。その描写は目新しくはなかった。何人もの人が過去に私が瞑想をするとき同じイメージの女性が現れるのを見ていたからだ。背の高い女性で流れるような金髪で青い瞳で白いローブを着ている女性が現れていた。

この経験を家族に話したとき反応に驚いた。がっかりしたように見えても気が狂っているという人はいなかった。当時みんな私を信じた。私の話しへの信頼は今も行ったり来たりしている。それは恐怖からだと信じている。結局、もし私の話が全て真実だとしたら、彼らは世界が目に見えているようなものではないことを受け入れなければならないのだ。今日まで家族は私を支え自分のスピリットに従い経験を通して真実を見出すこととこの現

象への私の関わりについて勇気を与えてくれている。

母が何も奇妙なことを見ていなかったことを認めなければならない。しかしすべてのUFO番組をテレビやラジオで視聴している。私が見つけた唯一の手がかりは、空を飛ぶことの恐怖と関係があるのかもしれない。これは彼女を怖がらせている。単なる純粋な考えだが幾分つながりがあるのかもしれない。

ジャニスの記憶

4歳の遭遇はこの話の重要なパズルである。この年齢からの記憶が洪水のようにおしよせて戻ってきた。ハイウェイの遭遇の後15年かかりようやくジャニスも私と同じ記憶を思い出した。このことが私を完全な円に導き、全てが始まった家に戻らせたのだ。

1989年のある日クランブルックに母を訪ねると、ジャニスも立ち寄った。3人で私に起こったことを話しその意味を理解しようとしていた。ジャニスに子供の頃に変なことを経験しているかと尋ねるとすぐに答えた。

「小屋の上にくっつかの奇妙な光があったのを覚えてるわ。あなたもそこにいたわよ。覚えている？」私も覚えていて、そのことを話した。他に何か覚えていないか尋ねると返事が返ってきた。「何も。小屋のところに光があったことしか覚えてないわ。」彼女の記憶をこれ以上戻すのは無理だと思った。彼女が自分で思い出さなければ自分の記憶として信じていくことができないだろう。

家族と会った後母が出かけた。私はジャニスと子供の頃の夜についてもう一度話をしたかったので電話してもう一度あの出来事について尋ねてみた。彼女がくれたわずかな情報について話をした。ジャニスは私が間違っているという。彼女は何にも見ていないと言い、私が混乱していると思っていた。彼女に深く突っ込まなかったが、簡単な記憶が浮かび上がったのだろうと思っていた。しかし無意識に戻ってきただけのようにだった。

14年の間、ジャニスの記憶は時間をかけて再び戻ってきた。いつも同じ方法で会話を始め、何か奇妙な物は見なかったかと尋ねた。年が過ぎるにつれて、少しずつ彼女は思い出し、忘れていた記憶が集まり始めた！

(2004)

2004年にジャニスがクランブルックから電話してきた。当時彼女は学校に通っていた。彼女はUFOが小屋にあったのを目撃した話を書いていいか尋ねて来た。授業で書かなければならない短編に使いたいというのだ。喜んで了承した。彼女は既に3分の4は書き終えていたので、私が同意したことを喜んでいた。それを私に見せてくれるという。それを読み終えると、残りの部分を口頭で伝えてくれた。いい終えると彼女に言った。「ついに全部の話にたどりついたわね。たぶんそれを書いたから今度は忘れないわよ」何のことを話しているのか私に尋ねたので、子供の頃に何が起こったのかについて話をした。彼女がそれを覚えていてここ数年は出来事を忘れていたことを告げた。彼女が全部思い出すのを待っていたのだ。私の影響なしに。私でさえ彼女がその夜について描写した内容に驚いた！私が覚えていることとほとんど同じだったよと聞かされて彼女は驚いていた。私たちはまったく同じことを覚えていた。

週の後話を書き終えると再びそれを私に読んで聞かせた。彼女が口頭で話してから、話を書き終えるまでの間に、青い光が彼女のおでこに光のビームを放ったのを忘れていた。それがおかしかった。先週その話をしたとき、それを覚えていたのに、再び忘れてしまったようだ。

ジャニスがようやく遭遇を思い出してから、エイリアンが渡したギフトについて話すことにした。驚いたことに彼女も覚えていた。それがどこにあるか私に話したとき、自分が覚えていたことは正しかったという確認を得た！ジャニスもはっきりとした記憶があり、私がギフトを白い布に巻いて埋めたことを覚えていた。それがどこかも、布のことも何も話していなかったが、彼女は両方とも知っていた。私がそれを触らないように言い、お父さんが見つけ出さないように確認し合ったことも彼女は話した！彼女の記憶は私のと全く同じだと彼女に告げた。サイズや形についても彼女の説明はとても似ていた。オブジェクトについて思い出すとき、二人共同じ視覚イメージを持っており、ドミノのように他のオブジェクトと関係するのだと思っていた。

ジャニスは1970年に私が円盤に連れて行かれてから数日して、父に円盤とオーブのことを話した記憶があると私に話した。彼は笑いすごく可笑しそうにしていたという。ジ

ヤニスはそこにいるべきではなかったから、何か間違いがあったんだろうと父は話していたそうだ！父親としては奇妙な反応だ。エイリアンに子供が連れて行かれたばかりというのに！父の反応について私は憶えていなかった。

血液の変更

私が4歳のとき血液が変更された記憶があるが、エイリアンは長い間このことを人に話してほしくないようだった。なぜなのかわからない。

2000年に義理の兄が亡くなり、数ヵ月後経っても彼の存在を感じ取っていた。ある土曜日サイキックフェアの広告が目に入った。自分もサイキックなので、誰か気になる人がいるか見に出かけた。最初に廻ったとき、金髪の女性を選んだ。彼女は30代後半で次に廻ったときは彼女の所に行きリーディングを頼んだ。これはあまり普段はやらないが、この日は特別自分をそうするように強要した。

彼女の所に歩いて行くと、すぐにリーディングを始めてくれた。まだ緊張していたが、すぐに周りに誰か亡くなった人が横に立っていると言う。その日義理の兄が私と歩いているのを知っていた。彼女は私の兄ではないかと付け加えた。私の義理の兄を見ていると彼女に話した。彼女は本当のサイキックだとこの時点でわかった。

女性はタロットカードを使い、リーディングをしてくれた。その時点まで何も重要なことは出ていなかった。そこでカードを置くと、両手を握り、手のひらを上に返した。私の手を握りながら、突然トランス状態になり話を始めた。「あれは何？あなたの周りに医者が見える。あなたが子供の頃ね。あなたの手にチューブが刺されてる。血液に何か問題があるの？」すぐに彼女が何を見ているのかわかり、エイリアンがそれを彼女に見せたくないのもわかった！話題を変えようとしたが、再び私の手を握るともっと今度は強く握った。「あなたの血液を変えているわ！なぜ彼らはあなたの血液を変えているの？彼らは医者じゃないわー地球外生命体だわ！何でそんなことをしているの！？」彼女は震え上がり、声が上ずっていた。明らかに彼女は映像に震えており、慌てて私の手を離れた。「わお！彼らはそれを私に見てほしくないのね！何をしているのか尋ねたら、あなたには何の関係もないから見るのを止めるように言ってる！」

この映像に女性は震えがあり、すぐにセッションを終わらせた。私の周りになぜ医師達がいるのか尋ねた瞬間から、彼女がエイリアンを見ているのがわかっていた！この女性は2度と見かけなかった。彼女が読み取った出来事は、私が4歳のときに起こったことだ。彼女ははっきりと私がエイリアンに血液を変えられた記憶を見ていた。

子供の頃に血液が変えられた記憶は、見知らぬ人から確認された。これによって私が4歳の頃に経験した記憶は全て正しく完全に真実であることがわかる。

クローン

UFO学には沢山の側面があり、全てを表現するのは不可能だ。私の経験上、それらの多くはとても奇妙すぎて、当時の人々にはそれが真実だと信じるのが難しいことがわかった。そのうちの一つは私がクローンと呼ぶ男性のことだ。

これらの男性について人に話をするときは、いつもながら、答えよりも疑問の方が残る。彼らは何者か知らないが、私の人生にどれほど影響を与えているかがわかる。本当の質問は、どうしてこれほど長い間彼らは私の人生に留まり続けているのだろうか？どうして彼らの関心をひいているのだろうか？これらの質問に対して答えは得られないのだ。

ビルやジョンと出会ってから数年経つ。1991年に彼らは姿を消した。私が一体彼らは何者で、本当は誰のために働いているのかを質問してからだ。彼は普通以外の話は一切しなかった。逆に私たちは平均的な、世俗的なことを話していた。カフェの仕事を辞めてからも彼らは私の前に時々現れていた。街角や本屋で偶然出会ったりもした；場合によっては私の新しい仕事場にもやって来た。次の12年間飛行機でどこかに行こうと予約をすると必ず予約した日の一週間以内に彼らとばったり遭遇した。

一度付き合っている男性にクローンについて話したことがあり、その時に家族を訪問するため飛行機を予約した。セスは私が飛行機の予約を入れて1週間以内でしか偶然会わないと彼に話した；もちろん彼はその話を信じなかった。2日後ボーイフレンドがアパートに迎えにやって来た。玄関で待てば車を止めずに済みすぐに出かけられるというので、外に出て彼を待っていた… はい。セスが私に新しい旅について尋ねてきた。ある時バケーションの飛行機を予約をしてセスに出くわすのを待っていた。はっきりとその時の事を覚

えている。映画を見るためにグランビルストリートを歩いていた。始まる前にまだかなりの時間があつたので、ゆっくりと歩きウィンドウショッピングをしていた。そのときセスが鏡に反射している姿が見えた。振り返らずもっとゆっくり歩いて次のウィンドウまでわざとゆっくりと立ち止まった。セスが通り過ぎるのか伺っていた。彼の反応はショックだった！私を直接見て止まり逆方向を見て何か見ているかのように装っていた。8分程これが続いている。彼は私を待っているのは明らかで、私をつけているに違いなかった。被害妄想？そうは思わない。馬鹿馬鹿しいくらいに何が起きているかはっきりしていた：彼は尾行している。偶然を装いばったり出くわす機会を待っているのだ。

セスを最後に見たのは2003年だった。アリゾナからキャリーと戻ったすぐ後だ。始めて旅行前に彼を見かけなかった。その代わりに家に戻ると2日おきに出くわした。彼は数週間町を出ていたと言いつ何をしていたかを話していた。だからキャリーと旅に行く前に彼を見かけなかったのだろう。彼は私に新しい旅行に行かなかったかと尋ねた。行っていないと話した。反応を見るためだ。するととても興味深いコメントを残した：「今日は綺麗な日だね。暑いねー砂漠にいるような感じだ。砂漠に行っていたのかい、ミリアム？」質問の後奇妙な表情を浮かべた。わお。あからさまね！と思った。

「ええ。トゥーソンに去年行ったわ。あそこはよかったわ。」彼は私がアリゾナから戻ってきたばかりだと知っていたはずだ。砂漠の話なんてするはずもない。もっと最近そこに行ったんじゃないかと押してきた。今の季節ならどれくらい暑いか話していた。たぶん私が旅について詳しく話すのだと思ったのだろう。会話を終えると再び疑問が残った。彼は何者でなぜ私と話しているのだろう。

セスに会ってからジャニスにその話を電話でした。砂漠のことを持ち出したのは面白いと言った。次に彼に会ったときは真相に直面するとジャニスに誓った。しかし残念ながら2度と彼には会わなかった。最後の2回は彼に嘘をついて反応を見た。たぶん彼に正直に話さなくなったから、私と会う意味がなくなったのだろう。誰が予想できよう－質問リストに追加しただけだ。

一度だけ飛行機の予約をしていないのにセスにばったり会ったことがある。病気になり、外科手術を予約していた。彼はあいさつし体調を聞いてきた。体調が悪いようだが健康は

どうか尋ねてきた。健康に見えていたので、彼のコメントはおかしかった。この会話から、再び彼は何者なのかという疑問が浮かんた。

家族の心配

ここ数年父とエイリアンのコンタクトに関する話をしている。毎回父に知っていることの全てを話すように頼んでいた。父の反応は私をもっと混乱に陥らせた。最初からエイリアンと関わるなと話をする度に私に言ってきた。また誰にも話すなと念を押していた。「やつらの話を人にしたら、お前の人生が台無しになるぞ。俺の人生も奴らに破壊されたんだ。お前にはそうなって欲しくない。気をつけろ。警告しているだけではない。お前が彼らの頼みを聞いたらお前は壊れてしまうかもしれない。」父はそう言った。これは2006年に父と話した最後の会話の一部だ。父が何かを隠していることをわかっていると告げた。私が父を疑っていると言うと、父の反応は私を見て笑い無言だった。あからさまに馬鹿にした態度から、父が最も心配しているのが私がエイリアンコンタクトがあったことを将来公表することだったと思う。

姉と母はエイリアンに関して私が取った選択をほとんど全面的に支えてくれた。心配せずこの本を書くように励ましてくれていた。彼女らこの本が私の人生に影響を与えると考えたに違いない。自分の話を公表することで非難を扱わなければならない。数年の間私が最も気にしていたのは家族が私の話のせいで中傷に耐えなければならないかもしれないということだ。

1988年以来、私の人生は大きく変化を遂げていた。実際に経験したことで変わらずにいられようか？全ての知識によって決めた：友人は誰か、誰と付き合うかなどを。

究極の疑問

数年来に経験したことを回想しながら、あらゆる感情を通ってきた。否定、怒り、そしてようやく受容された。エイリアンとのコンタクトの初めからエイリアンは主要な流れの文化ではなかった—実際間逆だった。この話題について探するのは困難で、知っている人を探すのはもっと難しかった。1988年に私が目覚め始めていたとき、この話題について

知っている人を見つけるまでに9ヶ月かかった。振り返るとこの話題が社会や今日の文化の主要なテーマになっていなかったことを嬉しく思っている。同じ経験を今日したら、自分の記憶が本当かそうでないか疑問に思っただろう。自分が見て経験した全てについては、それが本当か嘘かについては疑問に思っていない：それはみんな真実だとわかっている。誰も私を確信させることはできないだろう。

全てに疑問をもち例外を設けない。私が信じていることだ。自分のモラルと直感に聞くこと。エイリアンが私に与えたメッセージは平和と共感だ。私は聞き続けるし自分の人生において彼らに感謝をしている。彼らはこの世界のケアテイカーであり、彼らが現れてくれたことに感謝している。

これを沢山の人が読み私のような人間は精神分裂病だと思いたいとわかっている。あなたはたぶん例外だろうと思う。彼らに頭の中で話しかけ彼らも私に話しかけていることを文章に書いているが、これは毎日、毎週、毎月のことではない。とてもまれな場合なのだ。ネバダ州のラフリンのプールでの経験を書いたように、彼らの声を聞く機会に恵まれた。彼らとは瞑想で交流できるが、肉体の次元で声が聞こえるというのは同じではない。こういう経験のない人々に、どうやって交流しているかを説明するのは本当に大変なことだ。

この現象の多くの側面において一冊の本で説明するのは不可能だ。この現象のいかなる側面にも意識を向けないようにすれば、現実の世界では矛盾が起きていることを明らかにしてくれると思う。あなたの質問リストは決して小さくならずむしろ多くなっていくはずだ。パズルの1ピースが見つかったら10個が起ころうとしているのだ。—これにくじけないでほしい。大きなパズルに対して、一人ひとりが異なる答えのピースを持っている。心を開き続けるのは、人類の歴史の中で最大の疑問に対する答えを見つける鍵のひとつだ。

エイリアンは何者で私たちは誰なのだろう？

メッセージ

エイリアンが私に与えてくれたメッセージの全ての範囲を話そうとしたら、この本は世界中で最も長い本となるだろう。私の目標と使命はこの世界の人々に対してエイリアンが存在することを教え、エイリアンが人類にその存在を知らせるグローバルなイベントの可能性に向けて準備することだ。

可能性のある未来に対する警告

エイリアンは将来、惑星と／あるいは人類が破滅するかもしれないという警告を与えた。もし我々が種として脅かされたとき、あるいは地球自体が危機に陥ったとき、彼らがどのような役割を演じるのか、みんなに伝えるように私に頼んだ。それは平和的でポジティブなメッセージだ。

“ある日星が空にあらわれ、すべての人間がそれを見ることになる。世界中の何も誰もその存在を隠すことはできない。それは人々にとって、終わりが近づき、準備する時がやってきたサインとなるだろう。”

エイリアンは私と同様に世界の他の人達にもこの同じメッセージを与えた。彼らが私たちに頼んだのは、世界にそれを伝えることだ。そうすれば終わりのときに我々が生き残れるだけでなく、次にやってくる日に繁栄できるからだ。世界が平和で調和している未来について彼らは話していた。次の世界ではより高いレベルのスピリチュアルな意識があり、我々はより鮮明に過去・現在・未来のつながりが見えるようになるとエイリアンは語っていた。

いつどこでこの変化は起こるのか？

我々は変化の始まりの段階にいる。あなたがやるべき事は、ニュースをつけて、ラジオを聞き、あるいは新聞を読み、世界が数年前と比べて変わっているのを知ることだ。地球

の変化は終わりが近づいたことを示すサインのひとつだ。洪水、干ばつ、竜巻、地震、火山噴火、火事、戦争—名のつくものは何であれ、—地球は今や我々が生きようとする道と異なってきている。

地球の変化は各国に不安を与える。人民にどのように食べさせるか。国の持つ富をどうやって維持するか？他国が商品の供給を止めたらどうやって生き残れるか？石油や食料であろが問題は同じだ。

食料供給国はすでに少なく、干ばつと飢餓は将来の可能性としてすでに現れている。我々がやるべきことは、食料や物資のために殺し合いを始めた人々を見て、劇的な変化を我々が起こすまで、残りの人間が何を強いられるかを見ていくことだ。

人類はお互いを破壊せず生産と消費を維持することはできない。欲や退廃によりどれくらい消費し続けることができるだろう？ひとつの世代で地球の貴重な資源をほとんど取り去ってしまっている。

惑星に大災害が起きたら自分で乗り切らなければならない

たとえば大きな太陽フレアが地球にぶつかり、すべての電気が消えたとする。どうやって暖を取ればいいのか？店の棚に商品がなければ、何を食べればいいのか？ガスは電気ポンプを使うので使えなくなる。世界に電気がなくなったらその機能が損なわれる。清浄な水がどこからくるのか知っているだろうか？

もし核戦争がおきたら？生き延びる方法をあなたは知ってるだろうか？核爆弾が落とされたらどうすればいいのか？あなたは今安全な場所に住んでいるだろうか？

パンデミックが起きたらどのように自分を守ればいいのか？シェルターの作り方は？食料調達や栽培や種を集めることや、水を探して健康を維持できるだろうか？

エイリアンはここにいることを世界に伝えたいのだ。彼らは常に私たち自身から我々を守るために近くにいるのだ。もし権力を持つ人間が世界を破滅させる方向に動いたら、エイリアンは干渉し制止する。惑星の混乱は彼らが人に知られる方法のひとつだ。惑星が危機に陥ったときいかなる行動をとっても彼らはそれを止めるだろう。しかしエイリアンは

受身で暴力的ではないので、暴力に出るのは地球が修正できないようなダメージを受けるのを阻止する唯一の選択だった場合のみだ。もし地球の地形が大きく変わるような出来事が起これば、たとえば戦争や流星の衝突などがあれば一彼らはおそらくその場に来て救出するだろう。地球の環境を脅かすようなグローバルイベントが起これば、地球の人々を救うかもしれない。しかし彼らが人間の世話をしていると誤解してはならない。彼らは惑星を保護するために来るのであり、居住者の一部だけを助けるかもしれない。

はっきりしているのは、大災害が起こったとき強い意志のみが生き残りを可能にするということだ。エイリアンは我々を保護しないが、一部の人間を選んで助けるかもしれない。一部の人間には種を届けかもしれない。種は生命の維持に必要で、地球と調和して生き、シンプルに生きる分のみとなるだろう。メッセージを誤解しないで欲しい。彼らはテクノロジーの使用に反対しているのではない。地球を損なわずに責任を持って使うように頼んでいるのだ。

安全な土地はどこなのか？

あなたは正しい場所にいるだろうか？終わりのときアメリカのフォーコーナー地区は安全な場所のひとつであると伝えられた。彼らがはっきり言うにはこの場所は惑星で唯一安全地帯とされるところだ。地球の全ての地域で安全な場所がある。安全とは彼らに保護されているという意味だ。

しかしあなたがすぐに荷造りしてこの場所に引っ越せということではない。もしあなたがこれらの安全な場所にいるように意図されていなければ、エイリアンはあなたを排除するだろう。純粋なハートで入りそこに住む人のみが許可される。この地区に住むようになっている人々は正しい時間がやってくればすべて集まるよう明確なメッセージを受け取ることになっている。

安全な土地ではエイリアンがその場において外の世界から住人を守る。居住者に危害を加えるいかなる人、組織、グループからもエイリアンは安全地区に住む住人を守るだろう。変化の時には、もしかしたらガイドし助けるためにエイリアンは我々の間を歩くかもしれ

ない。未来の可能性としてエイリアンに見せられたのは、破壊から安全でいられる素晴らしい土地は沢山あると言われた。しかしこれらの地区ではエイリアンは助けにこないで、自力で生き延びなければならない。もしかしたらある人々には種を渡してくれるかもしれないが、彼らは外の力から守るためにそばにはいないだろう。あなたは自分で身を守らなければならないのだ。

他の安全な土地はどこだろうか？エイリアンは世界中にあると言っていた。自分の地区で人を探して見つけてほしいー元々住んでいた人々で光を持っている人達を。あなたの地区にも先住民族がいるだろう。彼らは高いスピリチュアル性を保っており、別の世界への強い信仰と、すべての命を聖なるものとして維持し古代の儀式を保っている。古代からの信仰に基づいた儀式や祭祀を保持している。同じ地区で数千年の間平和的に住み、地球とすべての生命を尊重している。古代の人々は惑星中にいる。数千年の間土地を守り古代の信仰を保ち続けている。彼らは世界中にいる安全な土地の保護者だ。彼らはあなたの土地の智慧の保持者でもある。人類のシャーマンであり、スピリチュアルリーダーだ。あなたの住む場所に昔から住んでいる人を探してほしい。そこにはあなたの安全な土地があり、その土地はエイリアンによって終わりのときが来たら守られるだろう。

これらの地区は組織化された宗教によって管理されていない。世界にある宗教は自分達の土地を持ち、人が神を理解するのを助けてはいるが、私が話している知恵の保持者ではない。この知識は地球についての理解や雨のしずくと草の葉と宇宙との関係に対する理解だ。組織化された宗教は、これらの概念を教えようと試みるが、あまりにも多くの人間の考えや理想に従いすぎており、理解が取り払われている。

誰の信仰にも従わないこと

偽の智慧の保護者と光に混乱しないでほしい。我こそがと主張する人々は大勢いる。しかし彼らは間違った預言者だ。信仰を口ごもらない人のみが本当の預言者だー伝統を維持するために戦い、それに成功した人たちのことだ。

世界中で多くの人が自分たちの信仰と光を無くし取り戻そうと葛藤している。悲しくも、

彼らは信仰の理由を忘れている：終わりのときに惑星のリーダーとなることを。彼らは知恵を取り戻そうと葛藤するが、かつて理解していたものを回復してもその仕事はすでに不可能だ。預言者と地球の教師としてかつて持っていた智慧は消滅した。しかし彼らは真実の知恵を毎日の中で回復でき、そうすることで、新しい世界に平和で調和をもたらす生活ができるだろう。

自分が預言者だと決めた人は少なくない。この主張をする人々は謝った預言者だ。本当の預言者はそのような主張をしない。彼らは神の言葉に従うだけだ。それ以上はしない。神は謙虚でいることを求めている。人として予言の力を主張することは、欲望以外の何者でもない。真実は見ようと選択した人によって見られる。個人的な主張で表現される必要はないのだ。全ての物や人に疑問をもつこと―特にあなたの目とハートで欲を感じる人に対して。

UFOコミュニティの中には、エイリアンのメッセンジャーだと主張する人がいて預言者の肩書きを主張している。私の理解ではエイリアン自身が許さないだろう。これを話す理由は、彼らが私に表現したからだ。いかなる人にも従わず、自分だけが唯一という人の考えに従わないこと。これは私と私のメッセージをも含んでいる。私が話したすべてに疑問を持つことをお願いしたい。彼らはあなたに頼んでいる。究極の真実を得るためには、すべてのことに質問し、例外を設けないこと。このプロセスを通してのみ、あなたは本当の答えを得るのだ。

エイリアンはなぜ干渉するのか？ 彼らはどこから来たのか？

なぜエイリアンはこの惑星の人々に対して干渉するのか？そして彼らは何者なのか？私は次のように言われた。エイリアンの中には地下の基地に肉体の形態で住んでいる存在がいる。ある存在は私たちの中に住んでいるがとても似ているので識別することができない。他の次元にいて地球の人々にコンタクトを取っている多くの存在達がいる。他の次元にいる存在たちは、ここにいる人間に対して大きな責任をもっているという。彼らは夢に出てきて我々を教育し導き話しをしているという。彼らは夢の世界とこの世界を同様に維持し

ている。肉体と異次元の存在はお互いにコンタクトをとっており関連をもっている。しかし彼らは実際には異なる存在だ。

長身金髪の存在はまだ知られていない外の力から地球を守るためにここにいる。彼らはここにて惑星の監視もしている。主な仕事は惑星とそこに住む人々を維持する手助けをしている。彼らは私たちや何であれ地球を完全に破壊することを許さない。

肉体をもつ存在の一部は宇宙の他の惑星に住んでいる；我々から相当の距離にある。彼らは地球を旅することができるが、とても長い旅だ。私が言われたのは、長身金髪の一部は今ここにて、他の存在はここに向かっているようだ。どうやって旅するのか、あるいは彼らの世界については、これ以上の情報は与えられていない。

長身金髪の一部はいつも地球の一部であり、地球に生命の種を植えることを手伝った。彼らの言葉を誤解しないでほしい。彼らは神だとは主張していない。彼らは生命自身と神についての優れた理解をもっているが、これは私の理解力をはるかに超えているので説明ができないと言われた。そのため彼らはそれ以上何も話さなかった。彼ら曰く、彼ら自身もまた神を知ろうとしており、常に世界の守護人であるという。これは彼らの存在理由であり、同時に彼らも私たちと同じようにスピリチュアルな成長をしながら学んでいるのだ。私たちとは違う理解のレベルを除いては。

地球はとても特別な場所で宇宙のどんな場所や次元や惑星とも違っているようだ。この星では我々には美のギフトが与えられている。囲まれているすべてのものから離れた存在として分離しているということだ。ライトボディとして存在するかわりに、地球は濃密でとても重いのだ。私たちは周りのほとんどの分子の単体であることを楽しめる。このため静かに座り花びらや蟻を見て、選択すればそこから学ぶことができる。自然にあるものは何であれ近づいて見ることで、完全な宇宙を見ることができ、神にもっと近づくことができる。しかし立ち止まって目を開けたときだけだ。

他の世界/次元では、すべてものがより組み合わされている－例えばテレパシーを通すように。これは他の場所の存在について大いなる理解となるだろう。ここでは我々は分離と未知のギフトを与えられている。皮肉なことにこれがしばしば人が最も扱いにくい－孤独を感じることや、人生は何が起こるかわからない。これは生命のギフトだとあなたが理解

すれば、自分が経験するすべてのことに心から感謝を与え生き始めるだろう。毎日時間を取って、世界の美を見ていよう。どんなに人生が困難だとしても。あなたが自然の中に本当の美を見ることができれば、神の愛があなたの魂に触れるのを感じられるだろう。

私たちがエイリアンにとって重要な理由の一つは、行う全てのことが他の世界や次元に影響を与えているからだ。他の存在領域は私たちとつながっている。あまりにも無視しているので真実が見えていない。もし我々が惑星を破壊したら、究極的にすべての存在をとっても大きく変えてしまうだろう。もし私たちが惑星や自分達自身に危害を与えたら、神に害を与えていることになるのだ。神は本当のすべてのものの創造者だ。過去も未来も。失われたものは2度と戻らない。生命の全体の計画は、そのために変えられてしまうだろう。私はもっとわかりやすいようにこれらを説明することができない。エイリアンから告げられたことだが、幾分この理解は私自身の中にあるものだ。

人間はいかにして作られたか。そしてホピとは何者か？

1988年円盤にのって椅子に座っていた日、人間の創造をスクリーンで見せられ、私たちがどうやって来たかを伝えられた。長身金髪エイリアンはこの惑星とそこに住む全ての生命を創造する手を持っている。彼らはこの世界のケアテイカーであり、私にはっきりと示したのは、私たちの神ではないということだ。

この世界の前に3つの世界があった。

最初の世界ではエイリアンはすべての動物と人間の種を手に取り、世界中にまいた。彼らは忍耐強く人間が形成されるのを見守った。悲しくも長い時間のあとで、以前撒いた生命はシンプルだった。最初の世界はそれ以上進化しないのは明らかだった。大きな悲しみを伴い世界の全ての生命は浄化された。エイリアンは第二の世界の種を撒き始めた。

第二の世界では惑星に生命形態をもっと増やす決定がなされた。再び全ての生命形態の種が創造され、地球中に撒かれた。生命形態のシェルが作られたが、肉体の成長よりも意

識の成長により集中できるようになった。この生命には多くの時間が与えられ、意識のある存在として成長し、スピリチュアルな成長のプロセスが始まった。生命が自分の意識を持つのを待っているプロセスは意味がなくなった。

形成された生命は自分の意識の方に少しも進化しなかった。孤独にしてスピリチュアルな成長と理解を学ばせた。地球で育った動物は基礎の生存能力を持った殺人兵器以外の何者でもなくなった。お互いに争ったので、再び最初に種をまいた時から進化していない生命形態は除外される決定がなされた。このため人間は新しい世界に行くのに肉体を与えられスピリチュアルな成長にフォーカスできるようになった。

人間の存在理由は、全ての生命の意識を与えることで、残りの創造の場所で彼らが人生の異なる側面を楽しめるようになることだ。人々がこれができる理由は、人間として、全てのものの一部になるよりも、単体の意識の状態で変化していくことができるからだ。宇宙の知識とスピリチュアルな理解は人間の織物に作られた。

このプロセスは長い時間がかかり、注意深く考慮する中で、動物の生命が第三世界では基本的な意識をもつことが許された。人間の創造にはもっと考慮がなされた。エイリアンの意図は個人の魂がスピリチュアルに進化できることで、地球の外にある全ての生命形態がこの地球を訪問し、人間の体を乗り物として使うことができるようになった。

第3世界はユートピア社会のような形で始まった。それはとても美しく計画され、男性と女性として生きる経験は其中で住む個人の魂に経験したことのない方法でたくさんの洞察を得る事を可能にした。多くの人間がそれを悪用するまではうまく行っていた。彼らは体の外側に対する沢山の知識があり、自分の住んでいるシェルが一時的で死んで惑星を去った後も生命が続くことを知っていた。しかし不運にもこれらの人々は感情的にもスピリチュアルな面も成熟していなかった。

そのとき人間は自分達や動物の創造を変え始め、第3の世界は崩れ始めた。地球に調和して生きないばかりか、肉体を持って地球にやってきた存在達の中で、外見を変え人間の体を変え始めたものもいた。結果はみじめだった。恥もなくひどい実験が行われた：独裁者が出現し惑星に不満が起こり始めた。第3世界は平和的なものから暴力に変わり、完全なものからグロテスクになり、地球を破壊的な力で浄化しようという決定がなされた。ス

スピリチュアルな成熟が欠けていて、責任を伴わない知識だけがありすぎて、ネガティブな力によって世界が混乱に陥った。

人間の目的は自由意志に従い個人の魂のスピリチュアルな成長であるが、宇宙の全ての理解を与えられれば明らかなのは、地球に住むことが素晴らしいものではなくなっていた。彼らは破壊されないと考えていたので、楽しみながら考えもなく自分の欲しいものを何でも創造していた。彼らは闇の悪魔の力を地球に働かせていた。

惑星からこのひどい悪魔が浄化されようとしていた。第3世界からいくつかの知識を取り上げ、人がゆっくりと知識を理解しながら成長しより成熟し、責任を持って生きるようにされた。彼らは新しい人間となり始めた。この選択の最中惑星の至る所にクリエイターが意図することをそのままやっている人々がいた：地球に調和して生きていた。彼らは惑星のスピリチュアルリーダーであり、過去と現在と未来を理解しながら平和的に存在していた。彼らはいかなる人も何をも傷つけず、宇宙の法則を元に喜びと共に行動していた。

これらの人々―純粋なハートの持ち主―は第3世界から第4世界に連れて行くことが決定された。彼らは惑星からエイリアンによって連れて行かれ世界が浄化され再び今の第4世界の地上に住むことができるまで安全な場所に保護されることになった。

第3世界を見せられたとき当時惑星に住むスピリチュアルな人々を見た。彼らは千里眼で智慧の保持者だった。彼らは第3世界から連れて来られた唯一の人々と言われた。彼らがこの世界に連れて来られた時、前の世界知恵とスピリチュアルな知識を保持するように伝えられていた。彼らはこの第4世界の終わりのときまで知識を保持するように言われていた。彼らはこれらの知識を維持し、この世界に次から次にやってくる人達に教えるように言われていた。過去の世界で起こったことが再び起こらないように。彼らは終わりのときに、この第4世界で人を集めるように言われていた。彼らが再びこの世界から次の世界に連れて行かれる時まで。私はある日この人達を見つけるだろうと言われた。彼らは集まりのときに選ばれるだろう。集められる人達の一部は地球の安全な土地に留まり、一部の者はエイリアンに連れて行かれるだろう。これらの人々は次の世界までエイリアンの世界で安全な場所を与えられる。第5の世界が安全になったときに。

キームズキャニオンでホピの男性にあった日、彼らの目にスパイラルを見た。彼らは第

3世界からこの世界に連れて来られた特別な人々だとわかった。その瞬間から彼らは何者かわかった。彼らは最後の世界の智慧の保持者であり、次の世界を約束されていた。彼らは世界中の人達にとってとても大事な存在だとわかっていて。彼らは一緒に立ち上がり、この惑星の人々に影響を与えるパワーを持っている。彼らはこの仕事を与えられ、この世界に入るときにこの責任を受け入れていた。このため彼らは儀式を保持しているのだー私たちのためにー過去、現在、未来の人類のために。地球とそこに存在するすべてのもののために。彼らは完全な宇宙を保持する責任を受け入れており、すべての中心を保持している。彼らはーホピ族はー過去、現在、未来の人類だ。

ホピは地球上に親戚がいる。彼ら孤独ではない。彼らが第4世界に入ったとき、地球中に分かれた。これらの人々はみな智慧の保持者だ。これらの人々が集められる時、その時だけ世界は聞き入れる。保護者は第3世界のスピリチュアルセンターからやって来ている。ある者たちはこの世界により智慧を持ってきており、またある者は誰よりもエイリアンから教わっている。ネイティブアメリカンのホピ族は第三世界からやってきた中で最も高いスピリチュアルレベルの人々である。このため彼らはこの知識をこれほど長い間この世界に維持している。彼らは強くパワフルな人々で、自分が何者でどこに行くのか覚えており、彼らの信仰と伝統様式に立ち向かうことを許さない。彼らは与えられた仕事の重要性を理解している：地球の人々にすべてのものと調和して生きること。彼らは第4世界から第5世界にはいる終わりのとき、人々を導くのだ。

もし彼らがエイリアンが戻るまで知恵を保持し続けたならば、彼らはこの世界から次の世界には連れていかれない。もし彼らが失敗したら彼らは選ばれる中から洩れるのだ。人類は消滅し今日知るようには存在しなくなる。すべての人々は地球から一掃され、最初からやりなおすことになる。人々は立ち止まり、本物の知恵の保持者から話を聞くだけでなく、彼らの知恵に応じて行動すべきなのだ。もし私たちが彼らの智慧の言葉に従うのであれば、みな素晴らしい平和の中に生き、満足し新しい世界の中で調和するだろう。

終わりの言葉

この章の冒頭で述べたように、私は地球上で最も長い内容の本を書くことができます。
しかしまだエイリアンが与えてくれた情報をすべて伝えることはできません。

私たちは孤独ではないと知ることは最初のステップです。あなたがそのことを受け入れたなら、次のステップは事実に基づいて動くことです。あなたの人生と全ての生命を尊重してください。地球を尊重しながら人生を生きてください。もしあなたがこれをできれば、自分自身を傷つけ、他人や地球や他の次元の存在や世界を傷つけることはないでしょう。あなたは神の創造物です。知識をもって責任をもって行動してください。

最後のメッセージはシンプルです：私たちは孤独ではありません。古代文明とエイリアンの知恵を聞いてください。両方とも新しい人生の方法に向けて私たちを導いています。神の計画があります；エイリアンの姿は神が創造したすべてのものを保護するセーフガードです。彼らがやって来たとき、怖れる理由はないのです。

空を見て青い星が現れるのを見ていてください。

ユートピア

目を閉じて 目の前にある 宇宙を見る
単細胞からあらゆる生命体が力強い色を発している
本当に発見される期待に満ちている
ユートピアに導く黄金の光の道に沿って歩こう
世界の色と語られる言葉の感情
それは始まりで終わりは来ない
世界のシャングリラはひとつになる
あなたの前に宇宙が横たわる
ひとつの息に静けさを吸い込む
この他の世界に 名も無い未知なる場所がある
頭の中であなたとして現実となる
あなたなしにはかつてのように消滅する
そこには未知の世界がある
この避難所を通り次でつまづくまで
目を閉じて神秘の世界に行こう
人間よりも多くの生命が見える
目を見開いて道を歩こう
彼が尋ねる場所からは土地や人しか見えない
彼らは未知なる土地ユートピアからやって来た
魂が生まれた場所
命が終わり生まれたところ
シャングリラと呼ばれる場所
シンプルな旅行者だけがたどり着ける
黄金の光の道を見つけた者だけが
恐れずハートに愛をたずさえ
少数が喜び向かう道
自己の美
十分な高さに届くため
そして未知の世界に踏み込もう…

青い星の預言

カナダのブリティッシュコロンビア州にある小さな町に住む一人の女性がどのようにして今この惑星で最も語られている預言『ホピ族の青い星の預言』と関わることになったのか？

1988年無人のハイウェイで長身金髪エイリアンと遭遇した後、彼女の人生がどのようにして完全なる変貌を遂げたのか

ミリアムの旅はシークレットガバメントやクローン、ロシアサイキックアカデミーからのスカウト、古代のホピ族とエイリアンとの遭遇へとつき進んでいく

やがて家族の秘密へと導かれる；父親が金髪エイリアンと何らかの関わりがあり彼女が生まれる前からコンタクトは行われていた。

エイリアンの実在は始まりに過ぎない…

彼らがこの世界とどのような関係があり、なぜ地球の人々とコンタクトを取っているのか
将来の可能性として人類の種の存在に危機が迫っているという警告を彼らは発している

本書を読みこの世界が終わりを迎える時、安全な場所がどこにあるのか、なぜエイリアンのメッセージが今私たち全ての人々にとって重要であるのかを学ぼう！